
逆ハーツ子 が あらわれた！（仮）

片岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆ハーツ子 が あらわれた！（仮）

【Zコード】

Z9530X

【作者名】

片岡

【あらすじ】

ある日やつてきた逆ハーツ子に関わることなく（多分）、我が道を往く調理部男子とパソコン部女子の阿呆なお話。関わらせるつもりはなかつたのに、最近はガツツリ絡んできます。病み注意！

私と友人のリレー小説です。

挿絵はいちのさんの提供でお送りしています。

目指せ一日一話更新。

「わあっ、ありがとうー！」

川の物語

「本当? わたしもみんなの」と、だあこすきー。」

ある日、学園に突然転校してきた可愛らしい女の子が繰り広げる愛の物語……

「な、なんだ！？」「どうした！？」

などではなく、

「電子レンジにいれた卵が爆発しました！」

「馬鹿野郎！お前、あれほど電子レンジで茹で卵は作るなど……」

「おい後ろに隠した無残な卵が先生には見えたぞ広崎」

「違います先生！　これは俺の愛に耐えきれなかつた卵が爆発して……」

「意味のわからない見え見えの嘘を吐くなああああああああ……！」

その女の子の脇で繰り広げられる、

「先生！　どうぞ俺の愛を受け取つて下せ……」

「先生はそんな壊れた愛は要らない」

阿呆な物語で御座います。

1 調理部男子 2011・12月15日挿絵追加（後書き）

あまりの短さに絶望した！

2 パソコン部女子

力タカタカタ

パソコンを早打ちして、ふと手を止め次をどうしようか考える。特に何をやるとも決めてなかつたので、ずっと先の文化祭のポスターを創ることにした。
まあイラストは適当に誰かに頼もう。

「坂田先輩、ちょっと……」

思わず溜息。

また新入生がやらかしたようだ。
入部するとき下手とは言つていたがここまでとは…、ちなみに本日六回目だ。

まあ募集のとき『どんな人も大歓迎』とやつたからこつちも文句は言えないし、私は副部長だから教えない訳にもいかない。

「今度はどうよ。え、ここはさつき……」

部長が最近休みがち、というか大抵休んでる気がする。なんで部長になつたんだと言いたいが他に人がいないから仕方ない。

「あー、また間違てる。だからここはこれを使えば……！」

部員数、私入れて8人・

今日も新入生相手に奮闘中です。

人物紹介（前書き）

結構適当な紹介です。 隨時更新。

人物紹介

名前・広崎 大和

容姿・黒髪茶目。イケメンで良いよ。爽やか

性格・阿呆の子。

備考・思い切り運動部で青春してそうなのに調理部

名前・坂田 美穂

容姿・一言で言えば可愛い。黒髪のツインテールで目は焦げ茶。

性格・真面目で勉強熱心。運動は全く出来ない。不器用

備考・料理が苦手。パソコン部に入っている。風紀委員らしい

名前・にかい一階堂

容姿・それなりにイケメソ

備考・調理部顧問。愛煙家

名前・椿 小百合

容姿・栗色の胸までのカールした髪に、琥珀色の零れ落ちそうなほどに大きい瞳。“絶世の”がついても可笑しくないくらいは美少女。

性格・ちょっと歪んでる。

備考・イケメン大好きなのを包み隠そつともしない残念な子になってしまった。可笑しいな。当初はもうちょっと賢い子にしようと思つてたはずなのに。全ては私の友人のせいです

名前・園下

容姿・不明

性格・陽気……?

備考・美穂の担任兼部活の顧問

名前・宮城

みやぎ

容姿・フツメン

性格・阿呆

備考・大和のクラスメイトで友人。大和の後ろの席

名前・本多

ほんだ

高志

たかし

容姿・イケメン

性格・阿呆

備考・美穂のクラスメイト。野球部キャプテン。

大和をどうしても野球部に入れたいけどぶつちやけ一年生からじや
遅いと思う

名前・**夏輝**なつき

容姿・普通に美人。ショートカットで伊達眼鏡。

性格・阿呆

備考・パソコン部部長で生徒会長とは親友。少しレズつ氣がある。

名前・**菖蒲**あやめ

容姿・かなりの美人。髪は肩までの長さ。

性格・控えめ。大人しい子

備考・生徒会長。小百合が来るまでは男子の中で一番人気だったが、夏輝が傍にいるから彼氏は一度も出来たことがない。レズつ氣有。

名前・**青山**あおやま

容姿・ちょいイケメン。髪の毛ピンとかで止めてそうなイメージ。
何故か

性格・阿呆。レンジでゆで卵を作るのが大好き

備考・名前出すつもりはなかつたんだけど、無いと何かと不便だと
気付いて急遽名前有キャラに。松島と仲が良いが、其処に恋愛感情
が含まれているのかは不明

名前・まつしま松島

容姿・ちょい美少女。髪の毛はポニー・テールなイメージ。何故か

性格・青山と同じ

備考・青山と同じ

名前・奥おく惠斗けいと

容姿・イケメン

性格・腹黒かつたら良いね

備考・生徒会副会長。しかし、今は仕事をさぼっている。越戸と二人セツトで生徒会の夫婦

名前・越戸 義樹

容姿・イケメン

性格・俺様に出来たら良いのにね。出でくるかわからないけど。出てきた

備考・生徒会会計。しかし、今は仕事をさぼっている。奥と二人セツトで生徒会の夫婦。俺様にしようとして一人称が俺様になってしまったあいたたくな子

名前・釜元

容姿・顔が残念過ぎる上に背が低い

性格・すつじい真面目

備考・真面目なのに顔が残念だから女子に避けられている。誰もい

……もうちょっと良いキャラにしてあげれば良いの
でないことじゅうで泣いてるとか泣いてないとか

名前・音波おとは

容姿・何処にでも居そうな普通の人

性格・朗らか。中国の歴史のことになるとなんか燃えはじめる

備考・理科担当の先生。中国の歴史が大好きで語りはじめるところ止ま
らなくなる。何故理科をやめてしまったのかは不明

人物紹介（後書き）

私が新たに出すキャラは何故か阿呆が多い。

3 調理部男子（前書き）

何故か今回に限つて新しい書き方に挑戦してみよがなんて思つてしまつたので三人称視点になります。言葉は合つていますか？というわけなので、私の書く視点は広崎を中心として見た視点（？）だと思つて下さい。

説明下手だな。

3 調理部男子

「えー、今日は柏餅かしわもちを作りたいと思います!」

キツと無駄に凜々しい表情を作りながら、大和は部員たちに柏餅のレシピの「コピー」を配った。簡単な説明をしようと口を開いた大和だったが、それを部員たちの不満の声が遮つた。

「なんでそんな渋いもんばつか作りたがるんスか部長は」「えーっ! もっと美味しいもの作りましょーよーっ! ガトーショコラとかー、シフォンケーキとかー!」

今時の若者らしい部員たちに柏餅はお気に召せなかつたらしい。大和は残念そうに眉を下げ、じゃあ、と口を開く。

「今日はみたらし団子を作りつか」「「変わらない!」「おーっす、やつてるかー?」

部員たちがまたも大和に抗議しようと口を開いた瞬間、調理室（兼部室）のスライド式のドアがガラリと開いた。部室中の人間の

注目を集めながら入ってきたのは調理部顧問である、一階堂だつた。
にかいどう

先程まで教師専用の喫煙スペースで煙草でも吸っていたのだろう。

か。少々臭う。大和は眉を顰めた。

一階堂という男は、何故教職に就いているのか理解出来ないほどには容顔の整つた男である。

大和は常々思う。この男ほど調理部顧問といつ肩書きが似合わぬ男はないだろう、と。しかし、大和は自分のことは言えないということに気がついていない。

一階堂はコツコツと靴を鳴らしながら大和に近付き、手元のレシピを覗き込むと器用に片眉を上げ、顔を顰めた。

「今日は何作るんだ？……んん？……また和菓子か？好きだな、お前も」

「美味しいでしょ」

「美味いけどな」

「でもよお……、と一階堂が言つ。

「美味しいからつて理由で好きなもんばっか作るのは違うだろ？況してやお前の独断で選んだもんばかり」

「……そうか。でも……、うーん……。……うん」

「でも、あいつらだつて好きそうな味だ。でも、うーん、どうしよう。額に手をあて、暫し考え込んでいた大和だったが、ようやつと納得がいったのか小さく呟いた。

一階堂は小さく笑つた。悪い奴ではない、と。素直な良い奴だか

ら憎めない。色々と得な奴である。

また大和が口を開く。

「じゃあ、今日はアプフルシュトウルーテルを作ろうつか」

「やつた！ あふ……、ええ！？」

「なにこの衝撃。普段縁側に座つてぼやぼやしてお爺ちゃんがいきなり流暢に流行語を使って喋り出したようなこの衝撃」

「もう先生お前がわかんない」

いきなりあまりメジャーではなさそつた洋菓子の名前を出した大和に、待ち望んでいた洋菓子のやつとの登場に喜んでいた部員たちも困惑顔だ。一階堂は微妙な顔をしている。案が極端すぎるのが大和の特徴である。

「シュトゥルーテルは生地の下に新聞を置いて読めるくらい薄くしたもので、それで林檎を煮たものを巻くんだ。美味しいぞ」

「へー、よく想像出来ないけど美味そうッスね」

「ロールキャベツの林檎バージョンみたいな感じですかー？」

問い。そして僅かな沈黙。

「まあ、だいたいそんなものだと思つてれば良ことと思つ

「適当だな、おい」

「腹に入ればなんだつて同じだ！」

「それで良いのか調理部部長」

一階堂の突つ込みを気に留めることなく、大和は言った。

「じゃあ、俺はパソコン室でコピーをとつてくれるから、少し待つてくれ」

「はーい」

部員たちの軽い見送りの声を受け、大和はパソコン室へと向かつた。

大和はパソコン室の扉をなんの躊躇いもなく開け放つた。中に誰かいいるかもしない。そんなことは一切考えないのが大和の特徴である。パソコン室にいた後輩と思しき生徒は驚きに情けない悲鳴を上げていた。

その声に大和は僅かに目を大きくした。小さくすまないと詫びの言葉をかけてから、パソコン部部長である美穂に声をかけた。

「美穂、パソコンとコピー機を借りるだ」

一心にパソコンに向かい休むことなく手を動かしていた美穂は、大和の声にその手を止め、顔を上げた。

「大和。……すぐに済む?」

「済む」

「じゃあ、私の使っていいよ」

「ありがとう!」

機嫌が好さそうににっこりと笑った大和は早速マウスに触れ、レシピの検索を始めた。

「あふ……、なにこれ?」

「ア�플 シュトルーデル。上手く出来たらお前にも持つてきてやろうか?」

「うん」

「わかった」

頑張って作るから、楽しみにしてろよ、と大和は続けた。美穂のすぐ傍で作業をしていた後輩はその様を意外そうに見ていた。手早くコピーのための動作を済ませ、コピー機の前に移動する。少しの間を置いて、コピー機は音を立ててレシピを吐き出した。やつと人数分の「コピーが出来上がり、大和はそれを持ってパソコン室から出た。

今度は後輩を驚かせないよう、そっとドアを閉めていると、後輩の小さな声。

「……先輩つて、彼氏いたんですね」

「……、は？」

美穂の感情の読み取れない声。大和は閉めかけていたドアを開けて言った。

「違うぞ？」

「ひやああああつーー？」

後輩はまさか大和がまだいるとは思わなかつたのか大きな悲鳴を上げた。美穂も驚いた顔でこちらを見ている。

その余りのリアクションの大きさに逆に大和が驚かされながら、今度こそパソコン室を後にした。

それに対して、と大和は思う。

「あの後輩は、俺たちの何処を見て恋人だなんて思つたんだらう…

…？」

しかし、そんな大和の些細な疑問は、眼前のレシピによつてすぐには埋め尽くされてしまつたのであつた。

3 調理部男子（後書き）

一話との差はなんだらうか。

4 パソコン部女子

帰りのホームルームの挨拶では大抵の奴は、寝る、早く終われといライラする、の一種に絞られる。

私は勉強するという別の種に入るのだが。

まあ、ろくに自分の話を聞いていないことを担任は知らない。

まあ、この可哀想な私たちの担任の名前だ。名前は呼ばないから忘れた。

「以上！ 気をつけて帰るよ！」

みんながビクリと身体を震わせる。声が馬鹿でかいから仕方ない。それはともかく、先生が去ると一人の女子の元に人が集まる。

「小百合ちゃん、今日は俺と帰ろうよ！」

「馬鹿が、お前は。小百合ちゃんは俺と帰るんだよ！」

「や、小百合ちゃんは僕と帰るんだよね……？」

「わたし、みんなと帰りたいなあ」

「……小百合ちゃん」「

語尾にハートが付きそうなほどだらしない声が聞こえる。
それもこれもある口突然転校して来たこの女が原因だ。

椿 小百合、それがこの元凶の名前だ。

噂では彼女が来るまでの元気N.O.・I.だつた生徒会長が一日で抜かされたとか。

今では写真部の奴らがストーカーの様に彼女を追い回すといつ。

ちらつと横目で馬鹿な男子を見る。

彼女がイケメンが好きとほざいたおかげで今は男子は校則違反スレスレの恰好だ。

彼女に狙われた可哀想なイケメン男子は様々な手を使って落とされるといつ。もう大体のイケメンは彼女の手駒らしい。

「馬鹿馬鹿しい、脳が腐りそう……」

小声でそぼやく。

小百合ちゃん親衛隊（なんで出来たんだ…）に聞かれれば半殺しにされるだろうか。まあ、返り討ちに出来ないことは無いと思うが。美穂はどうせ今日も来ないのであろう部長の代わりにパソコン室を開けるため、逃げるよう教室を後にした。

.....

今日も文化祭のポスターを創るべく、手早く文字を打ち込む。イラストは上手い奴に描いてもらい、既にバックになつていてる人が寄つて来そうな適当な文面と日にちを打ち込んでいると、壊れそうなほど大きな音を立ててドアが開かれた。

こんなことを堂々と毎回出来る人間は私が知っているかぎり一人しかいないからそう驚くことではない。しかし、新入生は予期せぬ訪問に驚いたのか悲鳴をあげていた。

いつもの事だから早く慣れろ、身が持たないぞ。

「美穂、パソコンとコピー機を借りるぞ」

その声で手を止め見上げればそこにはいるのは大和だった。いつも通りレシピの事だらう。

「大和。……すぐに済む？」

「済む」

「じゃあ、私の使っていいよ」

「ありがとー！」

笑顔が爽やかだ。

そういうえば大和もイケメンの部類に入るのではないだらうか。
変な奴だから噂も広がっているはずだ。よく椿のターゲットにならないものだ。

そこは持ち前の運というか何と言つか。

そんなことを考へてる間にさつさと大和はレシピを調べる。

「あふ……、なにこれ？」

「アッフェルシュトゥルーデル。上手く出来たらお前にも持つてきてやろうか？」

長くてすぐには読めなかつた。それを簡単にサラッという大和。
私はお菓子は好きだが自分で作ることが出来ない。なのでよく和菓子を創る親友、もとい料理部部長に時々貰つてゐるのだ。

だから私がこの話を断る訳もなく。

「うん」

「わかった」

簡単な会話で終わらせる。

いつも誘ってくれるから私の事をよく分かっていると思つ。
頑張つて作るから、楽しみにしてるよ、と大和に言われて素直に頷く。

ア�플ショットウルーテルと言ひ食べ物がなにかは知らないが期待は持てる。

さすがになれて、いるだけありあつといつ間にコピーするための操作を終わらせるとコピー機の前に移動し、枚数が揃うと出て行った。それを待っていたかのようにお騒がせな新入生が口を開く。

「……先輩つて、彼氏いたんですね」

「……、は？」

待て、どじをどう見たらそうなるんだ。しかもそれじゃあ私に彼氏が出来たことが無いみたいじゃないか、いや、まあ、出来たこと無いけどや。

いろんな意味を込めていつもより低音で返すと怯えた。失礼だな。

「違うぞ？」

「ひゃああああつー？」

新入生の悲鳴が響く。頭痛くなるから毎回大声上げるの止めて。
というかまだ居たんだ、大和。

それだけ言つとまたドアを閉めて行つた。本当にそれだけ言いたかつたのか……。

溜息をついて、固まる新入生を一瞥してからパソコンに戻つた。
まら文化祭のポスター創りを続ける。
新入生はやつとパソコンに戻つたがまた上の空だ。

「…」

やつと完成したポスターを試しに一枚印刷してみる。なかなかよく出来ていると自分でも思つ。今年はこれでも良いと思つべういだ。
早速顧問に見せに行く事にした。

……

「失礼します」

断りを入れてから職員室に入り顧問の元へ向かう。

「おひ、坂田…どうした、何か用か」

「園下先生…。文化祭のポスターが出来たので持つてきました」

顧問は私の担任の園下先生。この人も部長と同じで部活に殆ど出ない。前に何度か来るようになつてみたが変わらないので既に諦めた。

「ん、どれどれ……。さすがは坂田だな！今年はこれで決まりだ！」

本当この人は審査が甘いと思う。数秒しか見てないだろ、あんた。

「はあ、どうも」

「いや、坂田は入ったときから腕が良いよなー何しろ、」

「あ、私失礼します」

そのままポスターを置いて逃げるよつに職員室を出て行った。あの様子じゃ長話になるのは明らかだ。

溜息をついてから最近溜息が多いことに気付く。何といっても私の周りはお騒がせな人間やはちゃめちな人が多すぎる。

せめて何かを食べて疲れをとるつと思い大和が持ってくる今日の料理に期待した。

4 パソコン部女子（後書き）

いつも、片岡さんの友人です。

片岡さんに勧められてしばらく前に小説を書きはじめました。
まだまだド素人なので内容も薄いし、表現も下手ですが、こんな私の小説を見続けてもらえるとド素人としては幸いです。

椿 小百合視点 1（前書き）

今回は片岡が書きました。

ぐだぐだと誰もがわかりきつてこりであります注意を繰り返す男園下を見て、小百合は周りに語られぬよう、小さくため息を吐いた。退屈だ。帰るときに寄り道はしないようにだとか（今時守る奴もない）だらうと思う）、交通事故には氣をつけろだとか、小学生ではないのだからわかつていい。

「以上！氣をつけて帰るよ！」

園下の馬鹿でかい声が鼓膜を震わせ、小百合は不愉快そうに目を細めた。

が、それも一瞬のこと。すぐに小百合は可愛らしい笑顔を身に付けた。途端に席の周りに集まる男たちに、小百合は満足げにこりとした。

小百合ちゃん！小百合ちゃん！今日は俺と…いいや俺と…うつん、僕だよね！？ねえ小百合ちゃん！ねえねえねえ…！

（うああ…幸せ…！）

小百合は自分の心が狂喜の色に染まっていくのを感じた。抑えき

れない笑みが口許まで上ってきて、満面の笑みを披露する。それすら周りの男たちは魅入ってしまつたのだから、楽しくて楽しくて堪らない。

小百合は自分の名前を呼ばれるのが好きだった。呼ばれれば呼ばれるほどに、自分が必要とされているのだと感じることが出来るからだ。

群がる男たちの言葉に適当に愛想笑いを返しながら、小百合は自分に突き刺さる幾多もの視線を感じた。しかし、小百合はそれを意に介することなく、笑ってみせた。

羨ましいのだろうと、妬ましいのだろうと。小百合は敗者共を嘲り笑つた。

男には媚を売つてやり、女には嘲笑を。
女など、気にしてやるだけ時間の無駄なのだから。

小百合は、そつと呟いた。

「だつて、此処はわたしの世界」

可哀想で可愛い自分に、神様が与えてくれた世界。わたしの、わたくしのために創られた、わたしだけの世界。神にすら、愛された存在なのだと。

「わたし、みんなのこと大好きだよ！」

だから、わたしだけを愛せ。

小百合の美しい笑顔の裏に隠されたのは、いつたいなんだつただ
るつ。

椿 小百合視点 1（後書き）

今回はちょっと短め。

隠されたもの。本性はもう丸出しだから……。

5 講義録稿子（前書き）

なんだか書いてて私が楽しいだけの話になってしまった。

大和は今、悩んでいた。

未だかつてないほど、猛烈に悩んでいた。

眉間に皺を寄せ、いつになく真剣な表情につつかり胸をときめかせる者が続出するほど、悩んでいたのだ。
机上に広げたレシピを見て、大和は重々しく呟いた。

「苺大福か、それとも栗饅頭か……」

その呟きを偶然聞いてしまった大和の友人　宮城が呆れたよう
に言った。

「また和菓子か」

その声にやつと自分の傍に宮城がいるということに気がついた大和はフッと顔を上げ、宮城を見た。

「なんだ、宮城か」

「なんだってなんだよ、なんだって。ムカつく奴だな」

大和のあんまりな物言いに額に青筋を立てた宮城を華麗にスルーして、大和は訊ねた。

「何か用か？」

「ああ、忘れるところだつた。本多^{ほんだ}がまた来てたぞ」

「本多が……？」

うんざりといったような顔の大和が嘘であつてほしいという思いから再度訊ねても、返つてくるのは領きだけ。大和は深くため息を吐いた。

本多は野球部のキャプテンを務めている男である。彼は入学当初から類い稀なる大和の運動神経に目をつけていた。だが、当の本人は一番最初に声をかけられた調理部に菓子類が好きだということもあり、あっさりと入部。彼が悔しさに涙を流したのを知る者は多い。

しかし、彼は諦めなかつた。

大和が調理部に入部したその日から、彼の大和への熱烈なアタックが始まった。

ある時は昼食に誘い、それとなく野球の話題を出した。ある時は大和のその才能を野球に生かすことがそれだけ素晴らしいことなのか、ということを思いつく限り恋する乙女ばかりに綴つた手紙を何枚も書いては靴箱に忍ばせた。

いくら鈍い大和でも、これはさすがに気付いた。

この男は、自分を転部させようとしているのだと。

ノリと勢いで入ってしまった部とはいえ、何日も過じせば愛着というのも湧いてくる。

大和は「ゴキブリのように何処からでも湧いてくる本多に対抗して殺虫剤を持ち歩いた。そして少しでも野球の話をし始めれば、容赦なくスプレーをその顔面に吹き付けた。一歩間違えれば虚めに発展する大問題である。

だが、本多の執念は大和の頑固さの軽く上を行つた。本多は何日かしてからガスマスクを購入し、大和に話し掛けるときには常にガスマスクを着用した。

大和も、やつぱり頑固だった。もう素直に野球部に入ってしまえば楽だろうに、それだけはどうしても嫌だった。今度はそのガスマスクを剥ぎ取り、スプレーを吹き付けたのだ。

まだまだ負けていないのが本多だ。本多は翌日、懲りずに大和に話し掛けた。大和は既に手慣れた手つきで本多のガスマスクを剥ぎ取った。

瞬間、大和に戦慄が走る。

なんと、本多はガスマスクを一重に装着していたのだ。

しかし、怯んだのはたつた一瞬。^{ひる} そのガスマスクもやがて大和の手によつて剥ぎ取られた。

そして剥ぎ取られては増やし、剥ぎ取られては増やし、大和がいつぺんに剥ぎ取ったマスクが二十を超えたところで、とうとう諦めた。

今では苦手ではあるが、普通の友人のように接し、野球の話をし

始めれば横つ面をぶん殴つて無理矢理話を止めさせるといつ関係に収まっている。

しかし、前述したように、友人として認めてはいても、苦手なものは苦手だ。大和は嫌そうな顔で教室の出入口で立ちはだかる本多のもとへ向かつた。

「広崎！ 野球部に入る決心はついたか！？」

「富城、ハゲが何か寝言を言つてゐる」

「俺を巻き込むな」

「誰がハゲか！！」

本多は常にハイテンションな男だ。こんな朝っぱらから相手をするには少々ウザすぎる、大和は不快そうな顔を隠しもしないで教室のドアを勢いよく閉めた。一瞬で開けられた。

「何故ドアを閉めるか！」

顔を真っ赤にして怒鳴り散らす本多。大和はピクリとも表情を変えずに懐かしいメロディで歌い始めた。

「もしもお、頭髪があ、生あええたあならああ～」
「なんだその不愉快な替え歌は！ 俺は禿げてなどおりんと言つておろうが！ ただ人より少し髪の毛が短いだけだ！！」

だいたい、お前も俺より少し長いくらいではないか！と本多。そろそろ教室中の人が余りにも喧しい本多を睨み始めたところで大和が訊ねた。

「用はそれだけか？」

「そうだ！」

「帰れ」

大和は無表情でドアを閉め、今度は鍵もかけた、機転を利かせたクラスメイトがもう一方のドアを閉める。

「広崎！　おい広崎！！　開けないか広崎！！」

2・3の教室は、そのまま本多が叫び疲れて帰るまで閉ざされたままだつた。

「ところで、あいつも結構イケメンだよな。大和、どう思つ？」
「何がだ？」

唐突に切り出された話題に大和はきょとんとして、後ろの席にいる宮城を見るために振り返った。

全く話の内容をわかつていかない大和に、宮城は説明をしようとし
て、閉口した。

「いや、良いや。多分、お前にはわかんねえだらうじ。
よく餌食にならねえなって話」

「……餌食？」

ますます話の意味がわからなくなつた、と大和は頭を抱えた。

5 調理部男子（後書き）

凄く馬鹿な話だけじ書いてて楽しかった。

美穂はいつもと比べると随分と機嫌が良かつた。最近はかなり機嫌が悪かつたのだが昨日大和に貰つたお菓子で全て吹っ飛んだ。本当に大和のお菓子は何かしらの力があるようと思ってしまう。それくらい美穂を幸福にしてくれるのだ、あれは。

しかし、そんな幸福はいとも簡単に別れを告げた。

「さつゆつりやーん！おはよー！」

「おはよー、みんな」

ニッコリと笑う椿。

ああ、今日もなのか…。だがこれは私が休むか、椿が休むかどちらかがないと回避することは不可能だ。まあ、自分から休む気などさらさら無いので後者に期待するほかない。

にしても、本当に人気者だな。

別に羨ましい訳ではないが、あそこまでモテる人を見たことが無いから目を疑うのだ。所詮私には関係ないが。

私があの場に居て勉強など集中できる訳が無く私は暇つぶしに大和の所に行くことにした。私は3・1だからそう遠くはない。鬱陶しい男子の声を聞かないように耳を塞いで部屋を出た。

向ひから誰かが歩いて来る。確かにクラスメートで野球部の本多だつたはずだ。騒動を何度か見かけていたので様子を見れば最初から最後まで分かる気がした。

「本多くん……、あなた『ブリみたいね』

「朝から失敬な奴め！」

大声で返してきたからとりあえずは元気なようだ。だが、元々私はハイテンションな奴は嫌いだ。それも朝からだと尚更。

「ちよつと黙つて。朝からうるさいのは迷惑」

「本当に坂田はひつ、もひ？！？」

本多の利き足であるひまつのすねを蹴った。鬱陶しい。教室に居る奴らと同じくらいに鬱陶しい。

「坂田ひ、…お前、風紀委員だろひー。」んなことをして、良いのか？！

「風紀委員だからこそのしつるんだけど？」

「……あ、悪魔！」

私がにこつと笑うと本多は掠れた声でそれだけ言つて蹴られた足（それほど強くは蹴つてないはずだが）を引きずりながら教室に戻つ

て行つた。

悪魔。なんか久しぶりに聞いた気がする。

よくどうしても聞かない奴に暴力を最終手段として取るのだが相手が去るとき、必ず悪魔だとか言われるのだ。

……いつも思うが悪魔と言つほど痛いのか？一応手加減はしているのだが…。

ガラリ、と扉を開けたつもりだったのだが開かなかつた、すると向こうでカチヤリとちよつと高い音。どうやら本多を追い返すために鍵をかけていたらしい、良いアイデアだ。今度使ってみよう。

「大和いる？」

近くにいた生徒（名前忘れた）に手短に伝えるとその子はすぐに呼んでくれた。ただ、なぜかは知らないが宮城がくつついてきた。

「あら、圏外が一人」

「誰が圏外だ、誰が」

「大和、今日は何作るの？」

まるで最初から居なかつたかのように宮城をスルーした。まだ不満そうだが一応口を閉じてくれた。

「苺大福と栗饅頭で迷つてゐるんだ。美穂はどうちが良い？」

まさかの質問返しで戸惑つ。その一択がどちらも和菓子というのが大和らしい。

「昨日はフルーツ食べたから今日は栗饅頭」

「分かつた」

嬉しそうに大和が笑う。大和が笑うとこっちもなんだか優しい気持ちになる。私もつられて笑った。

「お似合いだなあ、美穂と大和は」

一瞬、間。

大和は首を傾げ、私は赤面を隠すためとりあえず宮城のすねを手加減無しで、むしろ全力で蹴つた。
ガスッ、と鈍い音で宮城がしゃがみ込む。
というかいつから美穂って呼んでるんだ。

「み……ほ、痛いだろ……！」

「当たり前でしょ、蹴つたんだから。じゃあ大和、また後で」

「ああ」

宮城をスルーして、自分の教室に戻る。大分スッキリしたから勉強に集中出来そうだ。
教室に入るとき、ちょうど同じように教室に入りうよした椿に出くわした。

なんか睨まれたような、挑戦的な目で見られたような。しかし、教室に入った瞬間それは笑顔に変わり男子に囲まれていった。

それが逆に私の心に嫌な風を吹かせた。

6 パソコン部女子（後書き）

友人「今更ながら小百合ちゃんは難しい.....。
これからたくさん勉強せねば」

何を勉強するのか疑問な私。

椿 小百合視点 2（前書き）

今回は片岡の友人が書きました。

教室に入れば私の周りに男子達が集まつて来る。

みんな私に挨拶をしてくれ、気を引こうと必死にアピールする。今も自分がみんなから必要だ、と言われているようで嬉しくなる。自分が世界一幸福なのだと実感できる。

小百合は教室の入り口になんとなく目を向けると一人の女子が入ってきたところだった。

坂田美穂。転校してきた当初、服装が派手とか、髪を染めるなどが、一々注意してきた面倒な女だ。彼女が風紀委員長だと知ったのは大分後の話だが。

しばらく男子の話を適当に聞き流していると珍しく勉強家の坂田が勉強をしないで教室の外に出て行つた。

坂田が休み時間に勉強以外のことをするのはあまり見たことが無い。だからなのか坂田の行き先が気になり、男子達にお手洗いに行くと嘘を言って引き離し、後を追つた。

近付くことは無理なので遠くから見ていると、坂田はまず本多と話した。

ところが本多には用が無かつたらしくある程度話（と蹴り）をすると彼と別れ、更に進んで行つた。

しばらく見ていると坂田は2・3の教室で止まり、誰かと話をし始めた。

だが、それも極短い会話だった。これ以上は何もなさそうだと思い、教室に戻ろうとした時だ。

2・3から男子が一人、出て来たのだ。特に一人の男子が気になつた。

恰好よかつた。

黒髪で、爽やかな笑顔が良く似合つている。
ほんやりとその男子を見ていて気付く。

あの人を、知らない。

誰、誰なの。あの人は誰。知らない、あの人の全部を。なんで、もう男子は全部わたしのもののはずなのに。わたしはあの人を知らない。

しかも、あの人と坂田が笑い合つてゐる。わたしは知らないのに、なんであの女が知つてゐるの。

坂田が戻ってきた。我にかえつて偶然を装つとして教室に今戻つていくふりをした。

坂田と目があい、睨みつける。しかし、すぐに笑いに戻し、教室に入つて行つた。

あの人をあなたから奪つてあげる。男は全部、わたしのもの。誰か他の人なんて、させない。

自然と口に笑いがこぼれていた。

椿 小百合視点 2（後書き）

美穂は書けるのに小百合ちゃんを上手く書けない……。
これから更に頑張らないとな……。

「わたし、椿 小百合つていうの。よろしくね」

「……？ うん、……うん？」

突如として目の前に現れ、よろしくしてくれという少女に、大和は頭の上にいくつも疑問符を浮かべながら頷いた。大和の視界の端で宮城が苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

唐突。突然。まさにそれだった。なんの前触れもなく、彼女は現れ、大和の目の前で美しく笑ったのだ。

微妙な反応を返した大和に、小百合の美しい笑顔がほんの少し歪んだ。

「広崎くんつていうんだよね」

「ああ、そうだ。どうして俺の名前、知ってるんだ？」

宮城が大和の後方で、小さくストーカー……と呟いた。その声は幸か不幸か大和には届かず、宮城が小百合に壯絶な笑顔を向けられただけであった。

「坂田さんから聞いたの。わたし、坂田さんとお友達だから」

「へえ、美穂の友達なのか！」

「うん、とっても仲良しなんだ」

大和の満面の笑顔に、これまた満面の笑顔を返す小百合。この場面だけを見ればとても微笑ましく、お似合いの二人に見えるのだが、生憎とクラスにいた人間たちには一人の姿は蛇と蛇に捕食されそうになっている小動物にしか見えなかつた。

「ねえ、大和くんって凄く恰好良いよね。わたし、恰好良い人大好きなんだ」

いつの間にか名字呼びから名前呼びに変わつている小百合。しかし、大和はそれを意に介することもなく（気付かず）、言い放つた。

「へえ、面白いなんだな」

大和がそう言つた時、小百合の笑顔が完璧に崩れた。華のかんばせを笑顔で彩ることを忘れ、目を丸くした小百合は、それから取り繕うような不自然さもなく、ただ微笑んだ。

頭のネジが数本吹つ飛ぶどころか消し飛んでいる大和がそんな小百合の表情の変化を気に留めるわけもなく、ただにこにことしてい

た。

「……大和くんは、なんの部活に入っているの？ 運動部……、サ

ツカーとか野球とか、似合いそうだよね

「調理部だ。和菓子が好きなんだ」

「、調理部？」

そうだ、と頷き、大和は逆に訊ねた。

「椿はなんの部活に入っているんだ？」

「わたし、帰宅部なんだ」

「へえ、無趣味なんだな。つまらなくないか？ 人生」

背後で宮城が噴き出した。今度はさすがに気付いた大和が不思議そうに後ろを振り返る、大和の目に映る宮城は何故か蒼褪め、冷や汗を搔いていた。

何か後ろに恐ろしいものもあるのか、と視線を前方に戻しても見えるのは小首を傾げて微笑んでいる小百合。大和は首を捻った。

また小百合が口を開こうとしたとき、物凄い勢いで教室のドアが開き、その拍子でドアが外れてしまった。

大和が嫌々目を向けると、其処には予想通り過ぎてなんの面白みもない男が立っていた。ご察しの通り、本多である。

「広崎い！ 野球部に入れ！！」

「断る」

「……本多くん？」

小百合が困惑の色が入り雑じつた笑顔を向ける。小百合の存在に気付いた本多は目を輝かせた。

「おお！　お前は椿！　我が野球部マネージャー候補の椿ではないか！」

「野球部に入るのか？」

「えつ？　え、あ、いや、違うよ？　本多くんが勝手に……」

その言葉に全てを悟った大和は睨むように本多を見て、低く言った。

「本当にお前は人に迷惑をかけるのが好きな奴だな、ハゲ」「俺はハゲではない！…」

「あの、本多くん……」「…

延々に続きそうだったハゲか否かの論争に、小百合が終止符を打つた。本多は不意にかけられた声に小百合を見、そして大和もまた小百合を見た。

一気に二人分の視線をその身に浴びた小百合は氣まずげに、するはずもなく、平然と言つた。

「本多くんは、どうしてわたしに野球部に入つてほしいの？」

その質問を待っていたと言わんばかりに、本多は笑んだ。

「お前は野球部の部員に人気があるからな！　お前が野球部に入れば部員たちの士氣も上がるだろうと、」

「……本多くんは？」

「は？」

小百合の問いの意味を理解出来なかつた本多が間抜けな声を出す。その後方ではすっかり蚊帳の外になつてしまつた大和と富城が窓の外を見てあの雲はずんだ餅に見える等と議論を交わしていた。

「本多くんはどう思つてるの？」

「特になんとも思わん！」

笑顔で言い切つた本多。クラス中の人間が一斉に俯き肩を震わせた。小百合の笑顔も引き攣つっている。

「そう……。じゃあ、わたし入らない

「何故だ！？」

「大和くん

「なんだ？」

悲壮感溢れる表情になつた本多を無視して、小百合は大和の名を呼んだ。もう話は終わつたのか、とのんきな顔で大和は小百合のほうを向いた。

「これから、仲良くしてね」

「……うん？」

「なんだ！ 椿は広崎に惚れてるのかー…？」

小百合は感情の読み取れない笑顔のまま本多を見た。大和はきょとんとしている。宮城は苦々しい表情。そんな中、本多だけが輝かしい笑顔を見せていた。

「そうか！ ならば広崎！ やはりお前は野球部に入るべきだ！ そうすれば椿もきっと釣れるはず！」

大和はウザつたそうな顔で本多を見た。だから、どうしてそな
るんだ、と。何も自分でなくとももつと良い人材がいるだろう、と。

「はい、ストップ」

本多がまた何かを言おうと口を開いたところで、思わず乱入者が
やってきた。美穂だ。

「あれ、美穂だ」

「はい、美穂です。宮城、名前で呼ぶな

「なんで俺だけ！」

美穂は小百合と本多を見ると一人の腕を掴み、教室の外へと連れ出した。

「おい！ なんだ坂田！ 離せ！」

「きやつ。坂田さんつ、離して！ 痛いっ……！」

「良いから出るー！」

何か知れないが、美穂は怒っているようだ。とりあえず大和はとばっちりを喰らわないように教室のドアを閉め、鍵をかけた。着実に厄介を遠ざけるための経験値を積んでいる大和であった。

7 調理部男子（後書き）

普通に関わっていますな。あらすじに偽りあり、びりしそう。
でも一応（多分）つてしておいたから大丈夫かな。

早速あの黒髪の彼に接触を試みようと、小百合は群がる男共を適当に追い払つて教室を出た。

すぐ隣の教室を覗き込むと、いた。思わず笑う。

それにも、と小百合は不思議に思つた。こんな近くにいたあの人、大和のことを自分が知らなかつたというのも不思議だが、それよりも、このクラスにいる人間たちは、どうして自分の存在に気が付いているだろうに、全く騒がないのか。

小百合は疑問を抱きながら教室に足を踏み入れ、真っ直ぐに大和のもとへ向かつた。

「ねえ」

「なんだ?」

呼びかければ、大和は振り向いた。ああ、近くで見るほうが、もつと素敵。小百合は大和に微笑みかけた。

「わたし、椿 小百合つていうの。よろしくね」

大和は戸惑いながら頷いた。今までのどの男たちとも違つその反応に、小百合も戸惑つた。

「広崎くんつていうんだよね」

「ああ、そうだ。どうして俺の名前、知ってるんだ?」

「坂田さんから聞いたの」

勿論、嘘だ。

本当は周りにいた男たちに聞いた。坂田と親しい男子の名前を知つてゐるか、と訊ねると、すぐに大和の名前が挙がつた。
それほど、坂田が男子と仲良くしているのが珍しいことなのだろう。

「美穂の友達なのか!」

「うん、とっても仲良しなんだ」

そうか、そうか、と嬉しそうに頷く大和。小百合には、大和が嬉しそうにしている姿よりも“美穂”といつ言葉のほうが気になつた。

(どうして名前呼びなの……！？)

そんな苛立ちを必死に隠しながら、小百合は話を続けようと口を開いた。大和は、この言葉にいつたいどんな反応を返すのだろう、と。

「ねえ、大和くんって凄く恰好良いよね。わたし、恰好良い人大好きなんだ」

間髪入れずに大和は返した。

「へえ、面白いなんだな」

につ、こりと笑つて吐き出されたその言葉に、今度こそ小百合の笑顔が固まった。

そして、小百合自身は氣が付いていなかつたが、小百合は目を見開いて、それはそれは本当に可愛らしい無知な少女のような顔をしていた。

いきなり恰好良い人が好きなの等と言われたら大和の反応は至極当たり前のことなのだろうが、小百合の周りにいた男たちは違つたのだ。

そう言うと、男たちは決まって自分たちを少しでも良く見せようと無駄な努力をする。

だからこそ、小百合に媚びることなくそう言ってみせた大和が、小百合にはとても新鮮に映つた。

小百合は本心から微笑み、口を開いた。

「……大和くんは、なんの部活に入っているの？」

爽やかで、なよなよしたところなんて何処にもない恰好良い彼のことだ。きっと運動部のどれかに入っているのだろう。そんな思いを込め、小百合は訊ねた。しかし、大和の答えはそんな小百合の予想を大きく外れた。

「調理部だ。和菓子が好きなんだ」

「、調理部？」

まさかの文化部。何処までも予想通りにいかない大和に、小百合は不可解な胸のときめきを感じた。

今度は大和が訊ねた。お前は、なんの部活に入っているのだ、と。

「わたし、帰宅部なんだ」

「へえ、無趣味なんだな。つまらなくないか？ 人生」

まさか人生をつまらなくないかと問われるなど思いもしなかつた。小百合は目を瞬かせ、向こうのほうから聞こえた笑い声に淵みのある笑顔を向けた。

まだ、この人と話をしたい。底が見えなくて、新鮮なこの人と。小百合が口を開くと、教室のドアが思い切り開かれ本多が入ってきた。小百合は驚き、口を噤んだ。

本多は大和に向かつてギヤンギヤンと喚いている。思わず名を呴くと、本多は目を輝かせて小百合を見た。

小百合は、前々から自分に媚びようとしない本多が嫌いだつた。せっかく自分が笑いかけてやっているというのに、そんな自分の魅

力に気が付かない阿呆な男。

しかし、ようやく自分の魅力に気が付いたのか、と小百合は微笑む。しかし、吐き出されたのは全く違つ言葉。

「我が野球部マネージャー候補の椿ではないか！」

やはり、阿呆は阿呆だったか、と小百合は最早諦めの境地にいた。何故かそれを見て勘違いをしてしまった大和に説明をする。すると、大和は本多を軽く睨んだ。

「本当にお前は人に迷惑をかけるのが好きだな、ハゲ」

「俺はハゲではない！！」

「は、ハゲ……」

まるで漫才のようだ。小百合は誰にも聞かれないように小さく呟いてから大和の考察をした。

（なにこれ……。天然毒舌爽やかスイーツお笑い系男子？ どれだけ設定詰め込んでるのよ）

「あの、本多くん……」

小百合はふと、疑問に思つた。この男は自分に落ちていない。な

ら、どうして其処まで自分を野球部に入れたがるのか。

しかし、阿呆は何処までいっても阿呆で、返ってきた答えは“部員の士気が上がるから”。果てには“特になんとも思わない”。この男は喧嘩を売っているのだろうか。

まあ、良い。こんな男。相手をしてやるだけ無駄だ。小百合は大和に向き直った。

「これから、仲良くしてね」

「……うん？」

「なんだ！ 椿は広崎に惚れてるのかー？」

喧やかましいぞ、この腐れ脳味噌。小百合は自分がそう叫び出さなかつたことが心底不思議だった。

本多がまた喚きだそうとしたところで、また邪魔者が入った。

「はい、ストップ」

本当に邪魔な女だ、と小百合は唇を噛んだ。親しげに大和と話し、あまつさえ見せ付けるように名前で呼び合つて。

坂田は小百合の腕を思い切り掴み引っ張った。痛みに悲鳴を上げても坂田は愚か、クラスにいる男子たちもなんの反応も見せない。

小百合はそのまま、坂田の手によつて教室から追い出されてしまつた。

椿 小百合視点 3（後書き）

小百合視点のときは美穂が坂田呼びなのがポイント。 視点つて言わないかな、これは……。

8 パソコン部女子（前書き）

今更ながら言い忘れていましたが、後書きは友人の言葉です。

朝は結構良いことがあったため、昼休みはかなり良いペースで勉強が出来ていた。そのお陰か今日のノルマはすぐに終わらせることが出来た。

ん~、と体を伸ばしてふと気付く。

いない。あの椿が珍しく教室に居なかつたのだ。男子の取り巻き共は暇そうに椿の机の周りで待つてゐる。お前らは犬か。

ガタガタと騒がしい音を立てながら本多が出て行つた。きっとまた大和に交渉しに行くのだろう。

ただ、平穩な昼休みを騒音に変えられではたまつたものではない。どうやらもう少しお灸を据えてやる必要があるようだ。

美穂は溜息をつきながら立ち上がり、本多の後を追つた。

教室を出てすぐガタン!と騒々しい音、原因は見なくても分かる。本多は夢中になると他がどうでもよくなる悪い癖を持つ。そこも説教せねば、ヒズカズカと歩いていく。

「本!……多!……?」

椿が居た。しかも大和と話してゐる。幸い向こうは私の事に気づいていないようだ。……椿が大和の存在に気づいてしまつた。しばらく自分の仕事を忘れて呆然とし、やつと思考が働きはじめた。

とうあえず説教

これしか頭のなかに無かつた。それだけ椿に大和が狙われていることがパニックになつていた。

「はい、ストップ」

「「あれ、美穂だ」」

大和と宮城が一斉に言つた。本当仲が良い。
というか宮城がここに居たことを今気づいた。宮城ってそんなに存在感無かつたつて、と疑問に思つたくらいだ。

「はい、美穂です。宮城、名前で呼ぶな

「なんで俺だけ！」

答えは簡単。

宮城とは親しくもないし、呼んでいいとも言つてはいけない。いつからこんな親しげになつたんだ。

ともかく仕事に入ることにした。大和には小さく謝つてから二人の腕を掴み、引き摺る形で教室から出していく。

「おい！なんだ坂田！離せ！」

「きやつ。坂田さんつ、離してー痛いっ…………！」

「良いから出るー」

黙らせるために少し腕に力を入れるが、椿だけは黙らずに騒ぎ、教

室に着き放すまでつるさかつた。

.....

「本多、何回言つたら分かるの。人が断つたら諦めなさいー迷惑で
しちうがー！」

「そんなことは俺の自由であるつー！」

「黙れ、扉を外したことば言い逃れさせないよ」

本多にゲンコツを入れ、黙らせる。

今、私は教室で二人を正座させて説教をしていた。考えれば椿を説
教する理由はどこにもないのだが、この際どうでもよかつた。
早くも正座に疲れたらしい椿が正座をやめる。だがそれを私が見逃
す訳がない。

「椿、正座を崩すなーー！」

椿と小百合ちやん親衛隊が二つを睨んだ。親衛隊は殺氣立つてい
る。

美穂はそれら全てを脅しも含めて睨み返した、関係ない奴らまで退
いている。

「大体椿が来てからこの学校（男子のみ）は変わったわ！服装を違
反する奴は出るわ、不登校（椿に興味が無い男子が親衛隊に襲われ
た）は出るわ、散々よーー！」

おまけに大和にまで餉食にする気が、と美穂は言いそうになつてそれを飲み込んだ。椿は涼しい顔をして受け流しているようだ。

美穂は苛立ち、椿の顔を片手で掴んだ。

「つ、な……！」

「あまり調子にのりないで。学園生活乱されると勉強に集中出来ないから」

低い声でそう告げ、説教を終わらせた。そのまま自分の席に戻り、座つた。

自分を見る視線が何時にも増して痛かつた。

8 パソコン部女子（後書き）

最近小説を見る回数がかなり増えた。ついつい上手い人と自分を比べてしまう。

……下手くそな自分に泣けてくる。

教室に連れ戻されると強制的に正座をさせられ、坂田の説教が始まった。

（なんでわたしまでこんなことを………）

正直小百合は苛立っていた。大和と離されて、腕も思い切り掴まれたのにその上説教。教室の隅では女子共が私をいい気味だと言つようくスクスクと笑つている。

こんなにも屈辱的なことがあるだらうか。

本当に邪魔な女、そうボソリと呟き坂田にちゃんと正座をしろ、と怒鳴られた。更に苛立ち、睨みつければ睨み返される。後ろに居るわたしの親衛隊も黙り込んでしまつた。使えない、わたしをちゃんと助ける。そのための親衛隊だらう。

それにして本當になんの、この女は。お前だつて所詮は敗者、なのになんで、なんでわたしにたてつくの。

ここはわたしの世界、全てわたしだけのものなのに、それなのになんであなたは………！

唐突に顔を片手で掴まれる。片手なのに抵抗できない、しつかり掴まれている。一体この細腕にどれだけ力がある……。

「あまり調子にのらないで。学園生活乱されると勉強に集中出来ないから」

嫌に坂田の低い声が響いた。本多には聞こえなかつたのか、まだ痛

がっていた。

坂田は説教を終わらせて自分の席に戻つて行った。
男子達が自分を心配して頻りに話しかけてくる。小百合はそれを適
当に聞き流し坂田を見据える。

もう絶対に許さない。大和を、あなたから必ず奪つてみせる。
後悔しても、遅い。

椿 小百合視点 4（後書き）

無いものを搾るって難しいですよね。私の場合は想像力ですが…。

「ああ、もう！ なんなんだよあの女っ！ なあ、君もそう思つだろ！？」

「な、夏輝^{なつき}、落ち着いて……」

「なんだよつ！ 菖蒲^{あやめ}だつてそう思つてるだろ！？」

大和は眉を下げながら、一言だけ言った。

「……ご愁傷様？」

自分の城とも言える調理室で、何故大和がこんな不憫な目に遭っているのか。それを知るには、少し時を遡らねばならない……。

今から一時間前。大和は今日も部活動に勤しんでいた。
今日はどう焼きを作ろう。そう張り切つて冷蔵庫を開けた大和が目にしたもの。

これが、大和の最初の不幸だった。

「……餡がない」

どら焼きを作る為には必要不可欠な餡を、今日に限つてちょうど切らしていたのだ。ちなみに、大和はどうにかにカスタードクリームだとかいつたものは邪道だと考えている。

「仕方ない、買つてくるか。先生！ 金！」

「先生、こんな堂々と教師から金をせしめようとする生徒は初めて見た」

「でもそんなことを言いつつ金をくれる先生が好きです！ アイラビュー！」

「ドントタッチミー」

存分に顧問である一階堂とふざけ倒した大和は部員一人を見て言った。

ちなみにこの部は廃部寸前である。しかし、寸前であるだけで何故廃部にならないのかは誰も知らない。

「俺は餡を買いに行つてくるけど、俺がいないからつて変なことをしないように！ 茄で卵はレンジで作るなよ！」

「「わかりました！」」

そんな部員一人の力強い返事の後に、チーンと軽やかな音。そして破裂音。

「おい今何か聞こえたぞ！」

「卵が爆発しました」

「もういい。広崎、行つてこい。ここからは俺がしめとく」

大和は後ろ髪を引かれる思いで調理室を後にした。

廊下に出ると大和は真っ直ぐに購買を目指し始めた。

購買には弁当やパンの他にあまり買う人間はいなさそうなジャムなども売っている。きっと、餡も売っているだろうと大和は思った。

しかし、

「え、売り切れ！？」

「そうなのよ。ほら、最近転入してきた可愛い子、いるじゃない。なんでもあの子があんこが食べたいって言い出したらしくて、男の子たちが……、ね」

「…………」

最近に転入してきた女子など小百合しかいない。大和の中で小百合的好感度がちょっと下がった。それと同時に大量の餡をいったいどうやって消費する気なのかと気になつた。

落ち込む大和を見かねた購買のおばちゃんが、少し困った顔で大和に何かを持たせた。

「……おばちゃん？」

「本当は「じつ」こと、しちゃいけないんだけどね。可哀想だからおばちゃんからのサービス。それにもあんこは入ってるから」「…………」

大和が持たされたのはどら焼きだった。

どら焼きを引き裂き、中身の餡を取り出し、その餡でどら焼きを作る。なんだか意味のわからない工程である。

しかし、これの他に餡はなく、大和はおばちゃんの「厚意に甘えてどら焼きを持ち帰ることにした。
ゆうくり購買を出て、廊下に差し掛かった。

そして、此処で大和を第一の不幸、基元凶が襲う。

「転んだあああああッ！？」

「夏輝いいいい！」

「ッな、」

何かが落ちてきた。そう思ひ間も無く、大和は“それ”に押し潰された。

わざとかと思つくらい真つ直ぐ鳩尾に落とされた打撃に大和は思わず涙目になつた。

「つぐ…………！？」

「な、夏輝！ 大丈夫…………！？」

「ん！ だいじょーぶ、だいじょーぶ！ この少年が身を挺してあたしを庇つてくれたから！」

「勝手に事実を捏造するな……！」

とりあえず退いてくれ、と大和は自分の上に乗っている女の肩を叩いた。女はからからと笑いながら囁つ。

「なんだ、なんだ。つれない奴。普通、ナイスバディの女が自分の上に乗つてたら興奮するもんだろ」

「可笑しいな、まな板しか見えない」

「脳味噌引き摺り出されてーのか」

額に青筋を立てた女は、今度は素直に大和の上から退いた。酷い目に遭つた、と大和が腰を擦る。

すぐ傍でおどおどしながら自分たちのやり取りを見ていたもう一人の女が恐る恐る大和に声をかけた。

「あ……あの、大丈夫……？」

「一応、身体は丈夫なほうだからな。大丈夫だ」

「そう、良かつた……。夏輝がごめんね」

「ん！ 悪かつたなー！ 少年！」

「もう良い……」

どうしてこいつは同級生だろうに自分のことを少年などと呼ぶのか。しかし、今の大和にはそんな疑問を指摘する気力も無かつた。大和は疲れ果てた表情で言い捨てた。そしてどら焼きが潰れていなかを確認してから立ち上がる。不幸中の幸いとでも言うのだろう

うか、どら焼きは無事だった。

それじゃあ、これで、と大和がさつさと傍迷惑はためいわくな女たちから逃げ出そうとすると、夏輝と呼ばれた女が大和の顔をじいつと見て、何かに気付いたような顔をした。

大和は物凄く嫌な予感がした。

「……ん？ あれ？ 君、広崎 大和か？」

「え……？」

「……夏輝、知り合いなの？」

「いや、うちの副部長の彼氏」

その言葉に思い当たる人物がいたのか、もしかして、と大和も思う。

「美穂の部活の、部長か？」

「そう、大正解！ そういう君は美穂の彼氏」

混乱する頭で、大和は一言だけ言った。

「……違うぞ？」

そして何故か冒頭のような事態になってしまったわけである。

大和が調理室に戻ろうとする、何故か夏輝たちも大和について

きた。なんの用だと言えば和菓子を恵んでほしいのだと呟つ。

和菓子が好きな奴に悪い奴はないというのが持論の大和。夏輝の言葉に少しだけ上機嫌になり、喜んで夏輝たちを招き入れた。

しかし今、大和はその持論を撤回したくて堪らない。

「だいたいあたしの菖蒲を貶すとかいつたい何考えてんだろうな、あの雌豚は！ 醋豚にすんぞこら！！！」

「な、夏輝っ……！ お願ひだから落ち着いて……！」

先程から菖蒲が なんと、生徒会長らしい なんとか夏輝を宥めようとしてくれているが、それでも夏輝は止まらない。それどころか、調理室にある食物を全て消費しようとしている。

後輩たちは夏輝に怯えているし、唯一対抗出来そうな二階堂はさつさと調理室を出ていってしまった。

いつになつたらこいつらは帰ってくれるのか、大和は泣きたくなつた。

9 調理部男子（後書き）

ちなみに、私はどら焼きはカスタードクリームとかじやないと食べません。

10 パソコン部女子（前書き）

小百合ちゃんがあんな過激な発言しどこで全然出てしなくなってしまった……。

「ぬが――――出来ない！なんなんだ、これは……」

「落ち着いて！パソコン壊そりとしないで……」

「ああ、部長。貴女は今日も来ないのでですか……」

「副部長ー、これどうやるんですかー」

「ねーむーいー……。ぐう……」

新入生久しぶりに一人を除いて全員集合。ちなみに残りの一人は例の親衛隊に襲われ不登校になつてている。

新入生は上から白川くん、しらかわ 杯田さん、はいだ 滝下くん、たきした 町谷さん、まちや 矢崎さん。やさき なんとも個性的、というより濃すぎる部員達だ。ちなみに最近は町谷しか来ていなかつたから、一応新入生は集まつた。だが、ここまで來るとさすがに面倒だ。

「矢崎、とりあえずあんた起きて」

「いつたあー？……副部長いつもあたしに酷すぎません？」

「寝てるあんたが悪い」

「えへ、ちょっとだけじゃないですか」

「一日二回以上は寝るの?」

「……」

黙り込む矢崎。言い返せないからだらうけど矢崎一人だけ相手をし続ける訳にはいかない。

振り向くとなんと杯田が公共物を壊そうとしている白川と部長「〇×E」とうるさい滝下を峰打ちで黙らせていた。峰打ちだけは天才的な確率で急所を狙える杯田、ナイス。

これならしばらく置いておいても平氣なようだ。そういうえば大和が今日はドラ焼きを作ると言っていた。少し抜け出して食べに行こうか。

美穂は杯田に任せ、パソコン室から出た。

……

パソコン室と調理室は階が同じになつてゐる。代わりに少し距離が遠い。歩きはじめたところで調理室から出てきた二階堂に会つた。

「ああ、坂田。お前ちよつと頼むな」

それだけ言って二階堂は去つて行つた。

何を頼まれたのかさっぱり分からぬ美穂は調理室でその理由、原因、自分がするべき事がすぐに分かつた。

「部長……」んな所にいたなんて………」

部長が居た。生徒会長も居る理由は知らないが部長は調理室の食料を食い漁っていた。大和が涙目で助けを求めている。事態は結構深刻なようだ。

「とにかく、行きますよ。」迷惑おかげしましたー」

「わーん、助けて菖蒲——」

「え、…え？」

重い。ものすく重い。恐らく部長が会長へつづいて会長まで引きずっているのだろう。

だがここに部長が居ては害虫同然。おまけに大和は完全に部長に負けていて追い出すのは不可能だろう。まあ、じつも揃つたらやりたいことがあつたからちょうど良い。

「歩くからー、歩くから副部長放してよー」

「放したらまた逃げるでしょ?」

「ケチ」

「うるせー、部長なんだから仕事するーー!」

いつも思つけどこの人本当なんで部長になつたんだろ。副部長でもいいのに何故部長。本当にこの人ミステリアス。

「着きましたよ、今日せいやんと話しあつますから。会長すいません」

「あ、いえ、大丈夫ですか」

「じゃあやつこいつ訳で」

「逃げるな、部長」

慌てて部長を捕まえ、とつあくせき議論に入る」とした。会長は部長の無理なお願いで「ここにこる。

「えー、それじゃあ、」

「おお、遅っこ部長……やつと来ててくれたのですねー。」

「うわあ?...」うち来んな...気持ち悪い...」

「杯田、峰」

「了解です」

「ぬなつ...」

滝下、沈黙。杯田が入部してくれて良かった、すげー助かる。部長にアイコンタクトをして話を進めるように促す。

「えーっと、今日は文化祭の出し物を決めるんだって。なんかいいのある?」

「部長、会長?」へこむこむけやんと並んで立ってる

「こーじゅん」

「良くないですか」

うーん、考え込む部長。しばらくして何か思いついたのか手をポン、
と吊り上げたりを「ヤリと見た。……嫌な予感しかしないんだけど。

「よし、どうせ人数少ないしね、調理部と合同でクッキー作り、
クッキー」

「え。ちよ、ちよっとそんなことして良い説が……」

「部長命令」

「で、でも

「何か問題でも?」

態とだ!絶対態とだ、私が料理駄目なの知つてやつてる!…もしか
してさつきの根に持つてるのか?…だとしたら怖いな、とこいつか逆
恨みでは?

「良じよね、菖蒲!」

「私は、良じと想ひ?…」

「よしきたー!生徒会会長の許可貰つたし、調理部行つてくれるわー

会長を引っ張つて部長せつとつと出て行つた。珍しく部長の目が輝
いていて仕事にやる氣を持つのは有難いがそんな形で持つてほしく
ない。

「クッキーか。俺は辛い方がいいな」

「白川くん、それってクッキー？」

「……あれ、部長は…? 何処に行ってしまったんだ、愛しのハニー……」

「副部長ー、結局これどうするんですかーー」

「むにゃ、もつ食べれないよう…」

……とつあんず」こつら説教かな。

10 パソコン部女子（後書き）

友人「最近さらに想像力が乏しくなっていく気がする…。頑張れ私の脳。」

友人が無駄に登場人物を増やし過ぎて、誰が誰だかわからなくなってしまったことを、友人の代わりに私が謝罪致します。申し訳御座いません。

騒がしい足音が徐々に調理室のほうに近付いてくる。逸早く異常を察知した大和は調理室のドアを閉めようとしたが、一步遅かつた。ガラリと勢いよく開かれたドアの向こう側に立っていたのは先程の迷惑な女。大和は女 夏輝にラリアットを食らわせたくて堪らなかつた。

「少年、少年！ 君の愛しのパソコン部部長様が会いに来てあげたよ！」

大和は本心をありありと表した表情を必死に隠し、ある一角を指差しにこやかに言った。

「お前の居場所は調理器具置き場だぞ？」
「あたしはまな板じゃねえ！」

夏輝は顔を真っ赤にして怒鳴つた。
やはり、これだけでは帰らないか。まな板はまな板らしく大人しくしていれば、まだ少しは可愛げというものがあるのに。大和はまな板を前にかなり失礼なことを思った。

大和は、今度は出入り口を示して言った。

「あの出入り口が見えるか？」
「帰れってか」

大和の辛辣な物言いに対し、なんとも的確な突っ込みを返す女である。

嫌だ嫌だとは思っていても、一応慣れてきたのか、幾分か冷静な対応をする大和。

「とにかく、お引き取り下さい、まな板部長」

「君が息を引き取れ」

「この世に要らないものって、たくさんあると思うんだ。煙草とか、お前とか、ゴキブリとか、お前とか、ハゲとか、お前とか」

だんだんと目が剣呑な光を放ってきた大和を見て、夏輝は思わず冷や汗を垂らした。これ以上は、まずいかもしれない、と。

大和の後ろに避難していた後輩たちも、いつもとは違う大和の雰囲気におろおろしていた。

そんなとき、軽快な音と、次いで破裂音。

大和はゆらりと振り向き、後輩一人を見た。ホラー映画さながらの不気味な動きに怯える一人。

「……お前たちも、要らないのかなあ……？」

「ああああッ！！ 少年！ 少年少年！ 今度はちょっと、本当に用があつて来たんだ！ まずはあたしの話聞いてくれーーー！」

「ふうん……、なるほど。パソコン部と合同で、か……」

「うう……。あたしは女だぞ……。何も本気で殴ることはないだ
う」

調理室の椅子に座り、涙目になりながらこぶが出来てしまつた頭を擦り、夏輝が言った。大和は夏輝の真正面に座り、夏輝を冷たい目で見つめている。

大和は夏輝の涙まじりの声に平然と返した。

「鏡なら其処にあるぞ？」

「貴様！」

何処までも酷い奴である。

大和は場を仕切り直すよつて、一度だけゴホンと咳払いをし、口を開いた。

「……何故、部の趣旨が全く違つ俺たちを合同の相手に選んだのか

は理解出来ないが、うん、良いぞ

大和は後ろを振り向き、後輩一人に訊ねる。

「お前たちも、良いよな？」

「勿論ッスよ部長！」

「私たちが部長の成すことに反対するわけがありませんってー！」

「そ、そうか……？」

何故か態度が急変してしまった部員たちに大和は首を捻る。部員たちはすっかり大和に怯えてしまっていた。

「まあ、君らの了解が取れたのは良いとして……、顧問の先生のほうはどうなんだ？ 一階堂先生だつけ？」

夏輝が大和に訊ねる。夏輝は阿呆に見えて、中々しつかりとしている。

大和は問題ない、と首を振る。

「あの人は部活のことほとんど俺に任せであるから、大丈夫だと思う

「そか。ならいいや」

夏輝は軽く頷き、椅子から立ち上ると軽やかな足取りで出入り口まで向かった。

そのまま出ていくのかと思いきや、あ、と何かを思い出したような声を出して、大和を見た。

「なんだ？」

「お菓子は？」

「帰れよ」

大和は夏輝を蹴り出して調理室の鍵を閉めた。

現時点では大和の中での夏輝の立場は本多^{ハナ}と同列であった。

11 調理部男子（後書き）

夏輝の口調が迷子。

今、美穂はかなり悩んでいた。放課後という絶好の勉強タイムなのに、勉強にも手をつけず、ただ悩み続けていた。ちなみに今日は部活が無い。

原因はこの前部長が強制的に決定した文化祭の出し物だ。

料理、それは美穂が全く出来ないものの一つだつた。小さい頃少しあつていた記憶はあるのだが、出来ない。一度大和とプリンを作ろうとして、絶対食べれそうにない奇妙な液体が出来た。未だにどうしてそうなったのかわからない。

「坂田さん、どうかしたの？」

声に顔を上げて固まつた。椿が目の前に立つていたのだ、勿論男子を従えて。

前に説教をしたときとまるで態度が違つ。これが七変化か、凄いな。少し躊躇があつたが避けてばかりはさすがにまずいだろうと思い、話すことになった。

「椿さん、さんは料理は作れる？」

最近は椿と呼んでいたので、さんを後から取り付けた。少し表情が動いたので多分本人も分かつたと思つ。だがそこはさすが椿といふかすぐに笑顔で返してきた。

「作れるよ。でもそれがどうかしたの？」

首を傾げて今度は椿が質問していく。「これには答えることは出来なかつた。料理が出来ないなんて、椿には口が裂けても言えなかつた。言つたら馬鹿にされるのがオチだ。

ところで今氣付いたが椿自身、女子に話しかけるのが珍しい。何かあつたのだろうか。

「何でもない。ちょっと聞いてみたかつただけだから」

なんだか追求されているような気がして美穂はそのまま会話を終わらせた。逃げるように教室を出て3・2に向かつた。料理関連では大和に頼るしか無いだらう。そう考えてのことだった。

「大和、いる?」

大和はいた、が呼ぶと宮城もついて來た。なんであんたも来るんだ。

「大和、その、文化祭のことなんだけど……」

「ああ、クッキーのことか」

「作り方、教えてくれないかな?」

「「作り方?」」

二人が同時に言つ。二人とも目が点になつてゐる。やがて宮城がなにかに気付いたらしく笑いはじめた。

「美穂、料理駄目だから大和に……? ふはっ!、笑えるーーー」

「う、うるさい富城……と、うかなんて知つてゐるの…」

「えー、結構有名だよ? 女のくせに料理出来ないって」

「女のくせにとか言つたな…」

思いつ切りすねを蹴つてやつた。前と同じように痛がる富城。それよりも皆が私の料理下手を知つてることで、この事実が恥ずかしい。

「で…、いいかな、大和」

「いいよ」

すんなりと一解を得ることが出来た。足元ではまだ富城がうずくまつていて、あと1時間そうしてゐる。

とりあえず大和から了解は取れたので、いつやろうかと聞いたら今日でも良いと言う。私はその言葉に甘えて今日クッキーを教えてもらひことにした。

12 パソコン部女子（後書き）

友人「変に混乱させるような事をして申し訳ありませんでした。これからはそれらも配慮して頑張つていいくのよろしくお願ひします」

多分、前に私が半分冗談で書いた名前の件についてかと思われます。

放課後、取り巻きの男子達と話をしながら帰りの支度をしていた小百合は坂田が頭を抱えて唸つてゐるのに気が付いた。前に説教やら何やらあつたが話しておけば何か得な事があるかも知れないと興味半分で話しかけた。

「坂田さん、どうしたの？」

坂田が顔をあげる。瞬間顔が少し引き攣つた。ちよつとの沈黙の後にやっと坂田は口を開いた。

「椿…さんは料理は作れる？」

あからさまに後からさんを付けたのが氣に食わなくて少し苛立つたがすぐに冷静になり、なんでそんなことを聞くのか考へる。結局答えが出なかつたので質問に答える事にした。

「作れるよ。でもそれがどうかしたの？」

逆に質問で返してみたら今度は坂田が考え込みしづらくなってしまった。

「何でもない。ちよつと聞いてみたかっただけだから」

とだけ言つてそのまま鞄を持って教室から出て行ってしまった。

その発言に更に苛立ちを感じながら近くにいた男子達に坂田が何故

あんなことを聞いたのか訊ねる。

すると一人の男子がさも当たり前のようには坂田が料理下手だということを教えてくれた。

今まで欠点が見えなかつた坂田の弱点が見つかつた。まさかそれが料理だとは思いもしなかつたがこれでひとまず一步前進出来た。

今日は一人で帰ると男子達に別れを告げ教室から出ると3・2から「女のくせにとか言うな！！」という坂田の声が聞こえてきた。成る程、情報は事実のようだ。

さて、どうやつて坂田を出し抜き大和を落とそうかと考えてこの前大量に持つてこられた餡を思い出した。確かに食べたいとは言つたがそんなに持つてくるか、と仰天したものだ。

あのあと食べきれずに余つたものがまだあるはずと思い、その餡で何を作ろうかと小百合は考えながら下校して行つた。

大和は調理準備室の棚や冷蔵庫を漁り、クッキーを作る為に必要な材料を確認していた。

「……うん、一通りあるな。あ、バターは出しておこう。あと卵も……。で、飾り付け……」

大和は引き出しを開け、中にあったココアパウダーとチョコチップを取り出した。

「……どっちを使おうかな。ココアクッキーを作つて、プレーンクッキーにチョコチップを混ぜるのも良いかもしれない」

「ココアパウダーをチョコチップを持って考え込む大和。そんなとき、調理準備室の扉が開かれ、部員である青山あおやまが入ってきた。

「部長ー、坂田先輩來たッスよ」

「あ、もう來たのか？わかつた、今行く」

悩んだ末、大和は両方を持って準備室を出た。

準備室から出ると、バターを不思議そうにつづいていた美穂が大和を見た。

「どうしてバターと卵だけ出てるの？」

「バターと卵は最初に室温に戻しておいたほうがやりやすいからな。それかバターは湯煎するか」

「……？」

室温も湯煎もわからないのだろうか。それともバターと卵を温める意味か。いや、両方かもしれない。想像以上の美穂の無知さに大和は愕然とした。

「あと、この粉なに？」

「重曹とかが入ってるやつだ。……今日来たのはお前だけか？」

「うん。部長も来たがってたけど、置いてきた」

「なるほど、さっきからドアを壊れそなくらい叩いているのはあいつか」

青山か松島、それとも一階堂か美穂が鍵を閉めたのだろうか。二階堂がその必死過ぎる打撃に恐怖で顔色を悪くしていた。なんにせよ、その素晴らしい判断に大和は拍手を送りたくなった。

「青山！ 愛してる！」

「え！？ なんで！？ ジャあとりあえず俺も愛してるツス部長…」

「あれ？ 松島愛してるぞ！」

「いつから部長はそんな軽い人になつたんですかー。でも私も部長愛してますー！」

「じゃあ、先生愛します！」

「じゃあってなんだ。はいはい、俺も愛してますよー。いきなりどうした」

大和の感謝の愛の告白に各自何処か見当違ひな答えと愛を返した。どうやら三人は鍵を閉めていないらしい。だとすれば、

「……あつ、美穂！ 愛してるー！」

「なに？ 私はおまけ的な？」

美穂は大和の言葉に少し嫌そうな顔で返した。しかし、その頬は淡く色づいている。大和が気付くはずもないが。

自分を救つた救世主に感謝の意を示して満足した大和は、拳を突き上げて言った。

「……よし、早速クッキーを作るぞー！」

「「おーーー！」」

「おーーー！」

「お、…………おーーー……」

大和の言葉に青山と松島がやる気に漲つた返事をした。遅れて二

階堂がやる気の無なそうな声で、美穂は羞恥からか小さな声で言つた。

「えーと、じゃあ俺と先生がまずはお手本を見せるから、美穂は青山と松島に手伝つてもらひながら後に続いてくれ」

大和が言つと、横でふにふにしてきたバターをつついでいた一階堂が嫌そつな顔をした。

「ええつ。俺もやるのかよ。先生クッキーだけもらおうと思つてたのに」

「働くがざる者生きてべからず！」
「重いな」

此処で大和の手伝いをしなかつたら、いつたい自分はどうなるのだろう。一階堂は少しそつとした。

一階堂のそんな様子には全く気付かずに、大和は青山たちを見た。

「じゃあ、青山、松島、頼んだぞ。美穂は料理が苦手だから」

「はいッス！ 坂田先輩、よろしくお願ひします」

「うん、よろしく」

「それにも坂田先輩つて本当に料理出来ないんスね！ だつさ！」

「料理は女の嗜みなのに出来ないんですねー！ ふふ、だつせー。」「なにこの子たち凄くムカつく

青山たちはによによと馬鹿にしたような笑顔で美穂を見た。美穂はピクリと頬を引き攣らせたが、自分の部の後輩ではないからか、鋭い蹴りが繰り出されることはなかつた。

「……えーと、まずはバターを白くなるまで混ぜます」

対応に困つた大和は結局そのまま調理の説明をすることにした。大和の説明に美穂がきょとんとした顔を見せる。

「白くなるまで？」
「白くなるまで」

大和は頷く。益々不可解だといった顔で美穂は更に訊ねた。

「バターって、黄色いのに白くなるの？」
「…………。とりあえず見ててくれ。先生頼んだ！」
「俺か」

一階堂はスースの裾を捲り、泡立て器を持ち、バターを素早く搔き混ぜた。みるみるうちにバターは白くなり、一階堂はそれにグラウンシュガーとグラニュー糖を加えた。

「あ、今、先生が入れたのはブラウンシュガーとグラニーコー糖な。
名前くらいは聞いたことがあるだろ?」

「うん、一応」

「これすらわかんなかつたら女捨ててますよねー」

「そろそろ蹴つても良いよね」

一々茶々を入れてくる青山たちに美穂の堪忍袋の緒はもう限界だ
った。些細なことでもはち切れる。美穂はそんな可笑しな確信を持
つた。

「こりこり、仲良くしてくれ。あと、暴れると埃がたつからやめろ
よ? 蹴るのは後でだ」

「ええっ! 部長! 可愛い後輩を見捨てるんスか!」

「先生からもなんとか言って下さいよー! 可愛い部員からのお願
い!」

「可愛い……? 増たらしい後輩なら其処に三人もいるんだがな」

「ブルータス! お前もか!」

いつもこんなくだらないことをしているから、調理時間が遅れる
ということに大和は今気が付いた。大和は話している間もずっと動
いていた二階堂の手元を覗き込んだ。

「あ、出来てるな。先生、もう良いぞ」
「ん、あー、手が疲れた」

一階堂はボウルを大和に手渡し、手を少し振った。大和はボウルを美穂たちに見せた。

「こんな感じに跡が残るようになるまでふわふわに泡立ててくれ

「……努力はする」

「結果を残してな」

美穂はぐつと泡立て器を握ると勢いよく泡き混ぜ始めた。

「美穂、飛び散つてゐる」

「坂田、素早く搔き混ぜると力一杯搔き混ぜるのは先生なんか違う気がする」

「仕方ないッスねー。俺がやるんで次の工程は先輩やって下さいよ？」

青山はそう言つと美穂からボウルを受け取り、軽々とバターを泡立て、ブランシュガーラを加えた。美穂は女として敗北感を感じた。

リベンジだと言わんばかりに美穂は搔き混ぜ始めた。

「美穂、飛び散つてゐる」

「坂田、だから違う」

「仕方ないです。私がやるから先輩はもうやめて下さ」。その

うち中身なくなりますよー？」

「」

松島はそう言つて美穂からボウルを奪い取つた。美穂は自分と青山たちと何が違うのかを真剣に考え始めた。

「……うん、一応出来たみたいだし、先に進むな。次は、溶いておいた卵を二回にわけて入れて、よく馴染ませるんだ」
「どうしてわざわざわかるの？ どうせ全部入れるのに」
「少しづつ加えるとバターとよく混ざつて分離しにくくなるんだ」

話しながら大和は予め用意してあつた卵を加えて混ぜた。ほう、と美穂は感心したように頷いた。部長なだけはある。
美穂も見よう見まねで混ぜてみるた。さすがにこれは出来なければ女以前に知恵を持つた人間としてまずい。

「ん、出来たな。次はふるつておいた薄力粉、重曹、アーモンドパウダーを二回にわけて入れて混ぜてくれ。あ、ゴムべらでな」

一階堂は大和の説明と同時進行で作業を進めた。その手慣れた手つきに美穂の目は釘付けだ。

「……これ、どう混ぜてるんですか？」
「ゴムべらを縦に入れて、底からすくつて、切るよじこじして混ぜる」

美穂の問いに一階堂は淡々と答えた。よくわかつていなさそな
美穂に、大和がフォローを入れた。

「まあ、混ぜ方なんて気にしなくても大丈夫だ。混ざつてさえいれ
ばだいたい出来るから」

「……頑張る」

美穂はぎこちない動作で生地を混ぜた。今にも生地がボウルから
飛び出そうだ。

「……じゃあ、次は「コアパウダーを入れてくれ。こつちはチョコ
チップを入れるから。さっくり混ぜるんだぞ」

「そ、さっくり……？」

大和は横目で美穂の手元を見ながらボウルの中身を混ぜる。こい
つは相変わらず本当に不器用な奴だ、と思つた。

「、よし、混ざったな。じゃあ、この生地を一時間寝かせ、「

「一時間！？」

「「たものが此方でーす！」」

「ええ！？」

「料理番組かよ」

青山と松島が調理室のほうの冷蔵庫の中からボウルを取り出し、

今まで大和たちが手にしていたボウルを冷蔵庫に入れた。

悪戯大成功、と大和たちはハイタッチをした。二階堂は呆れてい
る。

「これはなんにも入っていないプレーンクッキーの生地だから、適
当に型をとつて、あとは焼くだけだ」

美穂にクッキーの型を渡しながら、同時に指示を出した。

二階堂はその様を見ながら大和は将来良い主夫になりそうだと思
つた。

13 謾理部男子（後書き）

いつも以上に文が乱れていますね。台詞が続いているのが多くて読みづらい。

～したものは此方ですーをやりたいがために頑張った。だけじゃすがに全工程載せなくとも良かつた気がする。疲れた。

美穂は一度大和と別れ、下駄箱に向かった。

一緒にそのまま調理室に行つても良かつたのだがどうしても確認したいことがあった。一つの下駄箱の中の靴を確認してから思わずガツツポーズをした。ちょうど通つた後輩に見られ、不審な目で見られた。

私が確認したのは椿の下駄箱だった。今、椿は大和を狙つているから部に来る可能性は否定できない。ましてや今来られては美穂の料理下手がばれては困る。

とにかく美穂は椿が帰つたことを確認すると安心して調理室に向かつた。

……

ガラリと扉を開けて力チャリと鍵をかける。既に調理室のメンツは大和を除いて全員いた。机の上には道具と卵とバターがのつていた。興味半分でバターをつづいていると準備室から大和とその後輩、青山が出てきた。どうやら元々準備室に居た大和を青山が呼びに行つたらしい。

「どうしてバターと卵だけ出てるの？」

「バターと卵は室温に戻しておいたほうがやりやすいからな。それ

かバターは湯煎するか

「……？」

室温、湯煎。はてさてどこか（授業）で聞いたことがあるような。大和はそんな美穂を見てかなり呆れていようつだった。

「あと、この粉なに？」

「重曹とかが入ったやつだ。……今日来たのはお前だけか？」

他に誰か来ると思ったのだろうか。こっちの部員が料理が出来るかは知らないが嗅ぎ付けてきた奴は一人いた。

「うん。部長も来たがってたけど、置いてきた」

「なるほど、さつきからドアを壊れそつなくらい叩いているのはあいつか」

叩いている音の間に開けてよー、と時折聞こえてくる。これじゃあ部長と本多のレベルが同じだ。部長、やる気出さなくとも良いからそこまで落ちぶれないで下わい。一階堂の顔色が悪い。すいません、後で言つときます。

「青山ー・愛してーるー」

「えー? なんでー? ジャ あとりあえず俺も愛してーるッス部長ー!」

「あれ? 松島愛してーるー!」

「いつから部長はそんな軽い人になつたんですかー。でも私も部長のことが愛しますー！」

「じゃあ、先生愛します！」

「じゃあってなんだ。はい、俺も變しますよ。これなりどうした」

まさかの告白タイムにちょっとボカシとなる。……これがこの部の普通なのだろうか。見ていてコントのようだ。いつも放課後は時間があるから上手くやれば沢山作れるはずなのだが、成る程これでは作れそうにない。

「……あつ、美穂！愛してる！」

「なに？私はおまけ的な？」

明らかに後から思い出したように言われたので嫌悪感を言葉に含ませた。は、やはり言葉的には嬉しい。美穂は顔が少し熱くなるのを感じた。

「……よし、早速クッキーを作るぞ!」

「一九四一」

۱۰۷

大和が拳を上げると青山と松島が元気よく返事をし、一階堂がびつでもいいと言いつよく返事をする。

「お、……おー……」

美穂は恥ずかしくて小さな返事をした。顔が更に熱くなるのを感じた。

.....

型抜きをただ黙々とする。それから後は思い出したくないくらい酷かつた。青山と松島には散々馬鹿にされたし、大和と一階堂からは駄目だしされ、もう疲れた。

「はあ……」

思いだした。小さい頃少し料理の手伝いをしていたが、あまりにも危なっかしいのでドクターストップならぬマザーストップを受けたのだった。

私だって料理は作りたいが止めろと言われたからには無理には出来なかつた。そして今に至るといつ状況だ。

「どうした？」

「ひやあつー？」

「うわつー？」

不意に現れた大和に驚き思わず情けない声を上げてしまった。その声に驚いたのか大和も驚き声をあげた。

「あ……、『めん』

「いや……、で、どうしたんだ？」

「んー、ちょっとへこんでて」

大和はすぐに分かったのか（すぐに分かっても困るのだが）、料理のことか、と言った。間違いでは無いのでとりあえず頷いた。大和は考え込んで、

「心を込めればいいんじゃないかな」

と言った。

心を込める?と聞き返すと「うん」と頷き返した。

「下手でも、心を込めればまた違つてくるんじゃないかな」

心を込める……、小ちく反復する。なんだか自分で何か拭拭されていく気がした。ありがとう、とそれだけ言つと私はまた黙々と作業を始めた。

14 パソコン部女子（後書き）

「うう、相変わらず上達しない。」

翌日、朝から大和は菓子を貪っていた。珍しく洋菓子である。

「お、なにそれ。クッキー？」

「クッキー」

目敏くそれを見つけた宮城が大和に近寄る。

大和が持っていた菓子はクッキー。昨日、部員たち、それと美穂と一緒に作ったクッキーである。

本当は昨日のうちに全て食べてしまおうかとも思った大和だったが、夕飯前に菓子をあまりばくばく吃べるのはいけないと残していったのだつた。変なところで大和は眞面目だ。

ちなみにプレーンクッキーのほうは調理部スタッフとパソコン部たちが美味しくいただきました。

「へー、俺にもちょーだい。これチョコチップ? 美味そう」

「良いよ」

快くクッキーを分け与える大和。宮城は嬉しそうな顔でクッキーを口に入れた。

「おー、美味しい。やっぱお前料理上手だよなあ。」Jリーダーも食つて良い?」

「……別に良いけど、」

よつしゃ、と小さく呟いて宮城が一つまんだのは、美穂たちが担当していたココアクッキー。大和は少し心配そうな顔で宮城を見た。

「え、堅^{かた}つ」

バキ、というクッキーにあるまじき擬音が聞こえた。大和が悪いわけではないのに、大和はなんだかとても申し訳ない気持ちになつた。

「なにこれ。堅焼き煎餅？ クッキーと堅焼き煎餅ってどういう組み合わせだよ。やっぱお前、変わってる……、え、ココアの味がしきた。なにこれ怖い」

「それ、美穂が作ったココアクッキーなんだ」

「クッキー？ 嘘だろ?」

大和が作ったクッキーと材料は同じだるひに、何をどうしたら此処まで変わり果てた堅いクッキーを練成出来るのか、宮城には理解出来なかつた。

口の中のクツ キーらしき物体を碎くことは出来たが、堅過ぎて飲み込むに飲み込めない。無理に飲んでしまえば喉を傷付けてしまう。富城は恐怖した。

大和が飲み物を買つてきてやるべきか真剣に悩んでいると、別クラスであるはずの小百合が何故か、此方が遠慮してしまいそうなほど堂々と入ってきた。相変わらずの輝かしい笑顔である。

「大和くん、おはよ」

そして、やはり小百合の目には大和しか映つていらないらしく、大和だけに挨拶をした。隣で危険物に苦しむ富城などアウトオブ眼中である。

「おはよう、椿。どうした？」

「大和くん、和菓子が好きだつて前に言つてたから、お饅頭作つてきてみたの。お近付きの印に。食べてみて？」

「へえ、ありがとう！」

大和の小百合への好感度がちょっとびり回復した。もし、これが恋愛ゲームならば、大和の背景には大量の光と共に薔薇が咲き乱れていただろう。

大和は饅頭一つで眩い笑顔を簡単に見せてくれる安い男である。小百合は大和の笑顔にうつとりとしていた。

「あ、そうだ。じゃあ、俺もお近付きの印に！ クッキー、食べて
も良いぞ」

「わあ、本当？ ありがとう！ わたし、とっても嬉しい！」

小百合は笑顔で大和からのチョコチップのクッキーを受け取り、
ぱくりと食べた。

最高級のクッキーでも食べているかのように、大和の手作りのクッキーを大事に大事に味わっている小百合。そんな小百合を見て、大和はクッキーすら食べられないほど劣悪な環境に置かれているのか、と哀れんだ。相も変わらず大和は鈍い男である。

「美味しい！ 料理上手なんだね。こっちも食べてい！」

「あ……、それは、」

小百合は輝く笑顔のまま美穂が作ったココアクッキーを齧る。瞬間、小百合の笑顔が固まった。

「…………、か、堅焼き煎餅……かな？ 大和くんって、本当に和菓子好きなんだね。…………ココアの味がするなんて、独創的な料理ね」

「…………それ、美穂が作ったココアクッキーなんだ」

「…………嘘でしょう？」

これがクッキーなの？ とでも言いたげな顔で、小百合は歯形がついたクッキーを見つめた。

どうして自分も見ていて、尚且つ青山たちも一緒に作ってくれていたクッキーがこんなことになるのか、大和も不思議だった。

そして、自分の歯の頑丈さに感謝した。味だけを見れば、普通のクッキーなのだから。

気まずい空気になってしまったのを察してか、宮城が言った。

「ところで大和。お前、椿からもらつた饅頭食つてみれば？ ほら、口直し」

「あ……、うん！ 食べて！」

「……じゃあ、」

いただきます、と大和は饅頭を一つ口に放り込んだ。黒糖の香りと餡の滑らかな舌触りが口の中に広がる。大和は饅頭を飲み込んでから口を開いた。

「黒糖の匂いが、凄いな。結構入れただろう」

「あ、うん。中の餡が甘さ控えめだったみたいだから、量を増やしてみたの。……どう？」

「美味しい！ 僕、こりこり味、好きだ！」

「良かつたあ！」

不安げに曇っていた小百合の顔が一瞬にしてパアッと輝いた。

美味しい、美味しいと饅頭を頬張る大和。そして、それを恍惚の表情で見つめる小百合。宮城は、これで小百合の性格が良かつたら良いのに、と思った。小百合は色々勿体無い女である。

「そりいえば思つたんだけど、椿つて何気に料理出来るんだな」

富城が意外そつな顔で言つ。小百合は当然、と頷いた。

「だつて、女の子ならこれくらい出来て当たり前でしょう。それに、練習したもの」

「ああ、本当、勿体無い」

富城の言葉に大和と小百合が首を傾げた。中々氣の合つそつな二人である。

朝から小百合は今までになく気合いが入っていた。いつもより早く起きて、身嗜みを整え、可笑しなところがないかを入念にチェックしてから家を出た。学校に着くまでも何度も手鏡を見ては乱れたところはないかを確認した。

とにかく、気合いが入っていた。それも全て、大和の為だった。今日だけは女も男も誰も気にならない。いや、大和のことしか考えられなかつた、というほうが正しいのかもしない。

朝のホームルームが終わると、小百合は皆の怪訝そうな視線を無視し、昨日のうちに作つておいた饅頭を持ち、教室を出た。

いた、大和くん。小百合は内心でそつと呴いて、完璧な笑顔を装備した。

家で何度も鏡を見て笑顔の練習をしていた小百合。今の自分は、世界一可愛い。そう自己暗示をかけ、小百合は大和に歩み寄つた。

「大和くん、おはよー」

大和は小百合の存在に気が付くと何かに向けていた視線を小百合

のまつに遣り、にっこりと笑い、挨拶をしてくれた。おはよつ、椿、と。そんな些細なことでも、小百合の心はときめいてしまつ。

「どうした？」

何用かと問う大和に、小百合は本来の用事を思い出し、浮かれる心を叱咤した。緊張のしすぎてどきどきと五月蠅い心臓を無視して、手が震えていいかを確かめてから、小百合は饅頭を持っていた手を大和に差し出した。

「大和、くん、和菓子が好きって前に言つてたから、お饅頭作つてきてみたの」

小百合は混乱しかけている頭で考えた。どうしよう、何も可笑しなことは言つていいくと思う。だけど、心配だった。

待て、これでは自分が大和に好意を持つているといふことが丸わかりだらうか。別に、それでも良いが、いや、やっぱり良くない。恥ずかしい。

小百合は苦し紛れの一言を後から付け足した。

「お近付きの印に。食べてみて？」

大して与えられる印象が変わりはしないことに、小百合は一瞬で気が付いた。

しかし、大和はパッと顔を輝かせて言つた。

「へえ、ありがとう！」

（ああっ！　眩しい！）

小百合は危うく倒れ込むところであった。それほど、大和の笑顔は破壊力があった。

小百合の目に映る大和の背景には、大量の光と共に薔薇が咲き乱れていた。小百合の乙女フィルターは、（少なくとも小百合にとっては）素晴らしい効力を發揮していた。

思わず恍惚のため息を吐くと、今度は大和がクッキーを差し出した。小百合は迷わず受け取り、食べる。優しい甘さが身体中に沁み渡るようだった。

「美味しい！　料理上手なんだね。こっちも食べていい？」

大和が何かを言いかけていたが、小百合はそれに気付かないふりをしてクッキーを齧つた。

さつきまで幸せに浸り切っていた頭は一気に混乱した。見た目を裏切る硬度を持つたそれは、どうやらクッキーではなく、堅焼き煎餅だつたらしい。

フォローが出来ない。これはさすがに美味しいだなんて言えない。

小百合は当たり障りの無い言葉を吐き出した。

すると、大和が一言。

「……それ、美穂が作ったココアクッキーなんだ」「……嘘でしょ？？」

こんなものをクッキーと呼ぶには、おこがましすぎる、と小百合は思った。しかも、坂田が作ったものだったとは。

坂田自身に小百合を陥れようという意図はなかつただろうが、小百合はまんまとしてやられた氣分だつた。

それにも、と小百合は堅焼き煎餅を見た。

よくもまあこんな物体を生成出来たものだ、と思う。料理が出来ないとは聞いていたが、まさかこれほどまでとは。坂田は女として色々失格なのではなかろうか。

小百合が哀れむような複雑な心境を抱いていると、不意に宮城が言った。

「ところで大和。お前、椿からもつた饅頭食つてみれば？ ほら、口直し」

よく言った。小百合は宮城を力一杯褒めちぎりたかった。たまには阿呆も自分の役に立つようだ。

そう、今こそ、坂田と自分の魅力の差を大和に見せ付けるのだ。

小百合は期待と不安が入り雜じつた眼差しで大和を見つめた。ゆっくりと大和の口に饅頭が運ばれていく。やがてそれは咀嚼され、飲み込まれた。大和が口を開く。

「黒糖の匂いが、凄いな。結構入れただろ？」

さすがに気付くか、と思いながらも小百合は緩む頬を隠せなかつた。こんな細かいところまで気が付くなんて、なんだか嬉しい。

「中の餡が甘さ控えめだったみだから、量を増やしてみたの。…どう？」

「美味しい！俺、こういう味、好きだ」

わたしも（饅頭じゃなくてあなたが）好き！と叫びたい気持ちをぐっと堪えて、何も言わず、満面の笑みを見せた。

小百合の大和の好感度を上げようという作戦は、かくして大成功に終わったのであった。

椿 小百合視点 6（後書き）

私の書く小百合は大和と一対一のときのみ乙女になるようです。

美穂はものすごく落ち込んでいた。手元には昨日自分が作ったクッキーがある。原因は他でもないこのクッキーだった。

昨日、美穂は帰つてから初めてちゃんとした形に出来たクッキーを感動しながら食べた　　はずだつた。食べれなかつた。なんとか噛み碎くことは出来たが、なんとも後味が悪い。

(これは、本当にクッキー？)

見た目はクッキー、中身はよく分からぬるもの。何なんだ、これは。おかしい、今回はちゃんと手順も合つていたし、材料の分量も間違えていない。青山と松島にも手伝つてもらつたのだ。間違えるわけがない。

……あれか？あのサックリつてところか？いや、あれはココアを入れるところだ、違うに決まつている。

そんなことを悶々と考えていたら頭が痛くなってきた。結局クッキーは放置した。

結局クッキーは食べれないので仕方ないから誰かに押し付けてしまおうかとほんと投げやり状態になっていた。

美味しそうなクッキーを一つまんで口に放り込めば途端にガキリ、と嫌な音。どこを間違えたんだ、と必死に考えていると後ろから突然声をかけられた。

「珍しく、元気がないな！？」

「？！？」

近くで、それも大声で声をかけてきた。私は奇声しか口にできなかつた。まあ、こんなことを出来る奴は少なくとも私の知っている中では一人しか存在しない。

「……本多、つるさい」

「おお！それはクッキーか！？」

無視。まさか無視されるとは思わなかつた。ちょっとの間思考停止になり、すぐに回路復活。クッキーについて聞かれたという事を理解し終わると言葉を探す。

「ただけど？」

「ふむ、貰うぞ！」

「つな」

いきなりひょいと手を伸ばしクッキーを口に放り込んだ。あつとう間の出来事だったので制止することも出来なかつた。ああ、どうしようか、と頭を抱え込む。

「ぬう！ 美味だ！」

「……はい？」

「中々の味だ！ 坂田が作つたのか？」

あのクッキーをまるで最初から普通のクッキーをだつたかの様にバリバリと噉み砕いている。私個人としてはサクサクが良かつたのだが。

「そうだよ…。 ていうか美味しいの？」

「先程からそう言つておる」

平然と言つてのけた。野球部キャプテンは一味も二味も違うんだな。そのあともばくばくと食べていたので最終的に全部あげた。こっちも処理に困つていたからちょうど良い。

しかし、まさか美味しいと言われるとは思つていなかつた。相手は本多だが美味しいと言われて嬉しくない人はいないとと思つ。

心を込めればいいんじゃないいか

不意に大和の言葉を思い出す。そうだね、本当にその通りだ。作れば分かつてくれる人は必ずいる。さつきの落ち込み具合から打つて変わつて少しハッピーな気持ちになりながら今度何か挑戦してみようかと思つた美穂だつた。

16 パソコン部女子（後書き）

浅知恵を絞りすぎたせいから馬鹿に近付いた気がしてならない。
これからもこんな私の小説を見てくれれば幸です。

放課後。暖かな夕陽が窓から射し込む頃。大和と夏輝は何故か生徒会室で菖蒲を巻き込んで、文化祭の話し合いをしていた。

学校の地図を机上に広げながら必死に説明をする菖蒲。そんな菖蒲の顔を一心に見つめている夏輝と、頬杖をつきながら聞き流すよう話を聞いている大和。菖蒲の苦労は計り知れない。

大和はお茶請けのせんべいに手を伸ばした。が、何も無い。既に夏輝によって食い尽くされていたようだ。見境無しか。仕方なしにお茶を飲んだ。

「そ、それで、パソコン部と調理部合同の出し物は此処でやる」とに決まつたんだけど……」

菖蒲は説明をしながら、おどおどと夏輝と大和の顔色を窺つている。自信なさげに、声はだんだんフェードアウトしていった。

菖蒲の白い指が示す箇所を見つめながら、大和が言う。

「ふうん、校門付近か。やりやすいのかやりづらいのか、微妙なところだな」「い、ごめんなさい……」

大和の言葉に菖蒲は目を伏せた。細い肩を強張らせて、大和の視線から逃げるよう身体を小さくしている。すると、夏輝がムツとした顔で菖蒲のフォローに入った。

「良いじゃん。来た人間、皆の目に触れるんだから、やりやすいに決まってるだろー？」

「別に嫌だとは言つてないだろ？」「

勘違いをさせたなら、悪かつたな、と大和が小さく言つた。表情は気まずげだ。菖蒲は慌てて首を横に振つた。その様を見て、夏輝は満足気に笑んだ。

「それに、何処でも良いつて言つたのはあたしたちだ。文句なんて言えないし」

「おい、それは聞いてない」

サッと表情を変えた大和。それを一瞬で察知した夏輝が菖蒲の背に隠れようとするも、時すでに遅し。がしつと頭を掴まれ、アイアングローブお見舞いされた。場所取りという重要な案件を、何をお前の独断で決めてくれているのだと。

頭が割れてしまうのではないかと思うほど痛みに必死にもがく夏輝だったが、その抵抗も空しく、結局夏輝が謝るまで大和の手が離されることはないなかつた。

大和と夏輝が落ち着いたところで、菖蒲が切り出した。

「……それで、部活の出し物は部活の予算になつかうんだけど、余裕はある？」

暫し考え込む一人。先に口を開いたのは大和だった。

「……これからまたいくつか調理実習を控えていることだし、あまり使いたくないな。パソコン部のほうにはいくらくらい部費がいつているんだ?」

その質問を受けて、菖蒲は本棚の中からあるファイルを取り出し、ページをぱらぱらと捲つた。どうやら、菖蒲が取り出したファイルは各部の詳細が書かれた書類をまとめたものようだ。

「ええと……、インク代とかコピー用紙のぶんで四万五千。人数が文化部のわりに結構いるみたいだから、そのぶん上乗せで五千」

「五万か。中々だな」

答えを聞いて、大和はふむ、と少しの嫉妬も混ぜて頷いた。自分の部活よりも一万多い、と。

「でもインクも用紙もそこませすぐに消費しないだろう? いくら残ってるんだ」

「えーと……、ほとんど残っていないんだな、これが」

「なんで!?

夏輝は誤魔化すような笑みを浮かべて、頬を搔いている。大和の頭には、一瞬、最悪な展開が過った。

よもやこの女、部費を部に関係の無いことで使い込んだではないだろうな。

半ば祈るよつて夏輝を見つめると、夏輝はぼそりと言つた。

「お茶と、お茶請けのお菓子を、」

「そのなげなしのものも削られたいのかまな板」

悉く（嫌な）想像通りの行動しかしない夏輝にはほとほと呆れ果てる。大和は表情を引き攣らせながら、夏輝に渾身の蹴りをお見舞いした。

「ぬおおおお……！」

夏輝は頭を押されて蹲つている。そんな夏輝に慌てて駆け寄る菖蒲。大和は痛む足を擦つてお茶のおかわりを入れた。荒み始めた心が少し落ち着いた。

「……まあ、済んだことはもう仕方ない」

「さすが少年！ おっとこまえ～！ 菖蒲は可愛いー！」

「つえ……！ あ、ありがと～……」

何故こいつらは隙あらばいちゃつとするのか。大和は少し冷めた目で一人のやり取りを眺めていた。

ふと、大和が窓の外に目をやると、かなり日が暮れてきていた。もう電気をつけていなければ作業が滞ってしまうような時刻だろう。話はもう終わっている。解散を告げようとした大和に、夏輝がさつきまでとは違う真剣な目で大和に言った。

「少年、きみって最近、あの女と仲が良いんだってな」「椿のことか？……まあ、友人だからな」

それがなんだ、と大和は夏輝を見遣る、菖蒲は少しだけ顔色を変えた。夏輝は何も言わず俯いていたが、すぐに顔を上げた。

「きみ、落とされんなよ
「落とされ……？」
「……意味がわからないなら、それで良いわ」

訳がわからないと顔を歪めた大和に、菖蒲が囁くようにそつと言う。

その言葉の意味がわからなければ、お前たちが危惧していることの回避もしようがないだろう。大和は声に出さず、心の内で思った。

「もう田舎い奴は落とされてる。あたしら女がひとつではや、それが最後の皆みたいなもんなんだ」

「とり、で?」

「……私たちね、この学校を守りたいの。これ以上、崩れないよう

に

神妙な顔で菖蒲が呟いた。夏輝は眉を寄せながら言つ。これ以上は、抑えきれないのだ、と。

相変わらず大和には理解出来ない言葉だったが、この学校にとつて、何か良くないことが起きようとしているということだけは、わかつた。

「あたし、あの雌豚は嫌いだけどな、あいつは悪くねえって知ってるから」

「……この学校は、勝手に崩れたのよ」

菖蒲の最後の言葉が、自棄に大和の耳についた。

17 調理部男子（後書き）

部の予算の振り分け、文化祭については適當です。想像上のもので
すので、あまり突っ込まないでいただけないと嬉しいです。

カタカタとキー ボードを叩く音が静かなパソコン室に響く。今日は私と男子部員一人しか部活に来ていなかつた。よりもよつてなんでこいつら、と嘆いたが今日は割と大人しい。実は二人には寄せのためにポスターを造つてもらつていた。部活のポスターくらい造つてもらおうと思ったのだがほとんどが逃げ帰り、最終的に残つていた二人に強制的にやらせることにした。

「わか、 らないっ！！」

「お、 落ち着け！」

「はあ……」

滝下は部長 LOVIE になるまでは一応真面目だつたよつだ。今は本田の役割を担つてくれている。なんとも有難いことだ。

部長は会議に行つてくるとか言つてさつさと出て行つてしまつた。この様子では恐らく今日はもう顔は出さないだろう。

突然、何を感じとつたか二人の動きがほぼ同時に止まつた。二人はそのままパソコンの置いてある机の下に潜つた。正面から見れば分からぬだろうが横から見れば丸見えだ。

しばらくすると足音が遠くから聞こえてきた。いろんなタイミングで足音が聞こえてきたからまあまあの人数だと思う。近付いてきたがパソコン室には止まらず、進んで行つた。白川と滝下はほつとした顔で机の下から出て來た。

「一体どうしたの?」

「ふ、副部長はあれが分からないと嘆つかないか」

「あれは部長とは比べものにならない椿といつ恐ろしい奴の親衛隊だよ」

びつから逃げ回つてゐるようです。既に親衛隊の被害に遭つている部員がいるのにこいつらまで狙われてたのか……。少し頭が痛くなつた。私にはイケメンとか普通の顔とかよく分からぬけど少なくともこいつらは普通辺りに属するんじゃないかな?

まあ、大体の男子は色んな意味で終わつてるからまだマシだ。というか富城も狙われないのでお前らが狙われるつて……。

「副部長、会議終わつたよー」

「ん、お疲れ部長」

珍しく生徒会長を連れずに単独で来た。いつもとせむりやんと仕事をするときだけだ。

戻つて来るのは思わなかつたがまあ良い。確か今日の会議は場所決めがどうとか言つていた気がするから戻つて来る可能性はあつた。発作が始まつた滝下を黙らせてから話に戻つた。

「で、どうなつたの?」

「んー、校門の近く」

随分ザックリと説明してくれました。わかりやすいといえばわかり

やすいんだけど。それにしても校門の近くか。

「場所がなかつたからつていい、つてことはないよね？」

「それはない。菖蒲は仕事をちゃんとやる子だ」

キリッとした真剣な眼差しで言い切った。その真剣さ、是非とも仕事に回していただきたい。部長も生徒会長を見渡すつよ。

「それならいいわ。あとは本番が問題ね」

「その話だけど、副部長大丈夫？」

「ヤニヤしながらこっちを見ている。元々こんなことになつたのはあなたが原因だつていうのに……。軽く睨み返してから溜息をついて男子部員に指示をだす。

「ポスターに場所入れといて」

「えー、あたしは無視？」

「分からんんだが……」

「私が教えるわ、大丈夫よ」

「やつぱり無視？」

面倒になるのは困るので起きかけていた滝下をもう一度氣絶させた。部長は無視しつづけたので諦めたのか帰つて行つた。

パソコン室にはゆっくりと途切れ途切れのキーボードを叩く音が響

いていた。

18 パソコン部女子（後書き）

自分で出しどいて男子の口調があんまり決まっていなかつた。
また分かりにくかつたら「めんなさい。

「……ねえ、」

今は休み時間。学生たちにとつては授業の後舞い降りた女神と言つても過言ではない、貴重な時間である。生徒たちの喧騒が、3-2を支配している。3-2は今時珍しく仲の良いクラスで、皆が冗談を笑顔で交わし合つていた。

そんな和やかな時間を壊すように、ある来訪者がやつてきた。

「お前は……、」

見覚えのあるような、ないような顔だ。大和はそんな曖昧な記憶から思わず呟いた。その言葉を受け、男は笑つた。美しくも、何処か危うい雰囲気が漂う笑顔だった。

「あれ、僕のこと、知つているんですか？ 光栄だなあ」

くすくすと笑う男に、傍にいた宮城が少しだけ嫌そうな顔をした。こういうタイプの人間は何故か好かない、彼は前々から溢していた。

「お前は……、」

もう一度、言つ。男は何を思ったのか、笑みを深めた。

「奥さん？」

「名前に“わん”をつけるんじゃない！ 奥で良いです」

確か、そんな感じの名前だった、よつな気がする。大和はそんな思いから念の為、確認をとつたが、どうやら地雷を踏んでしまったようだ。今にも飛びかかってきそうな鬼気迫る形相で男は怒鳴った。

奥 恵斗。 それが、生徒会副会長である彼の名前である。副会長と言つても、今はろくに仕事もせず、小百合の奴隸と化しているが。ちなみに、敬称をつけると途端に人妻になってしまふ自分の名字がコンプレックスらしい。

それにしても、副会長様がいつたい自分になんの用なのだろうか。大和は首を傾げて、思った。夫は良いのか、ど

「止めて下さい！ 不快です！」

「どうやら声に出してしまつていたようだ。奥は本当に嫌そうな顔をしてくる。

夫というのは、同じ生徒会役員である越戸 義樹のことだ。一人揃つて生徒会の夫婦と呼ばれている。本人たちは不本意だそうだ。越戸の役職は会計である。しかし、奥と同様に仕事を放棄し、遊び歩いている。

奥は微妙な空気を散らすように佇まいを直し、咳払いをした。それだけで場に緊張感が戻つてくる。伊達に、副会長を務めてはいないうだ。さすがのカリスマ性である。

クラスの人間たちは身構えた。万が一のときには、大和を逃がせるように。何故ならば、彼らには奥がどうして大和を訪ねてきたのか、なんとなく見当がついていたからである。

奥は小百合に大層惚れ込んでいる。当の小百合は最近大和に構いつきり。現状の情報を整理すればすぐにわかる、簡単な推理だ。

「僕が此処にきた理由は、勿論わかっていますよね？ わかつてないなんて、言わせないから」「悪いな、わからない」

言った。“言わせない”と言われたそばから、なんの躊躇いもなく、大和は言った。少し不穏な空気が流れ始めた教室内で、宮城が冷や汗を垂らした。まずいかもしね。宮城はクラスの人間たちとアイコンタクトをした。

それに気付かず、大和は陽気に笑っている。奥の表情が怒り一色に染め上げられた。

「そうやって天然ぶつて、小百合を誑かしたんですか……！」
「天然？」

意味がわからない、と大和は眉を下げた。そんな些細な行動でさえも気に障るようで、奥は目を吊り上げ、大和に掴みかかった。突然のことに驚いて目を見開く大和に構うことなく、奥は大和に怒鳴りつけた。

「気に食わないんですよ！ 後から出できたくせに、小百合と馴れ馴れしくして！」

「椿？ 椿と俺は友達だぞ？」

何故そこで小百合の名が出てくるのか、大和は訳がわからなかつた。取り敢えず何かを誤解されているのは確かなようなので、訂正を入れておく。自分と小百合は友人なのだと。しかし、奥はそれを鼻で笑い。撥ねつけた。

「はっ、どうだか。口ではいくらでも言えますよ」

意味もわからず、見知らぬ人間に罵倒され続ける。いくら心の広い人間であつても、ほんの少しも苛立たない者がいるだろうか。そんなわけがなかつた。大和は聖人君子では無いのだ。なんの謂れもない暴言を浴びせられたら、当たり前に苛立ちを感じる。

今にも感情のままに喚き散らしてしまいそうな口を抑えて、大和は深呼吸をした。大和は阿呆ではあるが、愚かなわけではない。そんな行動をとつても、事態は収束の方向に向かつていかないことなどわかりきつていた。

「……じゃあ、どうすれば信じるんだ？」

大和が色々な言葉と感情を呑み込んだのを、クラスメイトたちは気付いたらしい。気遣わしげな顔をした。

いや、こんなあからさまに自分を落ち着かせるような行動をしていたら誰でも気付いて当たり前だが、生憎目が濁りきつた奥には気付けなかつたようだ。

大和は自分を心配そうに見ているクラスメイトたちに笑みを返してから奥に向き直つた。気分は魔王の配下の四天王の部下に戦いを挑む勇者である。

周りの様子に奥は気付かず、言った。

「じゃあ、今後一切小百合には近付かないで下さい」

此處で、今まで必死に抑えていた大和の怒りが爆発した。

「友達に近付くなと言われて素直に従つとでも思つたか！ 僕はそんな薄情な人間じゃない！」

「、なんです、やっぱりお前も小百合に当たつたんじゃないか！」

思わず横つ面を殴り飛ばしてしまいそうになる。暴力を振るえ、自分はこいつよりも人間としての程度が下の、畜生に成り下がるのだ。大和はそう必死に言い聞かせ、しかし、奥を睨みつけた。

その余りの眼光の鋭さに、奥は怯んだ。大和はその隙を見逃さず、また怒鳴った。

「だいたい、どうしてお前は人の友好関係をそう歪んだ目でしか見れないんだ！」

「ツ歪んだ目！？ 失礼な！ 僕は事実を述べているだけです！」

「だから、それが歪んでいると言つんだ！」

大和に、小百合に対する恋情など、これっぽっちもない。ありもしない妄想を並べ立て、事実なのだと信じて疑わない。それの何処が歪んでいないのか。

そう言うと奥は返す言葉が見つかなかつたのか、ぐつと黙り込んだ。すると、休み時間終了と授業開始を知らせるチャイムの音。それと同時に次の授業を担当する教師もやってきた。二階堂である。

「……奥？ おい、お前の教室は此処じゃねえぞ。さつさと自分のクラスに戻れ」
「……すみません」

奥の存在に気づいた二階堂は氣だるそうな表情で注意をした。本当にやる気の欠片も見えない男である。

「……ああ、それとお前、最近生徒会の仕事サボつてゐらしーな。え？ 成績に響くかんな、覚悟しとけよ」
「ツ失礼しました！」

半ば怒鳴るように退室の言葉を口にした奥は早足で3・2を後にした。

先述した通り、大和は聖人君子などと評されるほどの徳を持つてはいない。そして、それはクラスメイトたちにも同様のことが言える。

気に食わない人間など山ほどいるし、その人間が赤つ恥を搔かされれば愉快なことこの上ない。

姿が見えなくなつた途端、耳を劈いた盛大な笑い声に、奥はその端正な顔を忌々しげに歪め、舌を打つた。

この突然の予期せぬ奥の来訪により、大和の存在は“小百合ちゃん親衛隊”に広く知れ渡り、そして、それが一つの大きな波乱を呼ぶのであった。

だるい、すぐだるい。

美穂は知らず知らずの内にウトツトし、ガツンと額を机に強打した。学校では居眠りをするタイプではないのだがさすがに昨日の徹夜はこたえたようだ。幸いにも今は休み時間だ。

美穂は頭をあげるとまたしてもウトウトしだし机に額を強打した。さつきからこれを繰り返している。周りにいる生徒は笑いながらこれを見ているが美穂は気付いていない。

何回かこれを繰り返していると今度は運よく腕に額が押し付けられた。美穂がついに熟睡し始めた時だった。

「気に食わないんですよー後から出てきたくせに、小百合と馴れ馴れしくして!」

この怒声で美穂はようやく目覚めた。小百合と言う所とあの声を聞けば大体誰かは察しがつく。まあ勝手に決め付けてしまうのはあんなので様子を見に行つていた男子に話を聞くことにした。

「……この馬鹿声の発信源は誰

「生徒会副会長の奥さん、だよ。坂田だつて知つてんだろ」

「確認よ」

予想ができてはいたが正直反応じづら。『生徒会副会長の奥さん

”と言うと本当に副会長に妻がいるようだから凄い。

それにしても面倒だ。そこらにいる災ほんだの種なら簡単に蹴つて黙らせることが可能なのだが相手は副会長様様だ、退散するかもしれないがそのあとで私が色々大変だ。いつもいつの間にか面倒事に巻き込まれているのに自分から首を突つ込むなんてごめんだ。

「で、誰が副会長に怒鳴ら、」

「友達に近付くなと言われて素直に従つとでも思つたか！俺はそんな薄情な人間じゃない！」

「、なんです、やつぱりお前も小百合田当てだつたんじゃないか！」

相手が誰かはすぐに判明した。あの声は間違いなく大和だ。きっと大和が言つてることを聞くと大方近付くなと言われたんだろう。大和は友達思いのいいやつだ、昔私があまり人とは話さないタイプだつたのにいつも話に来ていた。

懐かしい、と目を細めるとまたしても怒声が響いた。

「だいたい、どうしてお前は人の友好関係をそう歪んだ目でしか見れないんだ！」

「ツ歪んだ目！？失礼な！僕は事実を述べているだけです！」

「だから、それが歪んでいると言うんだ！」

きっと椿は恋愛対象として大和を見ているだろうが大和はそんな気持ちなど一欠片もないだろう。だが、周りから見れば仲の良いカツブルに見えて仕方なく思える。大和は分け隔てなく接しているか

らその笑顔がそう見せるのだろう。

そういうえば大和はまだ椿のラブコールに気付いていないようだ。しばらくは安全と見ていいだろう。

始業の鐘が鳴つた。これで怒鳴り合いも聞かなくて済むだろう。この時間の授業を担当する釜元かまもとが教室に入ってきた。担当教科は英語だ。

釜元の最初の説教じみた演説を適当に聞き流す。そういうえば文化祭は今週末だったなと思い出し、その日までにもう一度クッキーに挑戦しようと決意した。

20 パソコン部女子（後書き）

番外編を私も書きたいのだが片岡わんの書くスピードが早い。
ペース落してくれても良いよ……。

誰が落とすか。

実は、じつ見えて大和はよく図書室に立ち寄る。そのほとんどが菓子作りの為の資料を借りになのだが、たまに小説を借りていったりもする。偉人伝であつたり、戦記であつたり、その種類は様々だ。

今日は、レシピの本を借りに来ていた。時々手に取り、眺めては元に戻すという動作を繰り返していた大和は、不意に声をかけられた。

「ねえ、広崎くん」

少しだけ驚いて、本を落としそうになる。何事も無かつたかのように大和は声の主を見た。正体は、同じクラスの女子であつた。

何度かテストのヤマを教えてもらつたこともあり、大和は少しだけこの女生徒に好感を持っていた。名前は確か、やまおか山岡さん。教師からも頼りにされる優等生で、テストになると皆の先生役として、引っ張り凧になる。

「なんだ？」

大和は笑顔で用件を訊ねた。山岡はほんのり頬を染めると、すぐ

に気を取り直して言った。

彼女は勉強をしに、此処に来ていたのだろうか。大和はぼんやりそんなことを思っていた。机に勉強道具が広がっていたから、きっとそれで当たりなのだろう。

「広崎くんは、椿のこと好きじゃないんだよね」

「うん……？」

わざわざ自分の勉強を中断してまで訊くことが、それ？大和はなんだか拍子抜けした気分だったが、隠す必要も無いことなので素直に答えた。

「好きだぞ？ 友達だもんな」

大和の言葉に山岡は一瞬だけ息を詰めたが、すぐに安心したように表情を緩めた。そしてくすくすと笑い出す。普段は落ち着いた雰囲気を持つ彼女だが、こういうときは随分年相応だ。

「そう、良かつた。そうだね、広崎くんだから、そうだよね」

いつたい何に対してもこんなにも深く納得されているのか。大和は不思議だった。漸く笑いを収めると、山岡は短く別れの言葉を告げてから自分の勉強に戻った。

なんとなくもやもやした気持ちになりながら、大和はレシピを手

に、図書室を後にした。

大和は菓子作りに関しては一切の妥協を許さず、そして慎重だ。部で菓子を調理する前には、最低でも一度は必ず自分で作つてみる。失敗しない為の予行練習ということもあるが、もう一つ理由がある。それを作るべきか否かを確かめるのである。

そして、味が気に食わなかつたり、青山や松島、一階堂が嫌いそうな味だと思ったときは違うものを作るのである。

突然、作るものを変えたりしても、その作るのは以前調理したことのあるものだけと決めている。

大和は食事は楽しいものであるべきと考えている。嫌いなものを食べて楽しいと感じるわけがない。だから、大和は事前の調査を怠らないのである。

大和はゆっくりと調理室に向かつた。本当は家に帰つて作つても良いのだが、なんとなく調理室で作ろうと思つた。出来たら先生にもわけてやろう。そんなことを思いながら、階段を昇つていく。

今思えば、この選択が最初の間違いだつたのだろう。

調理室につき、鍵を開ける。ドアを開けよつとしたら、何故か開かない。

「……あれ?」

可笑しいな、可笑しいな、と咳きながら何度もガチャガチャやつていると、漸くドアが開いた。どうやら最初から鍵は開いていたようである。なんとなく恥ずかしい思いになりながら、大和は調理室に足を踏み入れた。

最初から鍵が開いていたということは、誰かが此処にいるということだ。放課後にこんなところに来るのは部員の誰かしかいないだろう。もしかしたら一階堂かもしれない。

見知った姿を見つけようと部屋の中を見渡すと、視界の端に栗色を捉えた。

あれは、

「……椿？」

「大和くん」

窓のすぐ傍に、小百合は立っていた。

今まで外を眺めていたのに、大和が来ることをわかつていたのか、全く驚く様子も見せない。ゆつたりと振り返り、うつそりと笑む小百合。

大和は小百合のその笑みに、何故か空恐ろしいものを感じた。そんな気持ちを誤魔化すように、大和は笑顔で話しかけた。

「椿、こんなところで何してるんだ？」

「大和くんに、用があつて」

「俺に？」

そう、と小百合は深く頷いた。

この違和感は、いつたいなんなのだろうか。小百合に初めて会つたときから感じていた違和感。何か

「ねえ、大和くん」

「つな、なんだ？」

思考の海に突然割つて入つた異物。一気に引き上げられた大和は小百合を見た。

いつの間にか小百合は大和の傍まで来ていた。そつと頬に手を当てられ、思わずひくりと頬が引き攣つた。

「大和くんは、わたしのこと、好きなんだよね」

大和の顔を覗き込んだ暗い、虚ろな瞳。身の毛がよだつた。

「ねえ、そうでしょう。わたしと恋人になりたいよね
「な、なんで？」

まるでそれが運命で、最初から決まっていたことなのだと、そう言わんばかりに小百合は言う。大和は咄嗟に疑問を口に出してしまつた。

「……だって、大和くん言つてくれたよね。わたしのこと好きだつて」

言つた覚えが無かつた。確かに友達としては好きだが、恋愛対象として小百合を見たことは無かつた。だいたい大和の好みのタイプは素朴な女性だ。小百合では明らかに合つていない。

「恵斗にわたしに近付くなつて言われて嫌だつて言つたんだよね。ねえそудでしよう。ねえわたしのこと好きだよね好きだよね絶対そう」

小百合は虚ろな瞳のまま大和に抱きついた。大和は、思わず小百合を突き飛ばしてしまった。目を見開く小百合。

「な……なん、でえ……？」

じわじわとその大きな瞳に水分が溜まり始めるのを見て、罪悪感が湧きあがる。だけど、そんな酷い気持ちだけで抱き締め返すことなんてしない。二人とも苦しむだけだとわかっている。

「わ、悪い。俺は、違うから」

お前は自分を好いてくれているのかもしれないけど、周りにはお

前を好いていてくれている奴がたくさんいるのかもしけないけど、でも、自分は違う。

大和はそのまま走り去った。やっぱり、菓子は自分の家で作ろう。

自分の後ろ姿をいつまでも見つめる小百合に、気付かないまま。

21 調理部男子（後書き）

ちよつと病んでおましたね。

授業が終わり、のんびりしていたとき、隣のクラスが何故か騒がしかつた。見に行つてみると、奥と大和が言い争いをしている。小百合は愕然とした。

周りにいた野次馬たちは言い争う二人の姿を目に入れてから、早々に退散している。巻き込まれないようにどううか。自分を見ている小百合に気づかず、奥は言った。

「じゃあ、今後一切小百合には近付かないで下さい」

小百合は思わず奥を殺したくなつた。何を余計なことを、大和にいつたいなんて口を利いているのかと。

「紛い物のくせに、びつしてわたしの思い通りにならないの……？」

ぎり、と親指の爪を噛む。口を離すと爪の形は歪んでしまつていった。どうにもならない苛立ちを抱え、眉間に皺を寄せていると、奥の声のすぐ後に聞こえてきた大和の声。その言葉に、小百合は顔を赤らめた。

「友達に近付くなと言われて素直に従つとでも思つたか！　俺はそんな薄情な人間じゃない！」

「、なんです、やっぱりお前も小百合田当てだつたんじゃないか！」

“近付くなと言われて素直に従つとでも思つたか”、なんて。“お前も小百合田当て”だなんて！

小百合は昔から一つのことにしか集中出来ない。何かをやりはじめたらそれ以外目に入らないし、誰かの忠告も聞けない。だから、狂喜している小百合には、大和の友達という言葉も耳に入らなかつた。

小百合は放課後、調理室に来ていた。大和に会うためだ。調理部でもない小百合が、放課後、調理室に用があるから鍵を貸してほしいなどと言うから随分不審に思われたが、なんとか誤魔化した。

それにしても、大和はまだどうか。小百合は待ちきれないといつた面持ちで窓の外を眺めた。待ちきれないと言つても、それが不快だというわけではない。寧ろ、その待つ時間でさえ愛しくて堪らない。

暫く外に視線を遣つていると、ドアが開く音。ああ、來た。

「……椿？」

「大和くん」

大和の呼び掛けに小百合はすぐに応え、振り向いた。大和は少し驚いたような顔をしている。いつもは素敵なのに、そういう顔はとても可愛い。

大和の瞳が怯えを孕んでいたなんて、きっと氣のせい。だって、大和はすぐに笑顔で小百合を見たのだから。

暫くやり取りを交わすと、大和は何かを考え込んでしまった。自分を見てほしくて、小百合は大和に近付き、名前を呼んだ。バツと勢いよく上げられた顔に、そつと手を当てる。ぴくりと大和の表情が動いた。照れなくても、良いのに。

「大和くんは、わたしのこと、好きなんだよね」

小百合には、大和と初めて出会った瞬間からわかつっていた。この紛い物の箱庭の中で、大和だけが唯一自分の“本物”になり得る存在なのだと。

だから、連れていつてしまおう。だって、自分たちは両想いなのだから、大和だって喜んでくれるはずだ。確認のため、また言つた。

「ねえ、そうでしょう。わたしと恋人になりたいよね
「な、なんで?」

なんで、だつて。小百合は思わず笑ってしまった。どうやら、小

百合の王子様は随分と照れ屋なようだ。いや、もしかしたら自分の気持ちに鈍感なのかもしれない。

大和の、自分への想いを気付かせてやるうと優しく語りかけた。

「……だって、大和くん言つてくれたよね。わたしのこと好きだつて」

大和の表情に困惑の色が差した。どうして、そんな顔をするのか。やつぱり、鈍感なんだろう。此処まで言つても気付けないなんて。

「恵斗にわたしに近付くなつて言われて嫌だつて言つたよね。ねえそうでしちゃう。ねえわたしのこと好きだよね好きだよねえ絶対そう」

これで漸くわかつただろう。小百合は幸せな気持ちで大和に抱きついた。きっと、大和はこの逞しい腕を自分の背に回してくれる。しかし、小百合を襲つたのはそんな甘い妄想ではなく、軽い衝撃だった。

大和に、突き飛ばされたのだ。

「な……なん、でえ……？」

思わず目を見開いた。どうして、どうしてどうしてどうしてどうして…!

これはもう、鈍感だと照れ屋だと、そんなことでは済まされ

ない。大和は、小百合を抱き締めなければならないのに。どうして自分も小百合のことが好きだと、愛を囁き返さなければならないのに。

「わ、悪い。俺は、違うから」

小百合は、今度こそ大和の言葉に含まれた真意を正しく受け取つた。受け取つて、しまつた。

お前は自分を好いていてくれているのかもしないけど、周りにはお前を好いていてくれている奴がたくさんいるのかも知れないけど、でも、自分は違う。

大和はそのまま走り去つていつてしまつた。

小百合は、信じられない気持ちで大和の背を見つめた。

暫くして、小百合はキッと天を睨み付けて叫んだ。

「ツビういうこと！？ 一人は“本物”に出来るんでしょう！？
なら！ 早く“本物”にして！ 大和くんをわたしの王子様にして
よー！」

何を言つてゐるのか。もしも此処に小百合以外の人物がいるのだとしたら、きっとこう思ったことだろう。

しかし、小百合以外誰もいなはずの調理室に、機械のような無機質な声が響いた。

“攻略対象に入つていません。キャラクターを選び直して下さい”

「なんですよ……ツー！」

こんなにも自分は大和を愛しているといつに結ばれることも許されないのか。まるで、悲劇のようだ。

小百合は唇を噛み締め、携帯電話を耳に当てた。

もう良い。手に入らないなら壊すまで。ぐちゃぐちゃに壊れてしまつて、そして手を差し伸べてやるのだ。そうすれば、きっと大和は自分だけを見る。

「もしもし、義樹」

ワンコールで出た相手。前までは愉快で堪らなかつたのに、今は煩わしいだけだった。

「広崎 大和くんのこと、虜めてくれる？」

そう言つたときの小百合の笑顔は妖しく、まるで人間を惑わす悪魔のようだった。

椿 小百合視点 7（後書き）

いじの怖いよ！

昔、唐の国に玄宗げんそうと言つ皇帝こうりょうがいました。玄宗は朝廷の帝位を巡る争いを収め即位した六代目ろくだいめの皇帝でした。玄宗は優れた政治を行い、世を正してきました。

ある日のことです。玄宗は息子の寿王じゅおうの后ご、楊玉環ようぎょくかんに一日惱れをし、取り上げて自分のものにしてしまいました。このとき玄宗は楊玉環ようぎょくかんを貴妃の位につかせ、楊貴妃と呼ばれるようになりました。それ以来、楊貴妃を溺愛なぐさわしている玄宗は政治に关心がなくなり世は荒れていました。

しばらくして朝廷では楊貴妃の一族じゆうが力を持ちはじめました。その朝廷では楊貴妃のまといとこにある楊國忠ようこくちゆうと楊貴妃に気に入られている安禄山あんろくざんが敵対していました。

それから時が経ち、楊國忠は政治を動かす立場の宰相さいしょうになりました。これを知った安禄山は自分の身に危機を感じ取り、ついに反乱を起こしました。

玄宗は楊貴妃や家臣を連れて都である長安を離れました。しかし安禄山の反乱が楊国忠を打つためと知った兵士達は楊一族を皆殺しにしました。逃げていた玄宗の楊貴妃の元にも兵士達は押し寄せ楊貴妃は処刑されました。

玄宗は心に大きな傷を受け、皇帝の位を捨てました。このあと、皇太子であつた李享が即位をし、第七皇帝肅宗となりました

.....

「なんだか、呆気ないわね」

美穂はたつた今読み終えた中国の歴史が書かれている本を見た。今いる場所は図書室、元々人気がないので今いるのは私ともう一人だ。私は部活が無いと時々図書室に訪れて歴史の本を読んでいる。ちなみに美穂は日本国民なのに中国の歴史のほうが興味がある。

それにして、と溜息をついて本をじっと見る。あんなに政治に熱心だったのに一人の女で人はここまで変わるのだろうか、と思わず思う。

最初は皇帝を動かし一族に力をつけ、楊貴妃に取り入った安禄山が反乱を起こす……。なんとも漫画のようだ。これが事実化は本なのでよく分からぬが事実だとしたら楊貴妃は凄い人だったのだろう。ふと、休み時間の副会長を思い出した。副会長も前も仕事をしつかりこなしていたはずだ。椿が来てからガラリと変わったとか。やっぱり男は女には弱いのだろうか。だとしたら大和も……いや、今考えるのはやめておこう。

「坂田さん」

「ん？」

誰かに呼ばれたが周りに誰もいないので辺りを見回していると一人の勉強中の女子が顔をあげた。大和のクラスの山岡さんだつた。テスト前に時々一緒に勉強をしたりしている。ちなみに数少ない敬称をつけて呼んでいる一人でもある。

「山岡さん、何？」

「大和くんのこと、好き？」

身体が固まった。なんとも直球な質問だ。しばらく考えてみる。
…結局あまりいい答えは見つからなかつた。

「好き、なのかな…」

「そう、」

それだけで満足したのかまた勉強を再開した。
大和のことが好きか、そんなに考えたことがなかつた。いつも一緒
だったから逆に思いつかなかつた。これはしばらくの間考えてみて
も良いんじゃないかと美穂は思った。

22 パソコン部女子（後書き）

私も中国のほうが好きです。特に水滸伝が良いです。

大和は酷く驚いていた。目を見開き、大きく開かれた口からは掠れた声が漏れていた。誰がどう見ても驚いていた。

大和は下駄箱を開け、中に入っていた生ゴミの姿を認めると、いやいや、そんなものが自分の下駄箱に入っているわけが無いと扉を閉め、しかし漂う異臭は誤魔化しようもなく、また開けると蠅が集つているのを目撃し、いや、まさかこんな古典的な悪戯を自分が受けるわけが無いと扉を閉め、でもあれは現実なのかと扉を開け、また一瞬で閉め、次に開けたときにはあの「ミは跡形もなく消えていはばすだと信じて開け、やっぱりあつたように見えたけれどそれはきっと幻覚なのだと自分に言い聞かせ扉を閉め、

「はよ開けてショック受けろやああああ！」

「おおつ！？」

先程まで物陰でほくそ笑み、大和を見ていた人間がついに痺れを切らしたのか、怒声を飛ばしながら勢いよく飛び出した。

大和は驚き、思わず辛うじて上履きの無事だった一部分をつまみ、声の主に思い切り放り投げてしまつた。

これが故意のものではないと言つたら、果たしてあなたは信じてくれるだろうか。

「うわああああッ！？」

「お前、臭いな……」

「俺様の体臭が臭うみたいに言つんじゃねえよ！　てめえのせいだろつが！…」

顔をゆがめ、鼻を押さえ、容赦無い一言を浴びせる。男は涙目で叫んだ。

男の名は越戸 義樹。奥と二人でセットで夫婦の、越戸だ。

越戸がどうしてこんなところにいるのかと言うと、勿論、大和への嫌がらせの為である。元々、こいつは気に食わなかつたけど、今はボコボコにしてやりたい。越戸は大和を睨み付けながら、そんなことを思った。

越戸が大和のことを初めて知った切つ掛けは、年に三回新聞部により発表される校内ランキングだった。

それは、子供らしい、なんてことのないことに順位をつけたものばかりだった。例えば、一番優しい人ランкиングとか、一番恰好良い、美人な人ランキングとか。

いつも同じランキングというわけではなく、いつも「ランキングをつけてほしい」という要望の中からランダムに三つを選んでいるのである。マンネリ化を防ぐためだとか。

あるとき新聞で発表されたランキングは次の三つのものだった。

一番人気者な人ランキング。一番料理が上手な人ランキング（男子篇）。一番笑顔が素敵な人ランキング。

越戸は、幼少の頃から何をやらせてもとても良い成績を残す、所謂神童であった。ルックスや家柄にも恵まれており、少々性格の歪みは否めないが、完璧というものに近い人間だ。

だから、今回のランキングにも自信はあった。いつもランキングで一位に輝くのは自分。勉強面ではたまに奥に抜かれることもある

が、今回はそんな無粋なものは関係のないランキングだ。

だから、余計にショックだった。

そのランキングたちの一一位に輝いていたのは、全て同じ人間。大和だつたのだ。

何故、こんな奴に負けたのか。しかし、全く名前を聞かないと言つたら嘘になる。周りの女たちの間でもよく話題になつていた。

と、まあ、そんなこんなで越戸は大和に敵対心を抱くようになつたのだ。つまるところ逆恨みというやつである。

「お前、奥さんは良いのか？」

「俺様たちを夫婦みてえに言つんじゃねえ！」

下駄箱の生ゴミのことなど無かつたかのように大和は言った。
何故虚めに等しいことをされて、此処まで暢氣でいられるのか。
それは、大和がこれは虚めだということに気が付いていないからである。さすがにこのゴミを仕掛けたのが越戸だということは理解しているが。

それにしても、この生ゴミの設置は越戸の手で行ったのだろうか。
周りには取り巻きがたくさんいるだろうに、わざわざ自分の手を汚すなんて、いじらしい奴である。

越戸は激昂して怒鳴りつけた。怒りで顔が真っ赤で、まるで酔つ払いのようだ。大和はかなり見当違いのことを思つていた。

「チツ……、まあ良い。てめえ、ちょっと俺様に付き合えよ」

大和はその言葉にハツとした。いつぞやクラスメイトたちから
言われた言葉を思い出したからだ。

大和は顔を蒼褪めさせた。その反応に越戸は満足そうに笑む。
う、そういう自分に心底怯えきつた顔が見たかった。

「わ、悪い。俺、そういう趣味ないんだ」

良いから来いと越戸は大和の腕を掴み、引っ張つた。すると、弱々しい、か細い声が。

「越川くん……？」広崎くんも……。何をしているの？」「

声の正体は菖蒲だった。助かつたと言わんばかりに顔を輝かせる大和。そして顔を歪めた越戸。何がなんだかよくわからない状況だが、とりあえず菖蒲は逃げ出したかつた。

「邪魔な奴が来やがつたな……」

ボソリと越戸は呟いた。いくら小さい声とはいえ、周りには人も

おらず、不気味なほどに静まり返っている。菖蒲の耳はその冷たい音をしつかりと拾い取ってしまった。あんまりな物言いに、元々気が小さい菖蒲は思わず萎縮する。

大和は厳しく責めるよつた瞳で越戸をねめつけた。たまたま通りかかつただけの奴に、酷い言い草じゃないか、と。

「まあ良い」

そんな大和の視線に気が付いていたろつこ、越戸はそれを受け流した。

小さく笑い、初めて本当の“恋”というもの教えてくれた女性を思い浮かべる。あいつの為なら、なんだつて出来る。

「広崎、覚えてやがれ。俺様は絶対にめえをこの学校から追い出してやる」

その言葉に、当事者ではない菖蒲が蒼褪めた。

大和は相変わらず何がなんだかわかつていなかつたが、取り敢えず、と思つた。

「職員室に、スリッパを借りに行こ」

まさか靴下のまま生活するわけにも行かない。大和は何故か持っていたゴム手袋を装着し、中に入つていた生ゴミを全て越戸の下駄

箱に詰め直してから職員室に向かつた。

外履きを履いたまま職員室のドアをノックした大和が二階堂にこつ酷く叱られるのは、また別のお話。そして、いつの間にか下駄箱に詰められていた生ゴミを見て、越戸が咽び泣くのも、また別のお話。

23 調理部男子（後書き）

大和は天然で酷い子だと良い。

24 パソコン部女子（前書き）

今回は友人の回ですが、少しだけ前書きをお借りして、片岡です。私のアホスな間違いでサブタイが“調理”部女子になつてました。すみません。

もしかしたら他にもノリでなんか全然違うこと書いてたりするかもしませんので、お気づきになられましたら是非ご一報を。

朝、美穂は本を読んでいた。今日はノルマが全くと言つていい程無かつたのであつという間に終わつたのでだ。ちなみに今読んでいる本は三国志だ。

朝のホームルームまであと10分くらいにある。大体の生徒は来ているのだがその中の男子がほぼ全員いない。この時間になると椿が登校してくる。それを一目見ようと男子は早く登校して校門は人でごつた返すのだ。

「本当、何やつてんだか……」

もう文化祭が間近に迫つてゐるといふのにそんなもの最初から無かつたかのような雰囲気だ。そういうえば今年のクラスの出し物は何になつたんだろう。実行委員は誰だつたけ、と考える。

…思い出して頭が痛くなつた。そうだ、椿だ。確か椿が女子の実行委員だ。そのあとで男子の実行委員が誰だかもめたんだった。結局誰が実行委員になつたかは知らない。

今年の文化祭はいろんな意味で悪いことが多すぎる。文化祭と言えば部外者の大人達や中学生も來たりする。せいぜいグダグダ感が無いような文化祭にしなければならない、と思つた。

遠くからガヤガヤと騒がしい音が近付いてきた。なんでああいう輩はこうも朝から騒げるのだろうか、美穂はいつもそれが不思議で堪らない。

「みんな、おはよつづー！」

椿がいつもと変わらない笑顔を振り撒いて挨拶をした。クラスには女子しかいないのでほとんどが無視を決め込んだ。美穂はとりあえず「おはよう」と軽くようじに言った。

椿はこちらを向いてにこりと笑った。いつも笑顔で疲れないのかと思わず椿に聞きそうになつてそれを飲み込んだ。

「おはよう、坂田さん。何を読んでるの？」

一瞬心臓が止まつた。なんでこっちに興味を持ったのか分からなかつた。こんなことになるなら返事なんてしなけりや良かつたと美穂は後悔した。

「三国志だよ。椿さんも読んでみる？」

向こうが張り付いている笑顔ならこっちだつて、と美穂は変な対抗心を持つて思いつ切りの営業スマイルを顔に張り付けた。椿はちょっと怯んでいた様だつたがまたすぐに笑顔に戻つた。
ちよつとした意地の張り合いだつた。

「ふうん、面白うね。今度わたしも借りようかなあ」

明らかに目が言葉と裏腹に輝いていない。誰がどう見てもお世辞だと分かつたが田が墨つている男子はお世辞だとそれなかつた。だが、もう一人真意が上手く受け取れない人がいた。

「つ、そうだよねー面白いと思うよねー」

「え...?」

美穂と椿は瞬きをした。声の発信源は一人の女性だった。

「音波先生、どうしてここに」

音波先生は理科担当の先生。しかもどこのクラスも担当していないのになんでここにいるのか。

「三国志と言えばやつぱり劉備と張飛と関羽なんだけどやつぱり私はいろんな武将と兵を華麗にまとめあげた孔明が凄いと思うんだよね何が凄いかって言つたら戦地を把握してその場に合つた戦い方をするし敵が何処に逃げるから此処に誰を配置すれば良いとか本当に未来を知つてんじゃないのかつてくらいなんだよねそれで劉備と孔明の出会いがまた良いんだよね劉備が……」

「先、生？」

椿が引いている。思いつきり引いている。この知識量、どんだけ好きなんですか音波先生。というかこれだけの知識あるなら歴史の担当になれば良かつたのに。

結果的に音波先生は朝のホームルームが始まるまで三国志を熱く語ってくれました。

24 パソコン部女子（後書き）

歴史について間違えていることがあつたら指摘お願いします。

登校すれば周りに男子達が集まつて来る。それはいつもと変わらないことでいつもの風景。しかし小百合は今日はあまり興味を持たなかつた。男子に適当に愛想笑いをしてやり、早足で学校に向かう。学校に着けば今度は校門で男子が小百合を待つてゐる。小百合はこれにも興味を持たず、また、適当に返して校舎に入つて行つた。いつもならあの場所でもつと時間を使い触れ合つてゐるのだが、いや、正確には弄んでゐるのだが、小百合には今日は何よりも先に確認したいことがあつた。

男子は従えず、なるべく会わないよう、会つてもついて来ないよう気をつけながら2・3に向かつた。仲の様子を見てみれば大和は既に登校していた。ただいつもとそれ程変わつたことはない。

(義樹は、何をしているの……？！)

義樹は行動力がある。始まるしたら今日、それも朝だと思つていたのだが、大和には精神的ダメージを受けたように見えない。小百合は昨日の出来事を思い出して苦い顔をした。

しかし、義樹が何も行動をしていないと言うのは少しどころかかなりおかしい。小百合がもう一度大和を観察すると、上履きではなくスリッパを履いていることに気づいた。どうやら義樹は行動を起こしていたようだ。だが、やはり大和にはダメージはなさそうだ。

(大和くん……、やっぱり、一筋縄じゃいかない)

小百合は改めてそう思い、誰かに加勢してもうおつかと考えた。とりあえず自分で手を汚すこととは、ない。小百合は2・3から離れ、自分の教室へ向かった。

途中で自分を探し回っていた男子を従えてから教室に入つて行つた。

「みんな、おはようっ！」

そう挨拶をしても返事を返す人はいない。でも平氣。別にわたしだつてあなた達の返事なんて求めていない、いらない。だが、この日は少し違つていた。

「おはよう」

小さかつたが確かに返事が聞こえた。わたしに返事をしたのは誰だろうか、とその声の主を探して、ガツカリした。

坂田だつた。なんでおまえが返事をしたんだ。別におまえなんか知らないぞ、とそこまで思つてから小百合は閃いた。

そうだ、大和くんを壊すならまず周りから攻めれば良いんじゃない。将を射んとすれば馬を射よと言つではないか。まず周り、それも大和と特に親しい人達から崩す。そうすれば大和だつて自然に落ちる。小百合は今までに無いような深い笑みを浮かべて、坂田に近付いた。ありがとう、坂田さん。あなたのおかげで良いこと思いついちゃつた。心の中で呴いて。

「おはよう、坂田さん。何を読んでいるの？」

その発言から自分の朝の時間が奪われるのを知らず、……。

椿 小百合視点 8（後書き）

つい先日まで風邪を引いてました。皆さんも風邪には気をつけください。

大和は布団からむくりと身体を起こし、寝起きとは思えない機敏な動きでカーテンを開け放つた。視界に広がる青い空……ではなく、曇り空。しかし、昼頃から晴れてくるはずだから、何も問題はない。

今日は待ちに待った文化祭。多少の不安は残っているが、それは文化祭という一大行事の前では寧ろスペースになる。頑張るぞ、と大和はぐっと拳を握つた。

「ちょっと！ もう景品のお菓子ないんだけど！ 買つておいてって言ったでしょ！？」
「つうるせえな！ そんなに言つなら自分で買つておけば良かつたじゃねえか！」

あちこちから似たような罵声や怒声が聞こえてくる。大和は穴から血に塗れたように見える真っ赤な手を引っこ抜き、隣にいた宮城を見た。宮城も目を瞬かせて釣竿で吊るしていた蒟蒻を引く。二人で何事かと顔を見合わせていると、山岡が。

「いひ、さぼらない」

「あ、山岡さん、」めん

軽く大和と宮城の背を叩く。大和は素直に謝った。すると、山岡は其処まで本氣で怒つてもいなかつたらしい。にこりとして頷いた。宮城も軽く謝罪を入れてから訊ねた。

「山岡さん、なんか周り騒がしいけどさあ、なんかあつたの？」
「うん……、なんだか色んなクラスで揉め事が起きてるみたい」

山岡は眉を下げた。せつかくの文化祭なのにね、と沈んだ声。その悲しそうな顔になんだか大和まで悲しくなつてきてしまった。宮城は顔をしかめ、声を顰めた。

「原因つてさあ……」

「話を聞く限りだと、男子たちがちゃんと自分の仕事をこなしていく
れないみたい」

「やっぱ、椿かあ……」

ふう……、と二人でため息を吐く。大和は不思議そうに目を真ん丸くして一人を見た。そして、注意されたのに自分がちゃんと仕事に戻つていないと気付き、穴の中にまた腕を突っ込んだ。

「ま、ポジティブに考えようぜ。これで今年の優勝はうちのクラス

「……………」

「……………」

山岡は苦笑した。

大和のクラスは、お化け屋敷である。段ボールの壁の向こう側から悲鳴が聞こえた。先程から通り過ぎる足音の多さからして、中々盛況しているようだ。

富城も大和の行動に気付き、蒟蒻をまた揺らす。べчин、と渴いた音がした。どうやら蒟蒻は誰にも当たらず、教室の壁にぶつかつたらしい。大和たちが配置されているのは教室の出入口に一番近い教室脇だ。

唐突に大和が口を開いた。

「……………なんで、椿のせいなんだ？」

「……………なんでって……あれ、蒟蒻がねえ」

大和の言葉に富城は怪訝そうな顔をした。手繻り寄せた糸には蒟蒻は無かった。落ちたか、と少しだけ困った顔をした富城が隙間を覗き込んだ瞬間、鈍い音が。

「蒟蒻で転んでるわ。大丈夫かな、あの人」

「なあ、なんでだ？」

「は？ 何が……、ああ」

思わぬハプニングに先程までの話題など吹っ飛んでいた宮城は、大和の唐突な言葉に困惑の表情を見せた。すぐに思い当たったようだが。山岡は客が転んでしまったのを察知すると早足で客のもとへ向かつていつてしまつた。

「……だつて、そうだろ。俺とかは違つけど、今、ほとんどの奴が椿に夢中だろ？ そのせいで、」

「だから、それが可笑しい」

言葉を遮り、何処か冷たい響きを持った大和の言葉に、宮城は少し怯んだが、すぐにムッとした顔をした。宮城は、男子の中では珍しい小百合を嫌つている人間だ。親友とも呼べるほどに親しい大和が小百合を庇うようなことを言つたのが気に食わなかつたのだろう。

「なんで、……何がだよ」

「仮に、そうなのだとして、仕事をしない奴が椿のことが気にかかる集中出来ないのだとして、」

大和は一旦言葉を切り、びしつと宮城を指差した。眼前にいきなり突き出された人差し指に驚いて、思わず宮城は仰け反つた。

「やつぱりそれはそいつらが悪い！」

「だからなんでだつて！」

「だつて、椿は何もしてないじゃないか」

椿は其処にいるだけで、特に仕事をサボれだなんてそんな命令はしてないだろう。なら、勝手に椿に夢中になって、勝手に仕事をサボるあいつらが悪い。そう、大和は言つのだ。自分の言葉が間違っているはずがないと、確固たる自信を持つて。

やつと大和の言葉を理解した富城は、思わず呆れ顔になった。

ああ、つまり、そういう。

この男はどうあっても自分の友人を“悪”にしたくないのだ。そして、その言葉が馬鹿馬鹿しいと笑い飛ばせるような根拠のないものではないから、何も言えなくなる。

「それなのに椿が悪いと言つのは、それは椿に死ねと言つているようなものだ」

別に其処までは思つていない、と言おうとして、富城は口を閉ざした。今、自分が何を言つたって、何処か言い訳がましい。代わりに富城は大和への褒め言葉を口にした。

「……お前の美点はわ、其処だよな」

「うん？ ありがとうな」

「そんでもつてお前の短所も其処だよな」

「ええつ！？」

ショックを受けたような顔をした大和に、思わず富城は苦く笑つた。面白いような、つまらないような、嬉しいような、悲しいような。

そんな複雑な心が宮城の胸中についた。

「友達思い……、お前のは度が過ぎてるような気がするけどさあ。そういうの、程々にしどけよな。絶対いつか、面倒なことになるから」

面倒なこと。大和の脳裏に一瞬、“あのとき”的小百合が過った。宮城は笑いながら釣竿を床に置いた。早く蒟蒻を持つてこなければ、無ければ代用品として蒟蒻ゼリーを連ねて使おう。宮城は背を向けた。その瞬間、背後で大和の小さな声が。

「…………もつ、面倒なことになつてるかも…………」
「…………はあつ？ ちょ、お前、今なんて言つた！？」

聞き逃してしまいそうなほど、小さな小さな声。宮城の聞き間違いで無ければ、今、とても不吉な一言が聞こえた、
大和は誤魔化すように淡く笑うと宮城の横を通り過ぎた。

「お、おいつ！」
「部活の手伝いに、行つてくるな」

強引に突き放された宮城は、その言葉に頷くしか無かつたのである。

「」「」「」「」
「」「」「」「」

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

今日は待ちに待つた、いや別に待つてはいないうが文化祭だ。寧ろ今年はちょっとと来てほしくなかつた。今年は大和の部活、調理部と私の部活のパソコン部の合同だ。しかも大嫌いな分野の料理がメインの出し物だ。部活の方には行かないでクラスだけ手伝おうかと思つていたのだが……。

「なんで、よりによってカフHなのよ…」

まあカフェと言つてもただ単に買つておいたお菓子と飲み物とかを出すだけだ。美穂にとって一番問題なのは美穂が今着ている服だ。

「誰が作ったのよ、この服」

白い長袖に薄茶のベスト、下は薄茶のミニスカート、同じく薄茶と白のエプロンを腰に巻き付けている。どこかの喫茶店に本当に居そうな雰囲気を持っている服だ。結構凝っている服だ。おまけに校則で城のハイソックスを履かなければならないので尚更この服がピッタリと合ってしまっている。

「椿を除いた女子だよ。坂田さんは最近忙しくて参加してなかつた
もんねー」

「せめて、言ひてよ」

「だつて放課後はすぐに教室出でこつちやうじやん」

だそりだ。

いや、放課後じゃなくとも話されるだろ?と迷つて言ひてみたのだが、

「時間がなくてねー」

らしい。結構暇つに友達と喋っていた気がするのだが氣のせいだらうつか。

とにかく私の知らないところでクラスの出し物はちゃんと進んでいたようだ。だが残念なことに実行委員は活動していなかつたようだ。結局この服もこの出し物も女子の企画らしい。ちなみに椿は男子を引き連れてどこかに出かけて行つた。おかげで女子のみで此処を取り仕切つている。

料理が出来ない私でも飲み物やお菓子を出すことは出来る。服さえ気にしなければ此処に居ても平氣だ。とにかく料理と服、どっちが面倒かと比べてみたら料理だつたので大和には悪いがクラスの方に暫く居をせてもらつことにした。

力チカチ、あるいは黒焦げのクッキーを客に出すわけにはいかないと勝手に美穂の中で正論化した。昨日試しに予行練習をしたら消し炭の様な黒い物体がオープンから出てきたのだ。本に沿つてやってみたのだがまた何かを間違えてしまつたようだ。

「坂田さん、お茶を一つお願ひします」

「はーい」

とつあえず営業スマイルを顔に張り付け一ヶコリ。きっと他の人から見れば多少引き攣つて見えるだらうがこれくらいは仕方ないと思つてほしい。

美穂は銀色をした丸いお盆の上に烏龍茶の入った紙コップを一つのせると注文を受けた机に運ぶ。

「お待たせいたしましたー、烏龍茶一いつです」

「ん、ありがと」

用を済ませるとわざと戻つていぐ。美穂はまた定位置にスタンバイする。

「ねえ、一緒に学校見て回らない？」

「え、あ、お客様。そういうのはちよつと……」

「いーじゃんよ、ちよつとだけ、な?」

人気のスタッフ（生徒）は男子に口説かれたりしている。椿に首つたけの男子もいるが他にも、というプレイボーイもいるらしい。だが見えていて鬱陶しい。やるなら学校の外でやってもらいたい。このカフェでは多分もう声をかけられていない女子はない。美穂もさつき誘われたが笑顔で断つた。

「坂田さん、私、休憩行つてきまーす」

「ん、行つてらつしゃー」

時々すつと此処にいるのもあれなので、人不足にならない程度に交代をしてくる。所謂羽休めというのだ。本当は男子にもウェイターとして手伝つてもらいたいところだがどこにいるかが分からない。一応男子の服もあるようなので見つけ次第強制的に連れて来る、と言つのが羽休めしている女子の使命でもある。結果的に羽休めになつていな氣がするがこれも仕方ない。

「本多確保ー」

「放さんか！何故連れて来るー！」

服装を見る限り、こいつは部活の方に居たようだ。その心意気ならクラスの出し物も苦じやないだろう。

「坂田さん、バス」

「え、私なの」

「お願ひねー」

なんと面倒事を押し付けられてしまったようだ。仕方なく一緒に放り投げられたウェイターの服を片手に、本多を片手に近くの男子トイレに向かう。さすがに入ることは出来ないので本多に服を渡し着替えて来るよう指示。最初は抵抗していたが渋々中に入つて行った。私は入口で逃げないように見張る。

「……何故、俺がこのようなものを……。……これで満足か」

扉を開けて本多が出て来た。ユニホームも様になつてゐるがこの服も結構似合つてゐると思った。女子と同じ様に白の長袖、薄茶のベスト。黒いネクタイ、黒の前掛け、白い長ズボン。こいつ、スタイル良いんだなつて思つた。

「ほらウホイター君、手伝つてよ」

「何故手伝わねばならん！－俺は部活の出し物へ……」

「ダメよ。クラスやらないで部活なんて有り得ない」

今度は服を汚さないよう心氣をつけながら本多を引き摺つて教室に戻る。

「じゃ、私は部活の方手伝つてくれ」

「行つてらつしゃーー」

「待て！何故坂田は部活に行くのだ！」

「ひつち（クラス）で仕事をしたからよ、あんたも頑張りなさい」

走り寄つてくる本多の目の前でピシャリとドアを閉める。ブレーキが効かなかつたようでガスリと向こう側で鈍い音がした。しばらくはこのまま頑張つてもいいものだ。美穂はそのまま教室から離れ階段を下りはじめる。

「あ、着替えてない」

「うやらあんなに嫌がつていたのにいつの間にか慣れてしまつてい

たらしい。しかし着替えは教室に置いて来てしまつてゐる。

「これで行くしかないのかー……」

部長に会つたらからかわれそうだ、と若干の不安を感じ溜息をつきながら美穂は校門に向かつて歩いて行つた。

26 パソコン部女子（後書き）

最近勉強が面倒です。漢字なら得意なんだけどなー。

どうでもいいけど誰もお前の近況に興味なんて持つてないと想つ。
後書きに書くことがないなら無理に書かなくてても。

調理部とパソコン部の出し物がある校門に行くと、既に何人かの部員たちが集まっていた。

校門前ということもあり、大和たちの出し物は目立つていてるらしい。立ち止まり、クツキーの袋を手にしていく客の姿がちらほらと見えた。勝手に場所を決められてしまったものだから、多少の憤りを感じていたが、この場所は正解だったのかもしれない。大和は僅かに頬を緩めた。

大和はゆったりとした歩調を少し早めた。

すると、松島がパッと顔を上げ、大和を見た。ばつちりと目が合つてしまい、何もしていらないのになんだか気まずい。松島はすぐに視線を外し、青山に何事かを言った。青山も大和を見る。

「あ、先輩っ！ 遅いじゃないッスか。俺らも始めてますよ
「ん、ごめん。結構人気みたいだな」

大和がそう言うと、青山と松島は顔を見合わせ、照れたようににひ、と笑つた。仲の良い奴らだと微笑ましく思つてはいるが、二階堂の姿がないのに気付く。少し離れているのだろうか。辺りを見渡しても見当たらない。単に多すぎる客の姿に埋もれてしまつて見落としているだけなのかもしれないが。

大和の様子に気が付いた松島が口を開いた。

「一階堂先生ですかー？ それともパソコン部？」

探しているのは、と言外に含めて松島は大和を見上げた。大きく
くりくりな瞳は小動物を思わせる。

「先生」

「一階堂先生なら調理室にクッキー取りにいきましたよー」

「予想外の売れ行きにクッキーが足りなくなっちゃって、後でみんなで食べようつて残しておいたぶんも売るらしいッス」

食べたかったのに、と青山がシュンと俯いた。そんなにクッキーが食べたかったのか。今度、作ってきてやろう。大和が密かにそんな決意を固めていると、パソコン部の滝下がやってきた。自棄にきよきよとしているが、夏輝を探しているのだろうか。

「おーい、こっちだ。パソコン部の奴だよな？」

「……どうも」

酷く無愛想な奴である。美穂から聞いていた印象とは正反対。大和は驚いた。美穂の話では夏輝が大好きな騒がしい人間だということがだったが、夏輝以外には無愛想なのだろうか。

「部長はいらっしゃらないんですか。……はあ……」

「うん、いない」

滝下の問いに即答すると、滝下はがっくりと肩を落とした。最初からわかつていただろうが、それでもショックなようだ。あんな調理器具の何処が良いのか。大和には全く理解出来なかつた。そして、どうでも良かつた。一階堂はまだだらうか。

「あ、来たー」

不意に視線を校舎のほうに遣つた、松島の気の抜けた声。滝下は俯かせていた顔を勢いよく上げた。大和は人懐っこい笑顔で客にクツキーを手渡してから松島を見た。大和からクツキーを手渡された女子中学生（と思われる）は可愛らしく頬を染め、きやあと小さく黄色い悲鳴を漏らしながら友人のもとへと駆けていった。

「先生？」

「部長！？」

「副部長ー」

各々の期待していた人物ではなく、其処には喫茶店の店員のような服装の美穂が立つていた。美穂の姿を認めるに、大和はきょとんとし、滝下はあからさまに隠しもせずため息を吐いた。

「なんだ、美穂か」

「なんだ、副部長か……」

来て早々あんまりな態度に美穂の眉がぴくりと上がった。大和はそれに気付かず、美穂の見慣れぬ服装に不思議そうにしていた。

「……美穂、なんだ？ その恰好」

「つかのクラス、カフェで、着替えてくるの忘れちゃって……、」

申し訳なさそうにそう言いながら、美穂の瞳は何処か期待を孕んでいる。大和はにっこりと笑つて言つた。

「似合つてるなあ、可愛いぞ」

「……ありがと」

美穂は頬を染め、はにかんだ。その後ろでは青山と松島と滝下が三人でひそひそと何事かを話し合つている。後輩たちは意外と気が合つのかもしれない。

「さつすが部長。天然タラシー」

「さつすが部長。鬼女と名高い坂田先輩を手懐けてる

「副部長なんか気持ち悪い」

「聞こえてるんだけど」

我慢の限界が来ていた美穂。今度こそ、美穂の強烈な蹴りが炸裂した。しかし、青山と松島はそれを華麗な動きでサッと避け、滝下にだけクリーンヒットした。

大和はそれを気に留めず、顎に手をやり、考え込んでいた。松島が訝しげに大和を覗き込む。瞬間、大和は松島の顎をがつしりと掴んで自分のほうに真っ直ぐに向けた。

「うへあつー？」

松島の奇怪な悲鳴に周りにいた人たちの視線が集まつた。美穂たち三人は啞然としていたが、周りの客たちは何処か色めき立つていた。

自分と大和が“そういう”ものなのだと勘違いされていることを一瞬で悟った松島は胃を驚撃された気分だった。

部長のことは料理上手だし、とても尊敬している。でも、こういう誰にも先を予測出来ないような突飛な行動は慎んでほしい。松島は切実に思つた。

「あの衣装良いなあ」

独り言のように呟かれ、次いで目が合つ。松島はちょっとびり嫌な予感がした。まさか、と確信にも近い疑念を持つた。

「お前も着たら可愛いと思うぞ。ちょっと美穂のクラスから借りてきてくれ。お客様さん、たくさん来てくれるかも」

「……嫌ですよー。それに、あんな衣装に頼らなくたって私は十分可愛いから大丈夫です -」

「うん? そうか。なら良いや」

あつさりと納得し、離れる大和。周りの客たちは戸惑いながらも何処か拍子抜けしたように離れていった。

そうやって、冗談で言つてる“可愛い”をあつさり肯定したりするから、色々な誤解を招くんだ。思い切り掴まれ、少し痛む顎を擦りながら、松島は恨めしげに大和を上田使いに睨んだ。栗鼠のようだ、と大和は思った。

「うわー……、部長デリカシーない……」

「副部長に可愛いって言つておきながらすぐに他の女に、しかも副部長の田の前で言つたよ」

「うわあ、うわあ、と口に手を当て、滝下と二人で話す。滝下も青山と同意見のようで大和の阿呆さ加減にはさすがに呆れ顔だった。まあ、と小さく呟くように青山が言つ。滝下は青山を見た。

「実際、松ちゃんのほうが坂田先輩より可愛いあるんだけど」

「ああ……、言えてる」

「「あつはつはつ……」「フフウー?」」

「「つるつる?」」

怒りで顔を真っ赤にした美穂の制裁が阿呆一人に下された。痛

みに各々の患部を押さえる一人。周りで一部始終を目撃してしまった哀れな人々はドン引きだ。

「……お、なんか増えてら」

人混みを掻き分け、此方へ向かつてくる男。男は大和たちを見ると僅かに目を大きくして、ボソリと呟いた。

「あ、先生！」

「へーへー、先生ですよつと」

一階堂に気付き、駆け寄る大和。一階堂は大和にクツキーを手渡し、今いる人間の確認をはじめた。大和はクツキーの袋たちを台上に置いた。

煙草の臭いはしない。さすがのこの男も、人様に食わせるものを持つたまま煙草を吸うという暴挙には出なかつたようだ。

「調理部は全員揃つてるが……、パソコン部、少ねえな」

「すいません……」

「まあ、別に来ても来なくても俺一人いれば良いんだけどよ」

わざわざクツキーを売り捌くためにそう人数を割く必要もない、と一階堂は面倒臭そうに呟いた。単にたくさんの生徒たちの面倒を見るのが嫌だつたのだと思われる。

パソコン部である一人は気付いていないが、調理部の部員たちは気付いた。況してや大和は一階堂とは二年もの付き合いだ。一階堂の性格を把握していないわけがない。

相変わらずの面倒臭がり。どうして教師を志したのか。この男にはホストなどの水商売のほうがよっぽど向いているような気がする。大和はそんな考えを心の奥深くに押し込め、クッキーの袋を一つ手に取った。

平和。

28 パソコン部女子（前書き）

片岡です。1日1話更新と書いておきながら、1日間を開けてしま
いました。
本当に申し訳御座いません。
友人くたばれ（・言・）

なんだかんだ言つてクッキーはかなり売れ行きが良かつた。やはり私は作らなくて良かつたと美穂は内心安堵した。

しかし残念なことにあるあと出し物のブースに来ててくれたのは部長と杯田さんだけだった。部長が来たことで一人地面に伏したのは言うまでもない。というか部員多いのに来る奴少なすぎるだろ！絶対何処かでサボつているに違いない。美穂は後で何かしら手を打とうと考えた。

とにかく今日の文化祭で改めて分かつたことは当たり前だが調理部は料理が上手いという事とパソコン部員はサボるのが好きだという事と私は後輩に嫌われているということだった。

美穂の服に関しては五分五分だった。大和は褒めてくれて嬉しかったが部長には大笑いされた。軽く下しておいた。

最初にも言ったがクッキーは本当に大人気だった。結果、時間をまあまあ残す3時頃に見事完売した。今年の部活の出し物の中では優秀な成績を修めたのではないだろうか。ブースを片付けるのに時間がかかり解散となつたのはその30分程後のことだった。

美穂は特にすることも無かつたため寄り道もせずに真っ直ぐ教室に帰つてしまつた。

ガラリと扉を開けてまず目に入つたのは本多だつた。

「すいませーん、オレンジーつ下せーい」

「待たせたな！」

「わ、早っ」

なんとも綺麗な、それでいて全く無駄の無い動きでお客の要望に応えていく本多。もつと大変な事になつていると思つていたが意外とそうでも無いようだ。今はこのカフュの看板息子と言えるくらいの働きぶりではないだらうか。

「お疲れ、本多」

「むつ、坂田！遅いではないか！」

「ん、悪いわね。部活はもう終わつたから大丈夫よ」

「そりが、良かつたな！」

本多は自分の部活じゃないのに嬉しそうに頷いている。良いといふがあるじゃないか。しかし部活という言葉を出しても自分は戻らない所を見るとき處に居て手伝うのは満更でもないようだ。

「本多君、こひちに烏龍茶と紅茶お願いー」

「うむー任せとけー」

「坂田さん、こひちばバーラアイス二つねー」

「ん、了解」

本多は慣れた手つきで烏龍茶と紅茶を注いでさつさと運んで行った。美穂もアイスを運ぼうと誰かが持つて来た小型の冷蔵庫を開けて中

を覗いた。

「……無い」

無かつた。お客に出さなければならぬバーラアイスが一つも入つていなかつたのだ。近くのコンビニに買いに行くという手段があるので、近くと言つても10分くらいはかかるだろう。そんなに長い時間お客を待たせるわけにはいかない。美穂が悩んでいると不意に隣に人が現れた。

「どうした坂田！？」

「うひやあ？！」

本多はやはり油断できない。いきなり大声で話し掛けられたので美穂は思わず尻餅をついてしまつた。しかし本多はキヨトンと眺めている。…もしやこいつは天然なのか？

「……どうした？」

「え、…ああ。実はバーラアイスが品切れでね。買いに行くつとう手段もあるんだけどちょっと遠くて……」

それだけ言つと本多は「なんだ、そんなことか」と何でもないかのように鼻で笑つた。…いいつたつぱりちよつとムカつくな。

「何か手があるの？」

「あるー。」

「何よ

「俺が買いに行けば良かろ?」

本多はあつさりとまるで当たり前の事のように言い放った。確かに本多は野球部キャプテンだし足には自信があるだろう。だが短い時間で戻つてこれるだろうか。…しかし何を考えても他に良い方法は見つからなかつた。ここは彼に頼むしか無いのだろう。

「頼んで、いい?」

「任せとけ!」

さつきも聞いたような言葉を残して本多は早々に教室を飛び出して行つた。行動力があつて助かる。美穂はお客様に暫くお待ち下さい、と告げて彼を待つことにした。

5分後

「買つて、来たぞ……」

本多が息を切らせてなだれ込む様に教室に入つて來た。袋を見てみれば結構な量を買つてきたようだ。これならかなりの間持つだろう。

「これで、…大丈夫か

「うん、大丈夫。ありがとう本多」

「そりが、良かつた」

早くも息を整えた本多は何度か深呼吸をしてからお客様に注文を聞きに行つた。美穂はアイスを冷蔵庫に入れてから注文の数を持つてお客様の所に行つた。

「お待たせいたしましたー！バー！ラアイスー！」

二ツ「ココと営業スマイルではなく、美穂の素の笑顔でお客にそりが言つた。

「広崎！ 用がある！」

きりりと凜々しい表情の本多。いつも感じられる何処か向こう見ずな雰囲気は鳴りを潜め、その“用”には何か深刻な内容を思われる。

「俺には無いから」

しかし、お前の用など知つたとか、と大和は笑顔で教室のドアを閉めた。すぐに怒りで顔を真っ赤にした本多の手によつてドアが開かれる、と思いきや、珍しく“それ”はなく、沈黙を守つていた。大和が不審に思つていると、ドアが開く。

「よお！ 少年！」

「まな板娘はお呼びじやない」

大和は無表情でドアを閉めた。夏輝の笑顔が少し引き攣つっていたように見えたのはきっと氣のせいだろう。

先程から開閉を繰り返すドアの音に何事だ、と宮城が顔を出す。

なんでもない、と首を振り、宮城に配置に戻るよつばがる。

文化祭も後僅か。やつと此処に戻つてこれで、さあ、あと少し、頑張りうつとこつと来た、どうして奴らは現れるのか。

そんなとき、そつと開かれるドア。またか、とうふぞりしていると、見えた顔に大和は目を大きくした。

「あの……、広崎くん」

其処にいたのは、菖蒲だった。おずおずと遠慮がちに此方を覗き込む菖蒲に大和は優しく訊ねた。

「あれ、会長。どうした？ 何か用事か？ 中に入つていいぞ」

「その対応の差はなんだ！」

戸惑いを見せる菖蒲を快く迎え入れると、それと一緒に飛び込んでくる不要物。大和は拗ねたように唇を尖らせ、一人をねめつけた。

「自分の胸に手を当てる、よおく考えてみたらわかるんじゃないかな？」

飽くまで熱くならないよう、穏やかに、しかし辛辣な言葉を吐き捨てた。すると、夏輝はによによと氣味の悪い意地悪な笑みを浮かべ、揶揄するよつな声色で言った。

「わー、少年、セクハラー」

大和がその言葉に何事かを返そつとすると、本多が咎めるような目で夏輝を見た。「な……なんだよっ」と、夏輝も怯んでいる。おや、と思つてはいるが、本多が一言

「やめんか、夏輝！ 広崎とて人を選ぶ権利はある！」
「てめえええええ！ 選手生命に一瞬でピリオドを打つてやろうか！」

本多の胸倉を掴み、顔を近付ける夏輝。本多はそんな夏輝に対抗してアイアンクローラーを仕掛けながら、夏輝を睨みつけた。魚介類の求愛行動。またはなんらかの儀式なのだろうか。大和はそんなことを思つた。

「会長。まな板とハゲは放つておいて、用事はなんだ？」
「えつ……。あ、あの……、え？」
「誰がまな板だあ！！」
「誰がハゲか！ 全く……、」

菖蒲の背を押し、奥へ追いやろうとする大和の咳きを耳聴く拾い上げ、怒鳴り散らす一人。
しかし、すぐに落ち着いた。

いつもだったら、怒つていつまでもさやあさやあと喫くはずの一人は、じつと大和を見つめ返している。

その様子に、大和はやつと三人の用事が戯れのよつなことではないことに気付き、口を引き結んだのだった。

忙しくて疲れているだろうから、と優しいクラスメイトたちに見送られ、大和は今、生徒会室に来ていた。

生徒会室についた途端、夏輝と本多は我が物顔で椅子にどっかりと座った。夏輝に至っては茶と菓子まで要求している。

何処までもこの阿呆共は自分本意でしか動けないのだということを大和は再確認した。

「……それで、いったいなんの用なんだ？」

ついでに、と菖蒲が淹れてくれた茶を啜りながら、大和は訊ねた。夏輝は菓子を食り、上体を机に倒しながらちらりと大和を見た。そして、その目は気まずげに逸らされる。なんなんだ、と大和が眉を顰めると、本多が言い淀んだ。はつきりとしない口調の本多は見慣れぬせいか、酷く気持ちが悪い。

「お前は、嫌がらせをされているのか」

静かな言葉に、大和は一つため息を吐き、虚空を見つめた。答えは返さず。一人には目もくれず、夏輝は煎餅に手を伸ばす。本多はまた訊ねた。先程よりも語調を強め、ぱつり。

「嫌がらせを、受けているのだな」

訊ねる、というより、それは確認であつた。本多たちの中でそれはすでに揺るがぬ“答え”として其処にあるのだ。

用事はこれが、と大和は少しだけ面倒臭そうな顔をした。
本多は大和の表情の変化に気付かず、続けた。

「……菖蒲から、聞いた。お前が越戸に絡まれていた、と
「ただの、悪ふざけみたいなものだつたら、良かつたんだけど……」

本多の重々しい咳き。菖蒲は泣きそうに顔を歪め、下を向いた。
重苦しい空氣。夏輝はまた菓子を手に取つた。そして、口に入れる。
まるで、静寂が訪れるのを恐れるように、夏輝はぱりぱりと煎餅を噛み砕き続けた。

「もつ……、戻らないのかな……」

吐息混じりの声はゆっくりと空氣に融けた。

“戻らない”とは、いつたい何を指すのか。突如、変貌してしまつた生徒会の仲間たちか。それとも、不穏な空気が常に漂う学校か。

両者、 だらうか。

「……仮に、」

大和が切りだした。夏輝がぴたりと動きを止める。真っ直ぐに、大和を見た。食べかすがついたままの顔でそのように見られても、ただ滑稽なだけだ。なのに、笑えなかつたのは何故だろう。

「仮に俺が嫌がらせを受けているのだとして、
「、ちよっと……」

僅かに目を見開いた夏輝が怒りのよくな表情を見せた。伊達眼鏡の向こうにある瞳に、炎が揺らめいたような気がした。菖蒲が唇を噛んだ。

「仮にとはなんだ広崎！ お前……！」

「仮定つて意味だ。そんなこともわからなくなつたか

茶化すように吐かれた言葉に本多は何かを言おうと唇を戦慄かせ、閉ざした。大和はその様を見てフツと笑つた。幾つもの感情がまぜこぜになつたような、不思議な笑顔だった。

「それがお前たちに、なんの関係があるんだ？」

冷たく突き放すような言葉に、三人は目を見開いた。大和は相も変わらずにこにこと人懐っこい、いつもの笑顔で笑っているのに。感じる壁はなんだ。

「つ闇関係あるに決まつておろうが！！」

本多は咄嗟に叫んだ。このまま黙っていたら、隔てられた壁の向こうから大和が帰つてきてくれない。そんな不安に駆られて。夏輝は瞠目して、しかし自らも首肯した。菖蒲は射抜くように真っ直ぐな瞳で大和を窺つている。

すう、と一瞬だけ、大和の瞳が冷めた。一人、それに気付いてしまった菖蒲はふるりと肩を震わせた。垣間見えたそれが、常に大和の笑顔の裏に隠されていた本音、なのだろうか。

「へえ、なんでだ？」

社交辞令で興味のないことを訊ねているかのような氣の無い声。本多はそれを気に留めることなく、何故か勝ち誇ったような顔で言った。

「俺とお前が友人だからだ！」

どーん、と。夏輝はじいつと両者を見つめ続けていた。菖蒲は唾然としている。大和は茶を啜り、最後の一枚の煎餅を取った。

なんの反応も返さない三人に本多が照れ始めたところで、煎餅を咀嚼し終わった大和が口を開いた。

「そりだっけ？」

「なんだと貴様！」

「冗談だ」

けらけらと大和は笑つた。大和のあんまりな言い様に憤慨していだ本多も、その笑顔に毒氣を抜かれたように力を抜く。

「……ただな、お前たちは何か勘違いをしているようだから、一つだけ言っておきたいことがある」

穏やかに微笑んで、大和はそつと言つた。訝しげな三対の目が大和に向けられた。

「俺は、嫌がらせなんて受けてないよ」

は、と声にならなかつた空気が、誰かの唇の間から漏れた。大和は、此処でやつと温かみのある顔を見せた。自分の子供を宥めるような、そんな困つたような表情。

「あれはただふざけていただけだから」

“ふざけていただけ”。下駄箱に生ゴミを詰められ、齧られることが、“ふざけていただけ”。

馬鹿を言うな。掠れた声に、大和は目を見開いた。本多は大和を鋭く睨みつけていた。

「ふざけるな！ そんなに俺たちは信用出来んか！！」

「そうだぞー、少年。お姉さん寂しいー」

「ね、広崎くん。話してみて……？」

優しい声色に、大和は目を細めた。そつと、口を開く。

「会長……」

「貴様！」

此処に来て尚も二人の存在を認知しようとしている大和。大和は眉を下げる、笑った。

「でも、なんにもされてないよ

頑なにそう言い張る大和に、菖蒲と夏輝が言い募ろつとする。し

かし、それを本多が止めた。諦めたわけではない。一つの答えに行き着いたのだ。

「なにつ……！」

「広崎は、気付いておらんのではないか？」

本多の声が、嫌に響いた。大和は暢気な顔で「何がだ？」などと言っている。菖蒲と夏輝はそんな大和を見てから、顔を見合せた。有り得る。

三人は一斉にため息を吐いた。

なんとか隠そうとしているのであれば、説得のしようもあるが、本人がそれに気付いていないのならば、もうどうしようもない。それでも、と菖蒲が大和に言つ。

「何があつたら、すぐに言つてね。……心配、だから」「……ん？ わか、つた……？」

大和は首を傾げながら、戸惑いがちに頷いた。一先ずは良かつた、と安堵の笑みを溢す三人。そして、大和はただ笑つた。

ここまでされて気付かぬ者がいるものか。じくりと痛みを訴えた右足に、悟られぬよう顔を歪めた。

29 調理部男子（後書き）

“～ような”とか私使いすぎwww
長くなつてくると似たような言葉しか使えなくなつてくる私です。
知り合いに“上手な文章を書いているように見せるのが上手”と言
わしめた女だから仕方ない。

本多、夏輝、菖蒲の三人は何気幼馴染つていつ設定。今作りました。

文化祭が終わって二日目。結局ベストクラス賞（クラスの出し物で良かったクラスに贈る賞）を貰ったのは大和のクラスだつた。おめでとう。

昨日美穂は大和になにかお礼をしたいと思い、ついでにパソコン部員を懲らしめたいと思い、クッキーを作ることにした。結果、成功した。一つ味見をしてみたら、硬さも味も全く問題無かつた。美穂は感動した。

不器用ではあるがなんとか綺麗に見える様にラッピングもし、今日持つて来た。

ちなみにプレーンクッキーだ。

美穂は今日は楽しい日になりそつた、と思いながら下駄箱に向かい、自分の下駄箱の扉に手をかけた。

訂正。今日はとんでもない日になりました。

自分を見ている気配、それも殺気に近いものが悶々と漂ってきた。何か悪いことをしただろうか、と考えると何も無い気がした。だが、椿関連なら、かなりとは言わないが思い当たる事がある。

この前は説教もしたし、私が椿のことを良く思つてないことは向こうも分かつてゐるだろう。

ああ、何でいつも面倒な方向にしか進んでいかないのだろう。美穂は（別に信じてゐるわけではないが）神様を呪つた。

しばらくして殺氣は消えた、だがみんなに分かりやすい氣を出す奴は初めて見た。誰だつたかはよく分からぬが。

とりあえず下駄箱から靴を取り出して教室に向かう。教室にはいつも通りの女子と珍しく本多も来ていた。

美穂は軽く本多に挨拶をすると、準備をすぐに終わらせて大和のクラスに行つた。

「大和ー……、あれ」

この時間にはいつも居るはずの大和が居なかつた。寝坊でもしたのだろうか。

美穂が教室を見回すと、中に宮城が居るのが見えたので呼んだ。

「宮城。 大和、 知らない？」

「ん？ 大和？ …… あれ、 そりいえば居ないな」

宮城はキヨロキヨロと教室を見回した。宮城も知らないのか。 じゃあどこにいるのだろうか。

「遅刻、 か？」

「大和はそんなタイプじゃないんだけどな……」

うーん、 と二人で考え込んでいると、 後ろから不審者が現れた。

「広崎！ 用が、 」

「よつ、 と」

「ぐはあ？ ！ ！」

裏拳を不審者の腹にクリーンヒットさせる。倒れ込んだ不審者を見

てみれば、不審者はビリヤー本多だったようだ。

「あ、本多。ごめん」

「軽いな」

「…………」

結構良いことひいたし、未だに悶絶している本多。酷いな、まだ本気は出してないのに。

しばらく本多が復活するのを眺めながら待つた。野球部で鍛えてくるお陰か、さすがに復活が早かった。一分程で本多は立ち上がった。

「で、あんたは何しに来たのよ

「どうせこつものー」

「勧誘だ!!」

本当に馬鹿でかい声だ。相変わらず何よりだが、喉は痛くならないのだろうか。

とりあえず私は今ので耳が痛くなつた。仕方ない、教室に戻ろう。

「宮城、大和来たらこれ、渡しといて」

「ん? いいけど……。自分で渡さないのか

「うん、大丈夫」

今は此処から離れたいから、とは言わずに早足でその場から離れた。

美穂は「このあと何の勉強をしようかと考えながら歩いた。

30 パソコン部女子（後書き）

セインさん、感想ありがとうございます！！！
こんなへタレですがこれからも頑張ります！

私からもう一度、有難う御座います。

どうして一般の女子高生が殺気なんてものがわかるのかは突っ込み
ないでやって下さい。この子は阿呆なんです。
もしかしたら美穂は暗殺一家の一族っていう裏設定があるのかもし
れないけど。

大和の好きな菓子は和菓子である。和菓子の、あの自然な甘味が好きなのだ、と大和と親しい人物ならば、きっと一度は聞いたことがあるだろう。

大和は、洋菓子はあまり好まない。食べれるし、美味しいと感じられるものも勿論あるのだが、どうしても不自然な甘つたるいそれが舌に付き纏う。

自然な、あの素朴な甘さが好きなのに、洋菓子はまるで計算し尽くされたような甘さ。

つまり、何が言いたいのかと言つと。

「少し小百合さんに構つていただけているからと、調子づくのもいい加減にしてほしいものだな」

大和は計算し尽くされた甘さは嫌いだし、其方の勝手な妄想を押し付けないでほしいということだ。

大和は自分よりも幾分か低い頭を見つめて頬を搔いた。どうしてこうも自分は絡まれるのか。何かそういう成分的なものが自分からは滲み出しているのだろうか。そうだとしたら少し、いや、かなり嫌だ。

大迷惑なことに、教室に向かう途中の大和をひつ捕まえて階段の踊り場の影に連れ込んだこの男の名前は、日野宮 京。一年生で、書道部の若殿と名高い人物だ。

そういえば、こいつは一年生なのに先輩である自分に対し、敬語を使つていない。そんな些細なことで怒るほど心は狭くないつもりだが、心象は良くない。大和は目を細めた。

少女と見紛うほどに可愛らしい容姿とは裏腹に、男氣溢れる口調。そのギャップが良いのだと女子たちは騒いでいた気がする。

男氣溢れるのは口調だけなのだろうか、と初めてその話を聞いたときは首を捻つたものだが、

(なるほど……、)

大和は深く納得した。人目のつかぬ暗がりへ連れ込み、ねちねちと相手を攻撃する。これでは丸つきり腐った女だ。いつそのこと女にでもなってしまえば良いのに。大和は日野宮の話を適当に聞き流しながらそう思った。

それにもしても、先程からかなりの生徒たちの声と雜音が反対側の階段に消えていく。時間は結構経っているのだろう。このままじゃ遅刻をしてしまうかもしれない。日野宮はさつきから同じことを繰り返しているばかりだ。結論を急いでほしい。

「それで……、つ貴方は人の話を聞いているのか！？」

明後日のほうに顔を向け、明らかに話を聞いていない様子に日野宮は苛立ちを見せ、大和を引っ張った。小柄な身体つきに似合わず、力強い。突然のことに対応できるはずもなく、大和の身体は傾いていく。

「あ……、」

大和は声を漏らした。
身体が傾いたということは、バランスを崩したということだ。
バランスを崩したということは、足元がかなり不安定だということ。

足元が不安定なら、転びそうになるのは当たり前だ、とすると大和は浮かせてしまった左足の対にあたる足で全体重を支えるしかないわけで。

小百合の信者共によつて傷付けられた、右足で。

「うう……！ ぐあ、！」

「……え？」

普通に歩いているだけでも痛みを感じる足。そんな心許ないもので支えきれるわけもなく、大和の身体は落ちていく。日野宮の呆気にとられたような顔と声。手摺を掴もつとして、空を切つた自分の手。すぐに見えなくなつた。

冷たい床に叩きつけられた身体。遅れて鈍い音が頭の中に響いた。じんじんと痺れるような痛みが背中から、身体中を侵食していく。

「くっ……、っは、うあ……」

咄嗟に頭を打ちつけないように左手を下敷きにしたせいで、尋常じゃない痛みが左手に走る。無意識に荒くなつていて呼吸を何度か深く息を吸つて落ち着かせると、大和は上半身を起こした。

痛みを少しでも和らげようと、手をぱりぱりと振つてみる。勿論、痛みは引かない。

踊り場から足音が遠退いていったのと、気配が全くしないことを考へると、日野宮はさつさと何處かへ行つてしまつたのだろう。日野宮のせいで自分は落ちてしまつたのに、薄情な奴だ、と少し不機嫌になる。

それにして、どうして自分は利き腕である左手を下敷きにしてしまつたのか。大和は真つ赤になつてしまつた左手の甲を見てから深いため息を吐いた。

そんなこと、わかりきつている。一番近かつた手摺が右側にあって、大和がそれに右手を伸ばしてしまつたからだ。そのせいで素早く動かせたのは脳からなんの指令も受けていなかつた左手だけ。

しかし、困つた。調理部は手が命だし、それにこんな手じゃノートも満足に取れない。痛みは全く治まらない。輝が入つているのかもしれない。考えれば考えるほど不都合な点が出てくる。

「どうしよう、かなあ……」

自分の情けなさすぎる声に、口許に苦い笑みが上ってくる。とりあえず、保健室に行こう。

結局、大和が戻つてこれたのはそれからかなり時間が過ぎた三時限目のことだつた。やはり、骨には蟬が入つていたようだ、保険医と共に直行した病院で、そう診断された。

保険医にはどうしてこんな怪我をしたのかと問い合わせられたが、曖昧な物言いでなんとか誤魔化した。どうせ言つなら、今じゃないほうが良い。

追い詰めて追い詰めて、その最後に奴等の罪を耳元で優しく囁いてやれば良い。自分の犯した罪を、噛み締めながら朽ち逝けば良い。ガラリとドアを開けると、一瞬で自分に集まる視線。一つ瞬きをしてから、大和は首を傾げた。

「……どうした？」

「大和ッ！ お前っ、骨に蟬つてどうこいつだよー！」

当たり前だが、大和の怪我のことは既に学校に報せてあつたらし。まさか、それが生徒側にまで伝わっているとは思わなかつたが。

そう一番に大和に声をかけたのは宮城だ。なんとも悲痛そうな顔

で大和を見つめている。心配をかけたか、と少し申し訳ない気持ちになつた。

「ちよつと階段を踏み外してなあ……」

照れたような顔を作り、頭をがしがしと搔く。すると、宮城は素直に騙されてくれたようで、田を剥いて怒鳴りはじめた。

「はあー!? 馬鹿じやねーのー? 馬ツ鹿じやねーのー?」
「つむさい赤点ー!」
「ばいすな阿呆ー!」

これで、良い。ひつそりと大和は笑んだ。このまま有耶無耶になつて、消えてしまえば良いのだ。お前が気にかけるほどのことでも、ないから。

大和はぶすぐれたような表情のまま、席についた。次の授業を確認し、教科書を出そうと机の中を漁つていると、宮城が話しかけてきた。

「これ、そういうや預かつてた。渡しとくわ
「なんだ?」
「美穂が作つたんだって。胃薬も一緒につけってくれりや氣に利くなつて感心したのこ」

用件だけで済ませれば良いのに、余計な一言まで付け足すのが宮城らしい。大和は少し笑つて美穂の手作りクッキーを受け取った。中を開けて見てみると漂い、鼻孔を擦る仄かな甘い香り。プレンクッキーだ。見た目は普通である。見た目は。

今回はどうな“とんでもクッキー”になつているのか。大和は恐る恐るクッキーを口許に持つていった。その様子を見た宮城が吹き出し、一言。

「さつき俺食つてみたけど、大丈夫。珍しく普通だった」「勇気あるなあ、お前。でも人の貰い物を勝手に食つのはどうかと思つぞ」

まあ、良いけど。大和は咳き、クッキーを口に入れた。口に広がつた“普通のクッキーの味”。固まつた大和に何故か宮城が得意げに言つ。

「な、どうだ？　凄いだろ？　……大和？」

悪臭もしない。馬鹿みたいに形が崩れてるわけじゃない。味は不味くない。歯が砕けてしまうのでは、と思わず心配になるほど硬くもない。……普通、だ。

「……不变は有り得ない、か」

大和は目を伏せた。

不变は有り合えない。そう、何一つ変わらず其処に存在し続けるものなど、あるわけがないのだ。姿形は変わっていなくとも、中身は必ず変わっている。

美穂も、小百合も、学校も、そして、大和自身も。

何一つ変わらなければ、楽なのに。

大和はそんな言葉を呑み込み、クッキーをまた一つ口に入れた。
甘い。甘くて、苦い。

「…………」

クッキーはちょっとぴり焦げていた。

3.1 調理部男子（後書き）

私は洋菓子大好きです。

小百合と連動して大和も病んできた不思議。

今更ですが誤字脱字等御座いましたらお教えいただけないと嬉しいです。

今は昼休み。

生徒が遊びに行つたり、昼食を楽しむ、穏やかな時間だ。

そんな中、美穂だけは穏やかでなかつた。

なんだか、そわそわする。落ち着かない。

クッキー、大丈夫だつたかな。変な味じやないかな。異物は入つていなかつたかな。お腹壊さないかな。

何度も、何度も確認しながら、味見もちゃんとしたのに落ち着かない。

なんでだろう。大和の事が心配だから?

それならそもそもクッキーを作つたりしない。

大和に感想を聞きたかった。

だが、午前の授業は忙しすぎて結局会いに行けなかつた。

売店で買つたお気に入りの商品、焼きそばパンをまた一口頬張つて気が付いた。

なんで、大和の事ばつかり考へてるんだろう。

今まで、こんなこと…あつたかな。はて、と首を傾げてるといつの間にか焼きそばパンを食べ終わつたことに気が付いた。

本来ならこのあとは勉強に入るのだが、美穂はそんなことはすっかり忘れていた。

美穂は大和のいるであらう教室に向かつた。

「大和は、つと…。いたいた」

今回も近くに偶然いた生徒に話しかけ、大和を呼んでもらった。もはや気にすることもないが予想通り、宮城もくつついてきた。だから、なんでいつも来るの？

「大和、クッキーど、……どうしたのよ、それ」

一気に浮ついていた気分が冷めた。急に冷静になつた。宮城は何言つてんだこいつ、という顔で見ている。

「…知らないのか」

「知らないから聞いてるんだけど」

マジかよ、と呟いて頭を搔く宮城。いや、結局何があつたんだよ。

「階段で、踏み外したんだと。それで手に躄が入つた、らしい」

手に、躄？

あの運動神経抜群の大和が、階段を踏み外した。

もう一度見てみれば怪我をしているのは左手。左手って言つたら大和の利き腕じゃないか。

美穂の頭からクッキーの存在が吹つ飛んだ。

「え、大和何したのよ」

「いや、ちょっと…」

曖昧な表現で、苦い笑顔で笑っている。

他人から見れば「やつちやつた」と見えるかもしれない。

だけど美穂はいつもと違う、あのふんわりとした笑い方をしない大和が、不自然すぎて、違和感を持つた。

「何か、隠してる?」

一瞬、大和から表情が消えた。

でも本当に一瞬だった。大和はまた、あの不自然な笑顔に戻り、「何が?」と尋ねてきた。

特に変わらない気がするのに、見た目はいつもの大和なのに。何かが違う。

何だろう、大和がすぐ遠い存在に見える。

「……うつと、何でもない」

「そりいえば何しに来たんだ?」

今度は大和から質問が返ってきた。

大丈夫、いつもと同じ大和じゃないか、と自分に言い聞かす。半ば、無理矢理に。

「あー、忘れちゃった。宮城、何だっけ」

「俺にそれを聞くか」

はあ、と呆れたように溜息をつく宮城。そして吐き捨てる様に「わかんねえよ」と答えた。そりやそうか。でも美穂は結構本気で忘れていた。

さっきまであんなに落ち着かなかつたのに、何だつたつけ？
考えたが完全に吹つ飛んでいて用件は欠片も残つていなかつた。

「思ひ出したら、また来るよ」

「ん、そうか」

「またな、美穂」

「美穂つて呼ぶな」

「だから何で俺だけ！？」

そのまま美穂が教室に戻ると本多が近寄つてきた。どうした、珍しいな。

「坂田、何か知らんがお前を呼んでいる奴がいたぞ！」

「誰？」

「知らん！」

きつぱりと言い張つた本多。いや、そこは聞いておけよ。

何か言つていたかどうか聞いてみるとこれにはまともな返事が返つてきた。

「戻るとさ」また来る、と呟つて早々に帰つたぞ

いや、それよりもまず名前だろ。お前は回路が故障してゐるのか？

「そ。ありがとう」

とりあえずお礼を言つて席に戻る。

時間はまだあるので勉強をすることにした。

それにしても私の友達だったら本多が知らないはずはないんだけどな。

……誰かそんな奴いたかな？

美穂は首を傾げた。

ノートが、とれない。

授業が始まつて大和が最初に思つたことは、それだつた。しかし、授業はそんな大和に構うことなくどんどん進んでいく。今、三回黒板がチョークの白い文字で埋め尽くされて、消されていくのは四回目。

もうやだ。生まれ変わつたらバーラエッセンスになりたい。みんなをバーラの良い香りで包んでやるんだ。大和が全力で現実から顔を背け始めた頃、チャイムが鳴つた。

「はい、じゃあ今日の授業は此処まで。広崎、お前はちょっとこっち来い」

「先生、俺、レモングラスでも良いな

「何が?」

一階堂は大和に向かつて手招きをした。背後から富城の心配そうな視線が突き刺さる。大和はそれに気付かないふりをして一階堂の後を追つた。

「広崎、正直に言えよ」

指導室に入るなり、一階堂はそう切り出した。真っ直ぐに自分を見つめるその目が、何故か酷く憎らしい。大和は居心地悪そうに硬いパイプ椅子の上で身動きした。

「お前、虐められてんのか？ それとも、嫌がらせされてるとか」「先生まで、なんだ。そんなに俺を可哀想な奴にしたいのか？」

間髪入れず、苦笑いで大和は答えた。一階堂は目を逸らさない。窓の向こうに見える木から、雀が飛び立った。

……もつ少し、受け答えにゆとりを持つたほうが良かつたかもしれない。大和は少しだけ後悔した。怪しまれています。

「だいたい、どうしてそんな話が出てきたんですか」

そんな馬鹿げた話が、いつたい何処から漏れてしまったのか。奴らがばらしたということはまず有り得ないだろう。何か考えがあるならばまた別だが、わざわざ自分たちの不利益になるようなことを明かす意味がわからない。

一階堂は目を伏せた。

「……見た奴がいたんだよ。お前の下駄箱に、ゴリラ詰め込んでる越戸を見た奴が」

少しは周りを見て行動をすれば良いのに。生徒会に入っているくせに、越戸は馬鹿なのか。そうか。
しかし、大和は一切動じずに一階堂を見た。

「ええ？ なんだ、それ」

全く身に覚えが無い、と笑う。そんな大和に一階堂はため息を吐き、指導室に設置されている時計を仰ぎ見た。もうすぐ、授業が始まる。一階堂が小さく舌を打った。

ようやく解放されたと思っていた大和の耳に飛び込んできたのは、全く真逆の言葉だった。

「広崎、サボれ」

呆気に取られた。

常日頃から教師らしからぬ教師だと思っていたが、まさか生徒にサボタージュを強制させるだなんて。

大和は戸惑いながら訊ねた。

「……先生、授業は？」
「俺はない」

俺“は”。そうか、それなら良かつた。一階堂はサボっていてもなんら問題はない。じゃあ、

「…………俺の授業は？」

「だから、サボれ」

大和に選択肢は残されていないようだ。

仕方なく大和は浮かせていた腰を降ろし、一階堂に向き直った。大和は一階堂を睨むように目を眇め、ぽつりと呟いた。聞き逃してしまいそうなほど、小さな声で。

「…………見て見ぬふりをしていれば、楽なのに」

「馬鹿言つな。大切な自分の部の生徒だぞ」

一階堂は大和の言葉に驚くこともなく、サラリと答えた。こればかりは、大和も田を見張った。いつもと違う自分を見て、この反応。裏表のありすぎる自分には、大和でさえも気味が悪いと思っているのにも関わらず。

「大抵の教師はこういつとき、見捨てるよ
「じゃあ、俺はその“大抵の教師”の中に入つてない教師つてことだ」

何を言つても一階堂は引き下がらず、ついに大和は黙り込んでしまつた。沈黙を容易く破り、一階堂は落ち着きのある声で訊ねた。

「で、結局、嫌がらせされてんだろ?」

「言いたくなかったのになあ、と大和は顔を顰め、そっぽを向いてしまつた。それは、肯定の意だつた、一階堂はにやりと笑つた。そういう皮肉げな表情が似合つてゐるのは、教師としてどうかと思う。大和は憎まれ口を叩いた。

「大変だねえ、お前も。まあ、どうにもこうにもならなくなつたら、なんでも良いな」
「え……」

ぽんぽんと大和の頭を軽く叩き、一階堂は立ち上がる。大和は思わず顔を上げた。これで、話は終わりなのか。

「せん……、」
「俺あなあ、広崎」
「…………」

先生、と呼びとめようとした大和の声を遮り、一階堂が言う。仕方なしに大和は口を噤んだが、不満がたっぷりなのはその表情から見てとれる。

「嫌がらせ受けたる可愛い生徒を見捨てるほど薄情じやねえが、その嫌がらせを止めさせてやるほど良い先生でもねえんだ」

大和は瞬きした。結局一階堂は、大和への嫌がらせの確認を取りたかつただけで、それ以外は助けを求められない限り、何もするつもりがないと言つのだ。

「それに、なんかお前助けてほしくなさそうだし」

大和は思わず吹き出した。ああ、確かにそう思つていた。

「先生つて、面白い」

「そうかあ」

一階堂は意味がわからないと言わんばかりに首を傾げた。

33 調理部男子（後書き）

一階堂を冷たいと思うも優しいと思うも自由です。
彼は大人ですが、子供のような一面もあつたりします。多分。

美穂は家にいた。

サボつたわけではない。学校が終わって、帰ってきたから家に居るのだ。

しかし、暇であるにも関わらず、美穂は宿題に全く手をつけていなかつた。それどころか今まで違うことをしていた。

ちらりと横目で机に乗つた一つの皿を見る。

クッキーが出来たのだからプリンだって出来るだろう…、と考えたのが甘かつた。

昔のような形ではない。形ではない、か、黒焦げだった。
どうやつたらこうなるのだろうと、美穂は三分钟までは考えていた。
しかし今は諦めてソファに座っていた。若干拗ねていた。

黒焦げの過程はクッキーにもあつたから、次はうまくいくと思つて作つた第一号は、トラウマと同じ形となつた。

美穂はそんな失敗作を見るのを止め、違うことを考え始めた。

あの表情は、何だったのだろう。美穂にとつてこの事は一種の謎解きの様なものだつた。しかも、特別入り組んだもの。

あんな表情を、美穂は今まで見たことが無かつた。あれが大和の本当の姿? 小さいときは、いつも柔らかな笑顔で笑つていたのに。あの表情は、一体何を表しているのだろうか。

近くに置いておいた、昨日余つたクッキーを口に含む。

いつも失敗ばかりしていたのに、ようやく成功したクッキー。

なのに、大和のくれるクッキーとまるで違う。

あの甘味のある、優しい味。どこが違うんだろうか。

作り方？隠し味か何か？

：分からぬ。

「ああっ、もうー。」

髪を思い切り搔きむしる。

何もかも分からぬ。なんだか自分が取り残されていくよつで、無性に腹が立つた。

自分を残して、何かがどんどんと進んでいく。
最近、なにもかもおかしい。

身の回りにいる男子だつてそう。椿だつてそう。学校だつてそう。
……大和だつて。

途方もなく寂しい気持ちに駆り立てられる。

……私つて、こんなに弱い人間だつたつけ？

自分さえも、分からなくなつてくる。ひどく混乱する。

「私、何がしたいんだろ……」

最近自分が曖昧だ。

なんでだろう。いつからこいつなつたんだろう。
面倒事には首を突つ込みたくないなかつた。むしろ避け続けたかつた。
……いつの間にか巻き込まれていることが多かつたが。
だけど、今はそんなことは言つていられなかつた。

「とりあえず学校から、かな」

学校なら……、会長が一番詳しいはずだ。会長に聞けば、最近何か
変わつたことが分かることがあるだつつか。

明日から一段と忙しくなりそうだ、と美穂は思つた。

もう一度口に入れたクッキーは、不思議と、味がしなかつた。

34 パソコン部女子（後書き）

何かがおかしい。
…じつはこうなった。

「ねえ、大和くん」
「……なに」

鈴を転がしたような愛らしい声。誰もがその無垢さに頬を緩め、聞き入つてしまいそうな声に、大和は素つ氣無く返した。少女は大和のそんな態度に気を悪くするわけでもなく、くすくすと笑っている。とろりと潤んだ飴色に吐き気がした。

吹いたり止んだりの風邪が、優しく、時に強く大和の髪を弄ぶ。腕一本ほどしか通らない狭く間隔の開いた、背の高い鉄製のさくに大和は背を預けた。人を閉じ込め、何人たりとも逃がさないその様子が、牢屋のようだと大和は思つた。

しかし、その牢屋が自分たちの命を守ってくれている。なんて皮肉なのだろう。

「ねえ、今、苦しい？」
「……」

大和は何も言わず、遠い地面を見下ろした。くらり。目眩がした。このまま落ちてしまえば良いのに、誰でも。頭上では名もわからぬ鳥が群れを成して飛んでいる。

冷たい石の感触に、眉を寄せた。

「ねえ、辛いよね。助けてほしい?」
「ううん」

此処で、初めて大和は小百合をしっかりと見た。微笑み、自分を見つめ続ける小百合。女神の如く神々しいその笑顔の中に、隠しきれないどす黒い悪意を見つけた。

小百合は困ったように人差し指を唇に当てた。ひゅう、とまた風が吹いた。それは小百合のスカートを翻し、そして大和を撫でてから遠ざかっていった。

「大和くん、強情なんだね」
「お互い様だと思うんだけど、どうだろ?」
「……そうかもね」

小百合は頬を染め、「大和くんと、おそろい」と呟いた。

大和には、小百合が何故自分に其処まで執着するのかが、わからなかつた。自分は料理上手だけが取り柄で、随分気の利かない男だと自覚している。小百合ほどの女であれば相手など選り取り見取りだろうに。

小百合は何も言わない大和を見ると、少しだけ寂しそうに言った。

「強情な大和くんも、好き」

大和が何か言おうと顔を上げると、小百合は笑った。

「でも、あんまり度が過ぎると、わたしにも考えがあるから」

「苦しくなりたくないなら、素直になつてね」小百合はそう言い残すと、最後に名残惜しそうに大和を振り返り、屋上を出ていった。

「……作りモノのくせに、」

そう言つたあと、大和はハツとして口を押さえた。
作りモノ？ 誰が？ 小百合が？ なんで？ どうして自分はそんなことを言つたのか。

大和はなんとか混乱する思考を抑えつけると、立ち上がり、屋上を後にした。

どうやら、大和のこの胸に巢食つおどろおどろしい感情は、憎たらしくほど晴れ渡つた青に融けていってはくれぬようだつた。

「広崎！」
「大和！」

これは珍しい、と大和は突然の来客を見つめた。富城は少し嫌そ
うな顔で来客たちの名を呟いた。

「本多と美穂だ……」

はふう、と浅いため息を吐き、これまた珍しく、富城は大和から
距離を取つた。休み時間となると何故かいつも真つ先に此方へやつ
てくるのに。きっと、本多と美穂が一緒にいると面倒なことになる
と思つたのだろう。

「どうしたんだ？…………一人して」

いつのまにそんなに仲が良くなつたのか、と二人を見る。その視
線の意味に逸早く気が付いた本多が力一杯首を横に振り、否定した。

「余程の物好きでなければ有り得んだろうー。」

「あんたねえ……、」

「じゃあ、俺は余程の物好きなんだ」

本多の言葉を聞き、大和がぼそりと呟いた。富城が呆れた顔で大
和を見ている。

「……惄氣？」

意味がわからなかつた。

「それで……、なに？」

「お前に用があつて来たのだ！」

「同じく」

本多の用件はなんとなく察しがつく。野球のことか、若しくは前にはぐらかしたることだらう。

ただ、美穂の用とはなんだらう。大和は内心首を傾げた。周りからの視線が痛い。少し騒がしくしていたから、クラスメイトたちも気になつてきただ。

本多が難しい顔をして美穂を見る。

「なに、お前もか。しかし、俺のほうが重要な用件のはずだ。此処は譲つてもらおうか！」

「嫌。どうせ、あなたの用事なんて野球のことでしょう？」

「違う！」

美穂が目を丸くした。宮城も隣で口を開けている。次の言葉を吐き出す為だろうか。本多は胸に酸素を溜めている。大和は一瞬で本多のしょうとしていることに気付き、本多の手を取つた。そしてそのまま本多を引き摺り、教室の外に連れ出す。

最近、よく授業をサボっている気がする。単位は大丈夫だろうか。
後ろから自分たちのものではない足音が聞こえたことに、大和は気が付かなかつた。

「本当に、なんなんだ……？」

「今日はお前に驚くべき事実を伝えに来たのだ！」

「驚くべき事実？」

何を言い出すのか。大和はじとー、と本多を見つめた。その目はなんだと本多が喚き散らす。

しかし、すぐに気を取り直すと、本多は大和の両肩を力強く驚掴み、言い放つた。

「広崎！」

「な、なんだ？」

本多の馬鹿でかい声は廊下によく響く。授業開始間近で人気はないとはいっても、こんなことでは誰かに聞かれてしまいそうで少し心配だった。

「お前は嫌がらせを受けているのだ！」

「…………」

大和は呆気に取られて本多を見つめた。何を今更、と言いそうになつたが、そういえば、己が強引に誤魔化したせいできょつとした誤解が生じているのだったと思いついた。面倒臭い。

「、なんだ、いきなり失礼な」

「お前がどう思おうとお前は嫌がらせを受けているのだ！　自覚しろー！」

わかつたと言わない限り、退く気はなさそうだ。仕方なしに大和は言った。

「……なんだ」

「そうだ！　ではな！」

用件はそれだけだつたらしい。本多は元気にそう言つと走り去つていった。

お人好し、と言つのだろうか、あれは。少し違う気もするが。馬鹿正直な人間は好ましい。しかし、この場合は少し、要らない。

大和はため息を吐いた。すると鳴り響くチャイム。ああ、遅刻。

大和はゆつたりと教室への道を歩きはじめた。ところで、美穂の用事はいつたいなんだつたのだろうと思ひながら。

真っ青な顔で大和の後ろ姿を見つめる美穂に、気付かず。

「中々に君は、面倒なことをしてくれたな」

聞き慣れぬ男の声が耳元で囁き、思わず小百合は飛び起きた。突然のことにも心臓が驚き、ぱくぱくと五円蠅い。辺りを見渡して、小百合は愕然とした。

「ど、何処よ、此処……」

何色もの色を重ね、無理矢理作つたかのような汚い黒が渦巻く空間に、小百合はいた。視界を埋める恐ろしい光景に小百合はへたり込んだ。

此方を見て、微笑む男がいる。

「本当に、面倒なことをしてくれたなあ」

しみじみと懐かしいことを思い出しているような優しい口調で男は言った。視線はずつと小百合に向けられている。
堪え切れぬ恐怖に小百合は叫んだ。

「あなた、誰なの！？」

必死な小百合を、これは面白いものを見たとでも言いたげに笑う。くつくつとなる喉に小百合の恐怖は駆逐され、代わりに怒りが降り積もった。

「さあ、誰でしょ」
「わたしを馬鹿にしてるの」
「まさか」

そう言いながらも男の表情は小馬鹿にしたよつなものから動かない。

「広崎 大和」
「つ、」

男が呟いた名に、小百合は勢いよく顔を上げた。愛しい愛しい彼の名前。どうしてお前が知っている。

「彼はね、君が好いて良い男ではないんだ」
「ツそんなこと、勝手に決めないで！」

悲鳴にも近い声で小百合は怒鳴った。頭の中はぐちゃぐちゃで、怒りだけが其処にあつた。目の前が真っ赤で何も見えない。

「彼もまた作られた存在であり、その上、本物には成り得ない存在なんだよ」

「黙つてよ……！」

小百合の押し殺したような低い声に、男は笑みを深めるだけだった。形の良い唇を、歪める。

「しかも、彼には決められた何人かの“お相手”がいるから」

その言葉がわからぬほど、小百合は無知ではなかつた。わかつてしまつた。悟つてしまつたのだ。大和が、どういう位置につかされている人間なのかを。

手が真つ白になるほど、拳を握り締めた。そんな小百合に気付いているのか、いないのか、男はペラペラとよく回る口を動かし続ける。

「彼はね、ヒロインの登場によつて零れてしまつたモノを受け止める役割を持っているんだよ。つまり、
「黙つて言つてるでしょうー！」」

小百合の、荒く吐き出す呼吸音だけが、暫くの間響いた。男の表情は仮面のように変わらない。人を食つたような笑みのまま、ずっと固定されている。

小百合も自分のことは言えないが、不自然な美しさと縫いつけられた仮面に、精巧な人形染みたものを感じた。

「 所謂、脇役だね」

見えない壁があり、反響しているように、そこかしこで男の声が響く。小百合は崩れ落ちた。

「 良いかい、椿 小百合。覚えておくんだ」

何も聞きたくない、と小百合は緩く首を振つて両耳を塞いだ。それでも、頭の中に直接響いているみたいに男の声ははつきりと聞こえる。

「彼は脇役。君はヒロインだ」

小百合はどうとう泣き出してしまった。はらはらと涙を流し、目は虚ろでいつたい何処を見ているのか。

「脇役とヒロインが結ばれるなんて、あつてはいけない」

「…………」

「せいぜいメインキャラクターたちと戯いだけのお遊戯を楽しんで
いなさい」

時期が来れば、迎えに来てやう。男はそつ言い残すと、黒の中に消えていった。

「いや……」

小百合は幼子のように力無く首を横に振った。いやだ、いやだと繰り返しながら、ただただ泣き続けた。

「わたしの王子様は、大和くんだけだもん……」

突如射し込んだ光に、小百合は自分の意識が覚醒していくのをほんやりと感じていた。

椿 小百合視点9（後書き）

謎のある“男”が登場！

この前部長が、菖蒲に会えないー、と嘆いていたから会長は最近忙しいのだろつ。

なので会長には事前に連絡して、朝に時間を取つてもらつた。本当に有難い。

約束の場所の生徒会室に入る。実際、私が入つていいといふのは分からなが、会長が此処が良いと言つたから此処になつた、この際それにつれるのはやめよつ。

会長は既に来ていた。

「遅れてすいません」

「あ……、ううん、私も今、来たところだから……」

とつあえず譲るよつた形になりながらも、机を挟んで向かい合ひつもうに座る。

「それで、聞きたい」とつて……？」

「最近の学校についてです」

やつぱりと会長はサツと表情を変えた。それ今までのいつもと同じようなおどおど感は無かつた。

田で先を促されたので進めることにした。

「会長になら分かると思います、この学校がおかしくなつてきていることを。でも、私には変化が分からないです」

「……学校の変化が、知りたいの？」

「はい」

会長は溜息を一つつくとこちらを見直した。
その目には憂いが宿つていて思ひに思えた。

「彼女……、椿さんが来てから、この学校は変わった。きっとね、
彼女が悪いわけではないの。でも、彼女を切っ掛けとして、学校が
崩れ始めた」

「崩れる？」

「秩序も、雰囲気も、友達も、もしかしたら先生も。なにもかもが
音を立てながら、崩れていった……」

友達、と言う時に会長の声が揺れた。生徒会のメンバーのことだろう。
私は『最近』という言葉で丸めていたが、考えれば椿が来た頃から
かもしれない。椿がこの学校に来たのは確か……五月だつただろう
か。

「具体的には、わからぬけれど……」

「……ですか。じゃあ生徒会で彼女に首つたけの人は？」

をせび考えもしないで会長は答えた。

「奥くんに……、越戸くん。あと他にも何人かいると思つ」

「……すいません。ありがとうございました」

「えつ~むへ……、いいの?」

「はい、大丈夫です」

会長は「わつ」と呴いて、優しげに微笑んだ。

「では失礼します」

「…………気をつけたね」

部屋を出ようとかけられた言葉に振り返る。

会長は微笑んでいた。わつきとは違つ、何か別のものを含んだ笑み
だった。

.....

思つたよりも短い時間で、すごいことが聞けたと思つ。だけど、あの時の笑みは何だったのだわつ。

美穂は教室にいた。授業も何時限か終わつていて
今は休み時間だつた。

勉強道具は机の上に広げていたが手をつけていなかつた。そついえ

ば、最近勉強不足だな、と皮肉げに美穂は笑つた。

本当にいろんな事が一度に起こりすぎていた。

思わず頭を抱え込んで溜息。

最近溜息も多い、と美穂はまた小さく笑つた。

ふと視線に教室を出ていこうとする本多を捕らえた、

……大和も何か最近の変化を知っているかもしない。

本多と行くととんでもないことになりそうな気がしたが、もう別に良いだろうと半分投げやりになりながら、本多の後を走つて追つた。

「広崎！」

「大和！」

二人で違う呼び方で同じ人を呼ぶ。
なんとか笑いそうになつた。

「本多と美穂だ……」

美穂と呼ぶなといつも言つてゐるのになんでこいつは呼ぶのだろうか。つっこむ気も既に起きなかつた。

「どうしたんだ？ …… 一人して」

逸早く言葉と目線に気付いた本多が反応する。

「余程の物好きでなければ有り得んだろう!」

「あんたねえ……、」

「こいつ、良い奴だと思つたら調子に乗るな。
人を見る目が鈍つてきているのかも知れない。
美穂はまた溜息をついた。

「それで……、なに?」

「お前に用があつてきたのだ!」

「同じく」

本多が言つたかったことを言つてくれたので、適当に略しておく。
だけど本多の用事なんてほとんど分かりきつていてる。

「なに、お前もか。しかし、俺のほうが重要な用件のはずだ。此処
は譲つてもうおつか！」

「嫌。どうせ、あなたの用事なんて野球のことでしょう？」

「違う!」

即答で否定されて驚く。

本多が野球以外の事情があつて大和の所に来るなんて、見たことが
ない。

本多が言葉を出すために息を吸う。

もし、そんな事情があるなら聞いてみたいと思い、割り込まないで
見守る。

しかし大和は何を察したか本多の手を取ると、引っ張つて教室から

出ていった。

宮城は口を開けてぽかんとしている。

時計を見ればもうすぐ始業だ。本多を連れ戻す必要がある。

「全く……、手間掛けさせるんだから」

美穂は走って教室を後にした。

何処に行つたか分からぬのでとりあえず当てもなく走つてみる。体力はあまりあるほうではないが、時間がない。

「今日はお前に驚くべき事実を伝えに来たのだ！」

本多の馬鹿でかい声が廊下に響く。まさかこんな所で、あのはた迷惑な声が役に立つとは思わなかつた。

意外と距離は近かつた。

「広崎！」

「な、なんだ？」

自分から連れ出したのに、大和が勢いで負けていた。まああいつに勢いで勝てる奴は少なくともこの学校にはいないだろう。

声をかけようとした美穂は本多の声に遮られ、出せなくなつた。

「お前は嫌がらせを受けているのだ！」

はつきりと、いつもよく通る声で、とんでもない事を言つてのけた。

大和が、嫌がらせを？

まだ二人は話をしている。なんて言つてはいるかは聞こえない。入っ

てこない。

でも、これでいろいろと不可解なことが説明できる。

大和の左手。大和のよく分からぬ表情。

きつと繋がっているだろう。いや、絶対に。

考えられるのは椿の信者、小百合ちゃん親衛隊だ。

大和は椿の事で何か気付いたことでもあつたのではないか。

あるいはあまり相手にされない男子の嫉妬だろう。

足に力が入らない。美穂はその場に座り込んだ。

始業の鐘が聞こえた。

遅刻。しかし美穂には授業さえどうでもよく思えた。

……なんで、気付けなかつたんだろう。

大和の事ならなんでも分かるんじやないかと思っていたのに。急に自分が馬鹿らしく思えてきた。

馬鹿馬鹿しい、何を考えていたんだろう。

自然と涙が流れた。

母親が最近、物言いたげな目で見てくるのが、大和はとても気になっていた。じつと、咎めるように労るように、穏やかでいて厳しい眼差しで、静かに大和を見つめるのだ。

「……何か言いたい」ともあるのか？」

居た堪れなくなつた大和がそう訊ねても、母 和はふわりと笑い、何処か寂しそうに首を振るのだ。しかし、今日は違つた。

「悩み事でも、あるんじゃないかと思つて」

手にも輝を入れてくるし……、とため息混じりの言葉。

「悩み事？　ないよ」

にべもなく大和はそつ返す。平静を装つたつもりだが、味噌汁を慌てて飲んで舌を火傷してしまつた。急いで器から口を離し、ベえと舌を突き出した。和がその様を不思議そうに見ている。

「何してるのよ」

「火傷^{やへお}」

「馬鹿ねえ」

呆れたように笑われたので大和は少し恥ずかしくなつてしまつた。照れを誤魔化すために今度は白米をかつ込む。勿論、喉に詰まらせた。

「ん、ぐつー?」

「ああ、もう。いつまで経つても忙しない子ねえ」

呆れたような声色を作つても、その顔は緩んでいる。和は立ち上がり、大和の背を撫でた、その際に、一緒に茶も渡してやる。

大和は茶を受け取り、飲み干した。

「つは、俺、もう行つてくる!」

「はいはい、行つてらっしゃい。気をつけるのよ

「行つてきます!」

とうとう堪え切れなくなつたらしい。羞恥で顔を真つ赤にした大和は椅子を蹴飛ばす勢いで立ち上がり、すぐ側にあつた鞄を引っ掴むと足早に家を出た。

どんなに急いでいても行つてきますの一言だけは欠かさない大和

である。

「……広崎先輩、いらっしゃいますか」

何事も起こらず、放課後を迎えた。このまま今日は平和に過ぎせると良いな。大和のそんなさやかな願いは儘く散つてしまつた。

ぼそぼそと、陰鬱過ぎて此方まで氣分が落ち込んでしまった響きで、見慣れぬ後輩は大和を呼んだ。

最近、人から呼び出されることが増えたな、と思つ。自分も人気者になつたものだ。勿論、喜ばしくない方向に。

今回も、きっとそんなことであの後輩は大和を呼んでいるのだろう。目に、生気がない。

「俺が広崎。何か用か？」

「……用事もなきや、こんなところになんて来ませんよ」

またボソリ。嘲るように呴かれたそれ。うーん、と大和が困つたように目を泳がせる。新しいタイプの後輩にどう対応して良いのかわからない。

あんまりな態度が気に食わなかつたのか、宮城が後輩を睨み付け、唸るよつて言った。

「お前、先輩呼び出しどいてその態度、ないんじゃねえの？」

どうしていつもお前は自分の隣にいるんだ、と言いかけた口を閉じて、大和は今にも後輩に掴みかかりそうな富城の身体を押さえた。後輩は仄暗い目のまま、富城を見て鼻で笑つた。

「たつた一つ歳が違つぐらいで、威張りくせうないでもらえます？」

「てめッ……！」

「富城、落ち着け」

自分のほうが体格が良いとはいえ、同年代の男を腕一本で押されるのは中々に苦しい。富城は大和を見て顔を歪めたあと、床に視線を落とした。自分を抑えるためだろうか。

「『めんな。……此処じや話しにくい話か？』

「、はい」

「じゃあ、場所を移そつか」

至つて普通の様子で自分に接する大和。後輩は少しだけ目を大きくした。

一拍置いて、小さく頷く。そうか、と大和は後輩と連れ立つて教室を出た。富城は拗ねたように顔を顰めていた。

場所を移すと言つても、大和は良い場所を知らない。

屋上は小百合が何故か屋上の鍵を持っていたから入れたのだし、廊下では誰かに聞かれてしまう可能性がある。階段にはこの怪我が治るまで用が無い限りあんまり近付きたくない。

仕方なく、大和は後輩を調理室に招くことにしたのである。

「それで……、ええっと、名前は？」

「…………新見です」

「に、新見！ そう！ 新見だったな！ いやあ、背が伸びたな新見！」

新見、新見……。必死に記憶を探るも全く覚えがない。自分の名前を知っているのだから、何処かで会ったことがあるのかと思ったのだが。自分が忘れているだけだろうか。だとしたらとんでもなく失礼だ。

大和は必死に愛想笑いをして場を乗り切ろうと試みた。

「……会うのは今日が初めてのはずですが」

「そ、そうだよな！」

結果、新見に訝しげな目で見られただけだった。
とりあえずさつと本題に入つてこの気まずい空気を払拭してしまおうと、大和は切り出した。

「それで、俺になんの用事だつたんだ？」

「单刀直入に、聞きます」

「……うん」

見えぬ大和の本心を見透かすように、新見は大和と目を合わせた。奈落のように深すぎるその瞳に、大和は思わずぞくりとした。

「広崎先輩は、椿 小百合の敵ですか？」

椿の名を聞いた途端、大和は自分の中の何かがすう、と冷めていつたのを感じた。

「おーい、坂田ー！」ちだ、じゅー…」

放課後になり、さとパソコン室に向かおうと教室を出たところで、美穂は誰かに呼び止められた。

廊下に反響した声の主を辺りを見回して探すと、今出たばかりの教室の中から聞こえた。

教室から廊下にまで響かせられるのはこのクラスでは本多と、

「悪いな！呼び止めちゃって」

園下しかいない。

ええ、本当に悪いです、と美穂は本気で言いたくなつた。

「いえ、平氣です。なんですか？」

「実は新見がひつをしげりに登校したらしくてなー」

「つ、新見がですか？！」

思わず食らいついた美穂に園下は少し後退した。

「ああ。もしかしたら部活行つてんじゃないのか？ま、せことは部長に任せることや」

「先生、私は副部長です」

「ん？…ああ、そつか」

ケラケラと笑う担任。よく教師という役職につくことが出来たと思う。

……そういえば一階堂も同じ様なもんだな。

美穂は此処にいる意味が無くなつたと理解すると、手短に先生に別れを告げて、大和の教室に行つた。

「大和、…あれ、宮城何拗ねてんの」

「つむきー」

大和は居なかつたが代わりに、いつもと違う感じの宮城がいた。宮城の珍しい態度に美穂は半分驚き、半分楽しんだ。面白く思えた。

「結局どうしたのよ」

「……一年が来たんだよ。生意氣で、すつごい暗い奴。大和とどうが行つたけどな」

なるほど、一年が生意氣で、それなのに大和が話すためにどこかに行つたのが気に食わないのか。

……でも、その一年つて誰だ？

「誰なのよ、それ」

「だから知らない奴だよ。……でも新見しんみつて札に書いてあつた気がする」

「ああ、それ、私の部員ね。新見よ」

「…あんな奴いたのか？」

怪訝そうな表情で宮城は尋ねる。

知らないのも無理はない。新見は入部してからそれ程経っていない頃から襲撃され、不登校になつたのだ。
知つているのは多分、パソコン部員と新見の担任だけだろう。

「いたわよ。不登校になつて、あまり知られてないだけ」

宮城はそうか、とあまり納得していない表情で頷いた。納得していくてもこつちは構わないけどね。

「ところで美穂、」

「美穂つて呼ぶな……。もういいや、めんどくさい。何？」

「美穂は大和に用があつたんじゃないのか？」

そういうばそうちだつた。

美穂はお礼を言ってから教室を離れた。

美穂は大和といつも通り接する自信が無かつたが、何か大和と話したかつた。とりあえず、大和に今日作るものを見こつと思ったのだ。
だが、今は新見を探した方が良さそうだ。

まず、教室。

予想はできていたがやはり居なかつた。

次にパソコン室。

此処にも新見は居なかつた。

しかも運の悪いことに町谷に捕まり、パソコンを教えたせいでかなりの時間を食つた。

今度は図書室。

開いてなかつた。サボりか。

他にも廊下を回つたり、屋上の鍵を持って行つていなかを確認した。だけど見つからなかつた。

「何処にいるのよ……」

美穂はしばらく階段に座つていた。

体力の回復を待つてから、美穂はまた新見を探しはじめた。
……今から思えば、もう少ししそこに居れば良かつたと思つ。

「坂田さん、何をしてるの?」

今一番接触したくない人物 椿とばつたり会つてしまつた。

38 パソコン婦女子（後書き）

いひつして書いてみると一回一話更(新)つて結構きつい。

小百合は一日中落ち着けなかつた。

あの男の事を考えていたのだ。

あの男は知らない。でも、知つてゐるよつた氣もする。なんだか不思議な感覺だつた。

放課後になつて帰りの準備をしているとき、ふと教室に貼つてあるカレンダーが目に留まつた。

今は十月。進級まではあと五ヶ月くらいある。

時間がない。

タイムリミットは近づいてきている。

あの男が何と言おつと大和くんは絶対に本物の王子様にしたい。でも、方法がない。

しばらく考えたが、良い方法は何も出でこない。

何か、あの男の眼をかい潜つて、大和くんを王子様にする方法は……。

「おーい、坂田ーー」つちだ、じつぢーー

担任の声で小百合は現実に戻された。
呼び止められた坂田はうんざりしながら受け答えをしていた。

「悪いなー!呼び止めちゃつて」

「いえ、平氣です。なんですか?」

小百合は特に興味を持たずには帰ろうとする。

「実は新見がひつをしづりに登校したらしくてなー」

小百合は足を止めた。

新見？

聞いたことがある気がする。だけど、誰だつただろ？
この前、と言つてもかなり前だつた気がするが、狙つた相手だつた
気がする。すぐに飽きたのだが。
しかし久しぶりに来た、とはどういう意味なのだろうか。
だが今更どうだつて良いだろ？。どうせ飽きた相手だ。
見れば坂田はもう居なかつた。園下も居ない。話が終わつたのだろう。

小百合はそのまま帰らうとしたが、大和くんに会つてから帰らうと思つ立ち、教室を後にした。

教室に大和くんは居なかつた。代わりに富城と美穂が居た。最近あの二人の組み合わせをよく見る気がする。

「結局どつじたのよ」

「……一年が来たんだよ。生意氣で、すつごい暗い奴。大和とどつ
か行つたけどな」

「どうやら大和くんは居ないようだ。

一年と何処かに……、誰だろ？か、その一年とは。
とにかく小百合は大和くんに会つために、学校の中を探し回ること
にした。

.....

何処にも居ない。

いろいろと歩き回つたけど見当たらぬ。
あと思いつくとしたら、調理室だらうか。

小百合はまた歩きはじめたところで、前方に同じ様に回りを見回しながら歩いている人を見つけた。

坂田だ。

「坂田さん、何をしてるの？」

坂田はこつつかに向いて小百合に気付くと、嫌そうな顔を微塵も隠さずに向き直つた。

本当に、何なのだらうか。この女は。

「……椿さんじゃ、どうしたの？ いつもこの時間はとっくに帰つてるはずじやない」

敵対してるとなんとなく分かる。

周りの女のよう黙つて、妬ましいことでも思つていれば良いのに。
なんでこの女はこつも刃向かつて来るのだらうか。

「私はね、大和くんを探してるの。それで坂田さんは？」

「私は新見を。……見つからないからもう帰つつかな」

避けられてゐる氣がする。明らかに今すぐ此處から離れたいと、目

が言つてゐる。

「坂田さんはや、大和くんと仲が良いんだよね？」

「そうだけど、何か？」

「好き？」

坂田がたじろくのが分かる。

ねえ、好き？私は好き。でも、あなたは？あなたはどう思つてゐるの？

「……分からぬ」

坂田が俯く。

分からない、という事は好きじゃないっていう事？

恋は好きか、そうではないか。分からないなんて、そんな選択肢は無い。

「じゃあ、大和くんにもう近づかないでくれる？」

「それは無理」

即答してきた坂田を見る。

大人しくしていれば良いのに。なんていつも、いつも……。

「私と大和は友達よ。近付くな、なんて聞くと思つた？」

嘲笑うかのように見てくる。腹立たしい、その態度は何？
今まで野放しにしていたのは、間違つていたみたい。

「… そう。なら私、悪い事しちゃうかもね」

小百合は笑った。いつもの笑顔ではない、また違う笑顔。
小百合はそのままヒターンして、坂田から離れて行った。
これから面白くなりそう……。
小百合はまた笑った。

綻びが広がるのを知らずに。

「それを聞いてお前、どうするんだ？」

新見の問いに答えは返さず、大和は逆に訊ねた。そうだとしたら、そうでなかつたとしたら、自分の答えを受け、お前はどうするつもりなのだと。

新見はびくりと眉を動かし、低く言った。

「先輩には、関係ないと想いますけど」

大和は嘲った。馬鹿を、言うなよ。大和のその変わりように新見は目を見開いた。まるで、百獣の王を前にした仔兔の気分だつた。

「関係ない？ そんなわけないだろう。だつてお前、俺を巻き込んでるじゃないか」

あいつらと、同じだな。声に出さず、唇だけを動かしてそつまつ。すると、それを読み取れたらしい新見が顔を真っ赤にした。

なんとなく、読めた。新見があなことを訊いた時点でもう当た

りはついていたが、これで確信した。

新見はあいつらを良く思っていないくて、あいつらをどうにかして
くて、自分を巻き込みたいのだ。

馬鹿馬鹿しい。学校を救うつもりか。それとも、復讐でもしてみ
せるつもりか？

「主人公氣取るなよ」
ヒーロー

半分本気。半分冗談。大和はわざと新見を興奮させるような言葉
を選んだ。すると、とうとう抑えが利かなくなつたのか、新見が大
和に掴みかかつた。

その瞬間、

「てめえ！ 部長に何してんだッ！！！」
「ッ、……！」

響き渡つた怒声。そして襲い来る衝撃。新見は思わず呻き声を漏
らしてしまつた。

新見を殴り飛ばした者の正体は青山だ。
今は新見を殴つたときは打つて変わつて、心配そうに大和にま
とわりついている。
大和は苦笑して青山を宥めた。

「青山、大丈夫だから」

「……でも、つて、あ？」

大丈夫と言わわれても納得が出来ないらしい。主人を守る番犬ながら新見を威嚇している。と、不意に何かに気付いたらしく、間抜けな顔をした。

「…………」

「新見？」

「知り合いか？」

戸惑いながらも青山は頷く。なんでも、新見は青山のクラスメイトなのだという。

「はい。最近は全然学校来てなかつたんスけど……」

「小百合ちゃん親衛隊つていう、くだらないもんのせいでな

割り込んだ声。大和はゆっくりと振り向いた。

調理室の出入り口に立っていたのは、いつものおちやらけた雰囲気を脱ぎ捨ててきた、夏輝だった。

「…………」

新見は俯いていて、その表情は窺えなかつた。

「つまり、新見はパソコン部の部員で、小百合ちゃん親衛隊……とかつていう奴に襲われて今まで不登校だつたんだな」

「…………」

「…………ま、 そうなるね」

大和がそう訊ねると夏輝は首肯した。

座っている椅子の足の温度のなさに思わずビクリとした。

「…………隨分と、 非道なことをやつてのけるのだな、 と大和は心底新見を哀れんだ。 いつたい何をされたのか。」

「…………リンチ？」

青山が顔を歪めて問う。 大和は一瞬、 自分の心の内を口に出してしまったのかと思った。

苦々しい面持ちで夏輝が頷く。

「聞くところによると。 あたしも、 詳しくは知らないんだけどさ」

大和は興味が失せたように新見から視線を外した。 窓の向こうで

は小さな雲が忙しそうに流れしていく。あ、飛行機雲だ。
新見は大和を睨み付けるように見た。

「……もつ、良いですか？」

「新見？」

夏輝が訝しげに新見の顔を窺う。青山は新見の声に含まれた軽蔑のような感情を察したのか少しだけ身構えた。大和は尚も空を見つめ続けていた。

「俺の味方じやないなら、もう広崎先輩に用は、」

「さつきから思つてたんだけど、」

306

新見の言葉を遮り、大和はなんでもないようなことを告げるようにな、軽い口調で言った。やつと、大和は新見を見据えた。

「敵とか、味方とか、なに？」

「なに、つて……」

新見は言い淀んだ。

「一人で立ち向かおうとも思わないんだな。ゲームによく出でくる三下の悪役みたい」

「ツ……………！」

新見は顔を怒りの色に染め上げると机を思いきり蹴つて調理室を出ていった。図星か。そういうところが三下なんだ。

「…………部長、なんか今日辛辣ツスね」

「…………少年、どうしたー？」

青山と夏輝が顔をひきつらせて大和を見ている。大和は新見が出ていったほうを暫く見つめていたが、すぐに視線を戻してにつこりとした。

「ああいうの、嫌いなんだ」

輝かしい表情とは裏腹に、声色に温度は無かつた。

39 調理部男子（後書き）

大和を黒から白に戻せない。

結局、新見は見つからなかつた。後で聞いたところによると、調理室にいたらしい。あ、そこは忘れてた。

「今日からテスト一週間前だからなーーちゃんと勉強しろよーー。」

園下の忠告が喚き声や騒ぐ声に消えていった。相変わらず可哀相な教師だ。

そういうえば最近忙しくて、勉強が疎かになつてている。自分も人事じやないなと美穂は思った。

園下が出ていくと生徒の時間になる。生徒の時間になれば椿は人気者になる。

だけど今日は椿がちょっとおかしい。

ずっと何かを考えるかのように、ぼんやりとしているのだ。もしかしたら昨日もこんな感じだつたかもしれない。

美穂は特に気にもせず、次の授業の準備をする。確かに次は理科、音波先生の授業だつたはずだ。

今日は教室での授業なので、美穂は教科書とノートを机の上に出すと、テキストを出して勉強を始めた。

.....

「えーっと、今日はここまで。ちゃんと復習して来て下さいねー」

音波先生の声に続く「う」と「い」との声が聞こえ、授業が終わる。今日は要注意の部分が多くかった。

さて、どうしようか。

次の授業は数学。当たり前だが移動する必要など、何一つない。とりあえずテキストを開く。テストで悪い点を取つたら洒落にならない。

「坂田ー夏輝が呼んでるぞー。」

「夏輝？……ああ、部長か。ありがと」

普段夏輝、とは呼ばないからすぐには反応できなかつた。
それにしても何の用だらう。部長がこの教室に訪ねて来るのは、これが初めてだ。

「あ、副部長はつけーん」

「部長が呼んだんだから、当たり前でしょう。それで、何ですか」

「ああ、そうそう。……最近、少年は具合でも悪いのか？」

「少年って誰ですか」

「広崎大和だよ」

部長、何で名前で呼ばないんですか。そんなツッコミを心の中にしまい込み、話を聞くことにした。

「最近、日増しに怖くなつてきてるんだよ。あたしの扱いとか」

「それは部長に非があつたのです?」

「……副部長も酷い」

ボルテージが段々と下がっていく部長。よし、良いぞ。そのまま普通のテンションよりも下がってしまえ。

しかしそんな期待とは裏腹に、「そうこえは……」と部長のテンションは少しずつ上昇して戻った。

辺りをキョロキョロと見回すといつ不審な行動をし始める部長。帰つても良いだらうか。

部長は私を引っ張つて廊下に出た。この時期になつてくると、廊下もひんやりしてきて寒い。早めに話を終わらせたいものだ。

「どうしたんですか」

「あの女のこと、探つてるんだろー?」

あの女が椿と認識してから、何で知つてゐんだひつと思つた。でも会長なら知つてるな。会長から聞いた情報か。

「やうですけど、それが何か」

「副部長、知つてる?」

「知らない」

「わー、お馴染みなネター。つてやうじやなくて」

「ホン、と咳をつく部長。恐らく気合この入れ直しだと思われる。

「あの女と特に親しい連中……、生徒会とかだな。そいつらの椿が好きな理由、何だと思つ?」

「えつ、……可愛いから、とか?」

「ブッブー、副部長ハズレー」

あ、今ちょうどイライラときたかも。

「じゃあ何なんですか」

「優しいから。自分の話を、悩みを聞いてくれるから。みんな口を揃えてやつ言ひひひこ」

「不思議だよな」とさやくよつてぱへ部長。いくらなんでもそんなに綺麗に揃つものだらうか。

「じゃつ、これだけだから。…………あ

「どうしたんですか」

別れを告げ、離れた距離を白紙にするかのように歩いてきた部長。何かあったのだろうか。

「……理科の教科書、貸してくれる?」

美穂は無言で教室に戻ると教科書を取り、部長に渡した。

部長は「ありがとー」と言つて、自分の教室に帰つて行つた。園下と同じ様に、部長も相変わらずだ。

美穂は溜息をついてから、教室に入つて行つた。

大和は今、無心でボウルの中の生クリームをかき混ぜていた。いつもは楽しい菓子作りも、大和にとつては少し煩わしい。だけど、そんなことを感じたくなかつた。大和にとつて、菓子作りとは生き甲斐のようなものだから。

故に心を無にするのだ。煩わしいなんて思わないよう、楽しいなんて思えないよ。

「……広崎一、混ぜすぎだ」

「……あれ……」

一階堂の声に我に返り、手元を見てみると、生クリームは溢れかえっていた。ぶくぶくに膨らんで、此方を見上げる生クリーム。もう少しで零れてしまうところだった。

困った末、大和はそのままロールケーキの飾り付けに入ることにした。それ以外、どうしようもない。

青山たちは大和の言葉に素直に従いながらも、心配そうに何度も大和を見ていた。

「……どうするかねえ」

正直、一階堂は焦っていた。

あの時、大和に言った言葉は全て本心からのものだ。偽りを申したつもりはない。

心配だけど、面倒臭い。面倒臭いけど、心配。だから一階堂は言ったのだ。

“どうにもこうにもならなくなつたら、なんでも良いな”

これは、紛れもない一階堂の本心であつて、可愛い教え子が変に背負い込まないようになると、敢えて軽く吐き出した優しさからのものだつた。あれは可笑しなところで真面目で、抱えるから。

それが却つて一階堂の行動を抑えつけることにならうとは、いつたい誰が予想出来ただろう。

一階堂が思つたよりも、大和は頑固だつたのだ。あれは、自分に何かを打ち明ける気など更々ない。一階堂はそう確信していた。

じつは、一階堂が思つたとおりだけ、本当に頑なだから困つてしまつ。じつは、いつもの無駄に素直な性分を發揮してほしいところだといつのに。

「部長ー、鼻の頭にクリーミツりますよー」

「ええっ、何処だ？」

「鼻の頭だつて言ってんぢやないスか」

けらけらと陽気に笑つて、無邪気に戯れる子供たちを見つめながら「階堂は思った。

きっと近いうち、大和には“限界”が来る。

そうして大和は、勝手に抱え込んで、勝手に追い詰められて、勝手に壊れていくのだろう。

それでも、二階堂は何も出来なかつた。大和が、助けを求めるまで、自分は動けない。

二階堂は大和の輝く笑顔を目に焼き付けてから、祈るような気持ちで視界を閉じた。

「多分、」

口に出しかけた言葉を無理矢理引っ込めた。聞かれて困ることではないが、快いものでもない。

大和の声を拾い上げ、此方を向いた少女に首を横に振つた。きっと、彼女は大和が何を言おうとしたかなどと察していたのだろう。それでも彼女は微笑み、口を閉ざした。

多分、内心で呟く。

(わかつていたのだらうな)

何がつて、全部、全部。

周りの感情も、誰が動いて、何が歪められてしまつのか。だから、自分だけはせめて歪んでしまわないように守るうつと思つたのに、結局一番歪んでしまつたのは自分だった。

「多分、わかつていたんだ」

「……何を？」

今度は口に出してしまつた。少女は微笑んだまま首を傾げた。もう誤魔化しも効かない。大和は觀念して口を開いた。

「お前が何をしようとしていて、俺はどうなつてしまふのか」

その言葉に、小百合は笑みを深めた。

小百合が現れたことで世界が歪んでしまつたのではない。小百合自体が“歪み”そのものなのだ。

そして、歪みに愛されてしまった大和は、ダイレクトにその影響を受けた。

歪みはゆつくりと、しかし確實に世界を侵食し、世界の崩壊を余儀無くされる重大な“バグ”がいくつも発現した。

向けられるはずだつた好意は嫌悪と無関心に変わつた。向けられるはずだつた純粹な好意は醜くひび割れたものに変わつた。シナリ

才通りに動くはずのキャラクターは、自我を持った。

「大和くんって、お馬鹿っぽく見えてすつゝじく頭が良いよね。わたし、そういう人大好き」

「そう、ありがとうな」

嬉しくないけど。心中で呟く。きっとその声は聞こえていた。それでも小百合は笑う。美しく、艶やかに笑い続ける。

「大和くんって、頭が良いものね。賢いものね。だからわかるよね」

小百合は頬を染め、きやらきやらと笑つて大和に抱きついた。大和は抵抗する気力すら起きなかつた。

わかつてゐる。わかつてゐる。ああ、だからこそ、どうして俺なんだ。

「大和くん、わたしを愛してね」

大和の思考は暗闇の中に閉ざされた。もう、なんにもわからない。

「……うん」

光を失つた、操り人形のような目が、其処にはあつた。
暗い、空洞を映しているような、不気味な目だつた。

「ばつかみたい」

小百合は知っていた。

脇役とヒロインが結ばれることなど、決して有り得ないことを。

小百合は知っていた。

この世界は自分が原因で、とうに歪んでしまっているのだということを。

小百合は知っていた。

あの男は自分の付け入る隙を作ってくれるような生易しい者ではないことを。

小百合は知っていた。

あの男は自分などに欺かれるほど愚かしくはないことを。

小百合は知っていた。

大きな大きな歪みの前では、小さな歪みなど取るに足らないことだということを。

小百合は、気付いていた。

「ばつかみたい」

自分を“最強”にしたことが、あの男の最大の落ち度であり、唯

ーの欠点だとこいつ」。

「馬鹿ねえ」

小百合は笑つた。

小百合が大和の姿を探していると、坂田がいた。坂田は忙しそうに誰かを探していたようだが、小百合はそれに構わず坂田に声をかけた。

「ねえ、坂田さん」

「……なに」

あからさまに嫌そうな表情。でも、もうそんなのどうだって良い。小百合は悲しそうな、辛そうな暗い表情をしてみせた。坂田は慌ててこるよつて、困惑の声が聞こえる。

「あのね、坂田さん。この間は酷こじを盡つていぬるなー」
「へ、うふ……」

坂田はポカーンと口を開けて小百合を見つめ続けている。背筋が凍りつくほどに美しい小百合だ。男だらうと女だらうと、上手く媚びてみせれば誰だって誤魔化されてしまう。

「ね、もうあんなことは言わないわ。近付くななんて、酷いよね」

小百合の真意を計りきれない坂田は田を白黒させていた。小百合は笑う。

「だけどね、」

「…………、」

「その代わり、大和くん、ちよつだいね」

坂田が田を見開く。小百合は踊るように軽やかな足取りで素早く駆けていった。向かうは愛しいあなたのもと。

ねえ、そうよ。囁いても返らないなら、奪い取ってしまえば良いじゃない。

だから、ねえ、大和くん。

「わたしを、愛してね」

聞こえた心の悲鳴なんて、知らんぷり。

わたしはね、最強なの。だって、そういう“設定”なんだもの。

人の心を操りてしまふなんて、簡単なことよ。

朝、登校途中に空を見た。清々しい快晴で、心が洗われるようだつた。
でも、いつの間にか、それは曇り空に変わつていた。

「ねえ、坂田さん」

「……なこ」

また、来た。何でいつも来るのだ？ 私は貴女とは話したくない
のに。
しかし椿の表情は、私が間近で見た中で、一番美しく、一番不気味
にも見えるものだった。

「あのね、坂田さん。この間は酷こじを言つて『めんなさこ』

「へ、うん……」

「ね、もつあんなことは言わないわ。近付くななんて、酷いよね」

この人、誰？
思わずそう思つてしまつた。

昨日まで私が敵対してきた、彼女は何処に行つたの？ 彼女は何を考
えているの？ 急に椿という存在が分からなくなる。
何だらう、この気分。酷く混乱する。潰されてしまいそう。気持ち

悪い。

「だけどね、」

椿の言葉が止まり、美穂は椿を見る。

「その代わり、大和くん、ちょうどだいね」

一瞬で美穂は動けなくなつた。

そんな美穂と正反対に、椿は何処かへ駆けて行つた。

前よりも椿の印象は格段と良くなつた。だけど、美穂には亀裂が更に入つたような気がした。

しばらくしてから、パリンと何かが割れるような音を、美穂は聞いた気がした。

発生源は一人の、大事な人。

……

放課後、大和のいる教室。

今大和と喋つてる、はず。

既にいつものメンバーとなつた、大和、宮城、それと私。だけど何故だろう。大和と喋つていてる気がしない。

宮城も何か気づいているのかもしね。一緒に喋つていてるが不安そうな表情をしている。

前に、大和が遠くなつたと感じた。でも今はもっと遠く。もう、戻

れないような、凄く遠い距離。

目の前の人には誰だろう。

大和のカタチをしている、この人は誰だろう。いつものあの笑顔で、こっちに笑いかけてくる人は、誰だろう。急に寂しくなった。

椿が来た。

大和は同じ様に喋っている。当たり前のようになに喋っている。……前はどうだった？

本多が来た。

大和に閉め出された。でも、鍵をかけなかつたせいでもう一度開けられた。大和がまた閉めた。

……前もこうだった？

違う。知らない。こんな人、私は知らない。私の知ってる大和じゃない。

誰。誰よ、誰よ。この人は誰なのよ。

私の知ってる大和は優しくて、頼もしくて、友達想いで、素直で、ちょっぴり頑固。

ねえ、大和。覚えてる？最初に会つたときのこと。私ははつきりと覚えてるよ。

ねえ、大和。そこにいるんでしょう？遠く感じるけど、分かるよ。いるんだよね、そこに。

ねえ、大和。何で頼つてくれないの？私たち、友達でしょうか？……何で、なの？
ねえ、大和。

好きだよ。

ねえ、どうして遠くなっちゃったの？私、友達だよ。大和がいなくなっちゃうなら、私が探すよ。
置いて行くなんて、許さないから。

美穂は教室から走って出た。今にも涙が零れそうだ。
美穂はあまり人に涙を見せない。プライド、なのだろうか。見られたくないのだ。

気付いたら屋上に行ける扉の前にいた。
鍵を持っていないから屋上には入れない。美穂は壁に背を預け、そのまま座り込んだ。
そして、泣いた。

「ごめん……ごめんね……」

結局、気付いてあげられなかつた。結局、私は無力。
いつだつて、そう。私は、何かを守ろうとして、いつも守れてない。
逆にすり抜けて、悪化していく。
何でだろう。

「誰か…、助けてよ…」

自然と、助けを求めていた。

当たり前は、特別なこと。同じ日は一度と来ない。

4.2 パソコン部女子（後書き）

じぱりへりがなになるためペースが遅れる可能性があります。
2月の……前半くらいまでかと。そこまで続くかは分からないです
けど。

もうこれ以上は耐えられないと言つた様子で、美穂は教室から出ていった。

小百合は笑顔で小首を傾げている。富城は美穂を追い掛けようとしたが、躊躇い、結局美穂の背を見送るだけだった。大和は、笑っている。

「つ大和！ 追い掛けねえで良いのかよ！」

「一体、何があつたのだ？」

教室から出る際に美穂にぶつかられた本多が不可解だと顔を歪めながら大和を見た。小百合は大和の首にするりと腕を回し、抱きついた。

「どうしたんだろうね。わたし、坂田さんのこと心配だなあ

「大丈夫だよ、美穂は小百合と違つて強いから」

大和は小百合の髪をなせた。富城と本多は愕然とした顔をしている。

誰だ、こいつは。

「や、大和……？」

「……広崎、お前、様子が可笑しいぞ。どうした」「可笑しい？ そんなことを言つてお前のほうが可笑しい」

大和は尚も笑い続ける。にこにこ、にこにこと。宮城が小百合を睨み付け、怒鳴った。己の激情に従い、宮城は小百合に掴みかかった。

宮城は、一瞬で悟ったのだ。こいつのせいだ、と。
こいつが大和に何かをしたせいで、大和はきっと可笑しくなってしまったのだ。

それは決め付けで、愚かしい直信で、答えた。

周囲にいるクラスメイトたちに動搖が走る。もしかしたら、誰か、先生を呼ぶかもしれません。

「つお前ええ！ 大和に何したんだよ！！」

「つ、あ！」

小百合は小さく悲鳴をあげ、痛みに顔を歪めた。瞬間、言い知れぬ殺意が大和を襲つた。

誰かが思わず、といったふうに声を漏らした。

「え、」

ばき、だなんて、そんな音が鳴つたと思つ。瞬きを一度して、また目を開いたときには宮城は机や椅子を巻き込み、床に伏していた。そして、拳に僅かな血化粧を施し、立ち尽くす大和。本多は、背に何か冷たいものが滑り落ちる感覚を覚えた。

クラスメイトたちは唖然として、皆同様に口をポカンと開けて大和たちを凝視している。

皆の視線を受けながら、大和はまた笑つた。小百合を優しく抱き寄せ、耳元で囁く。大丈夫か、と。

「お前、滅多なことを言つくなよ。殺すぞ」

心の籠らない、冷たい声。怒りや憎しみにまみれたものをぶつけられたほうが、どれだけマシだったろうと宮城は思った。

「ツな、にを言つている広崎！ 正気になれ！」
「俺は正気だよ。お前らが、可笑しくなつてゐるんだ」

「こんなに可愛い小百合に、どうしてそんな酷いことを言つんだ。可哀想、可哀想、可哀想に。かわいそう、にい。

大和の言葉は、小百合の信者たち以上に要領を得なかつた。本多が何を言つても、弱い小百合に、可愛い小百合にそんな酷いことを言つなど、聞く耳を持たないのである。

何があつたのか本多にはわからなかつたが、これは生徒会共以上に重症だ。何か、呪いにでもかかつてしまつたよう。

「大和くん、お友達にそんな酷いことしちゃ駄目だよ」

「うん、そつか。そうだよな。小百合は優しいな。俺、間違つてた? ごめん」

「うん、わたしのために怒ってくれたんだもんね。わたし、嬉しいよ」

小百合は頬を染めて、大和の腕に自分の腕を絡ませてぎゅうと抱き締めた。甘い甘い、大和の香りがする。

宮城はそれを呆然と見つめている。顔色は、悪い。

「し、つまづいた」

ぼそり、と宮城が口を開いて言つた。大和は宮城を見下ろした。

「ツ失望したよ!!」

「…………」

「おっ、俺! お前がそんな奴だなんて思わなかつた!」

宮城の叫びに、大和の瞳が僅かに揺れた。だけど、甘い香り。自分のじゃない甘い香り。ああ、良い匂い。ずっと浸つていて。何も、考えられない。

宮城は何も言わない大和を見て、スッと顔から表情を落とした。

失望や絶望や悲しみが入り交じった、なんとも言えない“無”の表情だった。

宮城はゆっくりと立ち上がり、教室を出ていった。本多は痛ましげに眉を寄せ、大和の横っ面を殴り付けた。小百合が声にならない悲鳴をあげる。

「正直、俺もお前にはがっかりだ」

静かに、ただそれだけを言い捨てて、本多は大和に背を向けた。

静まり返った空気。クラスメイトたちは気まずげな顔をして自分の席に戻つた。中には、教室から出ていく者もいる。この惨状を、教師にでも伝えに行くのだろうか。

(て、…)

「たす、けてえ……」

大和の消え入りそうな悲鳴を聞き取れたのは、小百合だけだった。

この日を境に、校内の分裂は加速し、女子と男子の対立が日に見えて明らかになった。

中立に留まっていた大和の存在が消えたことで、男女共に抑止する存在はいなくなり、至るところで反発しあう男女の姿を見るよう

になる。

学校の崩壊の、始まりである。

43 調理部男子（後書き）

段々盛り上がり参りました。

小百合は今、有頂天だった。

無理矢理とはいえ、愛しい男の心を手に入れたのだ。小百合が浮わつくのも仕方がないだろう。

(大和くんが、悪いんだもん)

小百合は心中でそつと呟いた。

自分の言葉に素直に従わないから。自分を素直に愛さないから。だから、こんなことになった。

今、大和の瞳には小百合一人だけが映っている。なんて、なんて幸せなんだろう。本多は愚か、宮城も、坂田すら大和の心の内にその影は欠片も残つておらず、ただ、鮮やかに小百合の姿だけが焼き付いている。

坂田たちはそれになんとなく勘づいているのか、時折不安そうな表情を覗かせた。だけど、あげない。渡さない。やつと手に入れたんだもの。一生逃がさない。

不意に、坂田が俯き、教室から出でていった。きっと、耐えきれなかつたのだ。小百合は、坂田の気持ちに気付いていた。だからこそ、

引き留めるなんてしてやらない。

大和は笑いながら、じつと坂田の背を見つめていた。小百合はその瞳の奥に宿る切なさに気が付いてしまった。

「つ大和！ 追い掛けねえで良いのかよ！」

宮城の言葉に、大和の心が僅かに揺れ動いたのに小百合は感じ取った。咄嗟に小百合は大和の首に腕を回して目を合わせた。

「どうしたんだろうね。わたし、坂田さんのこと心配だなあ」「大丈夫だよ、美穂は小百合と違つて強いから」

笑いながら、それでも心配そうな顔を作ると、大和は労るように笑い、小百合に触れた。それを宮城たちが信じられないと見つめている。

暫くして、宮城が小百合に掴みかかった。予想外の出来事に焦りを感じたが、そんなものはすぐに大和が解消してくれた。

ばき、なんて。それはきっと正義の音。正しき者の鉄槌が、悪に下る音。小百合はうつそりと微笑んだ。

口端から血を滴らせ、大和を見上げる宮城。その無様な姿は小百合の中の何かを満たした。

「ツな、にを言つている広崎！ 正気になれ！」

変わり果てた大和に本多が悲痛な響きで訴える。でも、届かない。届かない。届かないの。だあれの声も届かないのよ。唯一届くのは、わたしの声だけ。大和くんは、今はわたしだけを愛しているんだもの。

理解が出来ない、と本多は獰猛な獣のようにぎらついた目で小百合を睨んだ。

それを全く意に介さず、小百合は大和と甘い言葉を交わし合つた。そうして、自分の香りを擦り付けるように、身体を擦り寄せた。

富城はそれを呆然と見つめている。小さく、呟く。

「し、つぼうした」

その言葉を皮切りに、今まで溜め込んでいた小百合への鬱憤をも吐き出すように、全てを大和にぶつけた。

大和は微かに眉を寄せ、それを受け止めている。

駄目。小百合はきゅ、と大和の裾を握った。光が宿り始めた大和の瞳が、また陰りを見せた。

ねえ、この世界は甘い。甘い。あまいのよ。ずつと此処にいれば良い。苦しいことなんて、辛いことなんて何もないこの世界で。楽しいことだって、何一つないけれど。

富城は教室を出て、それに続く廊下に本多も背を向けた。残された静寂が、痛い。

大和の目許から、滑り落ちた一粒の雪。

「たす、けてえ……」

小さな小さな、大和の助けを求める叫び。その声を誰にも聞かせないようにして、小百合は大和を抱き締めた。

……天女の話を、知っているだろうか。

水浴びをしに舞い降りた美しい天女に、ある一人の男が心奪われ、羽衣を奪ってしまう話だ。

男は天女を捕らえ、束の間の幸せを得るが、最後には天女に羽衣を奪い返され天へと帰つていつてしまう。

あの男は馬鹿だと、小百合は思つ。

真に愛しているのならば、真に欲したのであれば、羽衣は隠しておくべきでは無かつた。目の前で、焼き捨ててしまつべきだったのだ。

そうして天女を絶望の淵に叩き落としてしまえば、そうすればきっと失わなかつた。

男は、小百合だ。天女は大和。

自分は、あの愚かな男のような間違いはしない。大和の目の前で、大和の絆を焼き捨ててしまおう。天に昇つていこうなんて考えさえ起きぬほどにボロボロにしてしまおう。

何処かの誰かが言つていた。愛は、神聖なる狂氣だ。この“神聖

なる狂氣”の前では、全ての行いが赦されるのだ。

小百合は、間違わない。

あの男のように、美しい天の御遣いを失つたりはしない。羽衣は焼き捨てた。次は、大和だ。大和の心を、殺そう。もう一度と戾らぬよう、壊してしまえ。

獲物を捕食する蜘蛛のように、糸で絡め取つて繋ぎ止めてしまおう。何処にも行かせない。飼い殺してやるのだ。

小百合は大和の瞳を覗き込んで、ため息を吐いた。輝きのない暗い大和の瞳が、少しだけ悲しかった。

美しい輝きを持った宝石を曇らせ、悦楽に浸っていたのは他の誰でもない、小百合自身だったというのに。

椿 小百合視点 12（後書き）

いつのまにやら総合アクセス数が四万を越えとりました。いやあ、びっくり。

これも皆様のおかげです。有難う御座います。

美穂はあれ以来、部活に顔を出さなくなつてた。それどころか学校にも来なくなつた。その理由を部員達には、分かつていて。だからこそ、美穂の所に部員達は行けなかつた。それだけ大和と美穂が仲が良いといつのは有名だつたのだ。

それから三日ほど経つた日。美穂は学校に来た。あの時のような死んだ日ではない。ただ、いつものような日でもない。

暗い目、でもその中には薄いが確かに明かりも見えた。

だが、学校に来て、美穂は明らかに孤立していた。皆がそうしたのではない。美穂自身が誰とも話さなくなつた。まるで最初から喋れない障害者の様だつた。人から呼ばれれば拒否。何かを頼まなければ黙つて頷く。

前の強気な、明るい美穂からは想像出来ない、変わり果てた姿、正しく生きる屍だつた。

部活にも美穂は顔を出すようになつた。しかし、無言。お騒がせで陽気な町谷でも流石に声をかけることが出来なかつた。故に杯田が切り盛りし、夏輝も顔を出すことが多くなつた。

「副部長……、大丈夫かー？」

夏輝だけは根気よく話しつづけた。内容は同じ。でも、美穂は頷くだけで話さなかつた。

美穂が学校に来はじめて更に一日。美穂は宮城、本多、夏輝、菖蒲

に呼び出された。場所はパソコン室。部員達には「休み」と言い、夏輝が強引に帰した。

「なあ、美穂。本当に大丈夫なのか」

「大丈夫な訳なかろうー。第一、坂田は変わりすぎだー。」

「ね、お願い、話して。そしたらきっと楽になるよ……？」

「……副部長、何か知ってるんだるー？」

いつもと変わらない声で、変わらない調子で夏輝は言った。皆が夏輝を見、驚いていた。何より驚いていたのは美穂だった。

「だつて勉強しないでいつも少年の様子見に行つてるじゃないかー。……あの女といふタイミングを狙つて」

美穂は目を丸くした。どうして知つてる、という目で。

実は夏輝は部活で話しても無反応の美穂を心配して、今日は朝早くから来て美穂の様子を見ていた。それで昼休み、気付いたのだ。美穂の行動にパターンには必ず椿が関わることを、そして目の明かりが強さを増したことを。

「あの女が移動したら、副部長も移動した。きっと、一人を観察してたんだろー？」

「…………そりや驚く」

今度は四人が目を丸くした。今まで喋つてくれなかつたのだ。いきなり喋つたら、そりや驚く。

「なんでだ？もう大和は大和じゃないんだぞ……！」

「そうだぞ！何で構うんだ！」

「何かあつたの？」

大和ではないとはどうこう事か。それはこの部屋にいる誰もが分かっていた。大和の態度は、まるで悪魔に魅入られたかのようだからだ。二人は静かになった。

「美穂が出て行つた後、俺がその……、いろいろあつて、小百合に掴み掛かつたんだよ」

「その後に広崎が、小百合を庇つように富城を殴つたのだ……あれには驚かされたぞ」

「…………で？」

「で？」

美穂に質問のよつなもので返される。富城と本多は顔を見合せた。

「富城達はどう思つてるのよ」

「それは……」

「大和はそんなことを、友達にするよつ性格じゃない。分かつてるでしょ？…………本当の、大和は？」「

「副部長……」

美穂はそのままパソコン室を出た。

意味深な言葉を、四人に残して。

……

部長が美穂の行動に気付いたように、美穂も大和の事に気付いていた。

いつものあの笑顔を椿に向ける。でも、何だか懶ららしい。変な笑顔。

椿を壊れ物の様に扱う、あの態度、あの言動。力ク力ク。読み込みが遅くて、止まつてばっかしの動画みたい。

ナニコレ？

笑いそうになつた。大和の動きではない。椿の事を、だ。
あの、幸せそうな顔。

笑い飛ばしたい。どうしてそんな顔が出来る？本当に幸せ？悲鳴をあげているのに？笑顔なのに、悲しそうな表情が垣間見える。大和の目が暗い。本当に愛されているとでも思つてているのか。

「ハリボテのくせに……」

その言葉は明らかに変だつた。でも、美穂は不思議とそれに違和感を持たなかつた。

心をも支配する。それ、どこの怪獣モンスター？そんな事は、貴女には出来な

い。だつて、その証拠に全てを掌握出来ていかないじゃない。大和が、

悲しそう。苦しそう。

私を、^{デリート}抹殺^{マリオネット}出来る？動き出した不定要素を、止められる？

…可哀相な操り人形、私が助けてあげる。

そのためなら、私はどうなつても構わない。

「貴女がこの世界で『最強』なら。私は貴女にとつての『最凶』になるよ」

きっとそうすることで私にはかなりの負担がくるだろう。結構だ。大和が戻つて来たとき、代わりに私は消えよう。自分の存在くらい賭けないと。それくらいの覚悟はないと。美穂は決意を新にし、嬉しそうな椿と悲しそうな大和から離れて行つた。

さて、どこから始めようか。

歯車が一つ壊れ、二つ壊れ。^{シナリオ}脚本は新たな筋書きを書きはじめる……

「可哀想に」

心底哀れむように、慈しむように囁かれた言葉に、大和は顔を上げた。

白、白、白。一面真っ白で、何がなんだかわからない。そんな空間に大和はいた。そして、座り込んでいる大和を見下ろして、立っている男。

光も闇もないこの世界。逆光という言葉を使うのは果たして正しいのだろうか。とにかく男の顔はよく見えなかつた。

「ああ、そう泣くなよ」

男は手を伸ばし、大和の涙を拭つた。温度のない感触を大和はただ受け止めた。男の顔は相も変わらずよくわからなかつたが、なんとなく悲しそうな顔をしているのだろうな、と大和はぼんやり考えた。

これは言い訳だが、と大和からの許しを求めるように、男は口を開いた。

「まさか、此処までやるとは思つていなかつたんだ」

“此処まで”。この男は全て知つてゐるんだろうか。主人公のことも、脇役のこととも、歪みのことも。

ところで、此処はいつたい何処なのだろう。今更ながらに大和は不思議に思つてぐるりと首を回した。

その様子を見ていた男がくつりと笑い、大和に教えた。

「此処は、夢の中。お前の夢の中だ」

「……俺の夢つて、なあんにもないんだ」

「今回は、仕方ない。無理矢理割り込んでしまつたのだから」

それに、今のお前に夢など見れやしないだろ？、と男。髪をすくように撫でられる感触が降つてきた。

温かみのないその手は氣味が悪けれど、我が子を慈しむような手付きを大和は存外気に入つた。ふと頭を撫でられる歳でもないといふことに気付き、暫し羞恥に苛まれたが、その心地良さの前ではそんな些細なものはすぐに搔き消された。

「苦しいね、苦しいなあ」

「、苦……しい……」

ああ、そうだなあ、苦しい。大和の心の悲鳴を代弁するかのように、男は大袈裟に嘆いてみせた。そして、それに同調して大和の忘れかけていた痛みは舞い戻ってきた。

そう、そうだ。足が、痛かった。それで手がずきん、ずきんつて。でも、今は此処が痛い。此処が一番痛い。大和は胸元で拳を握り締めた。痛い、よ。

「大丈夫。あと、もう少しの辛抱だ」

此処で、大和は初めて男の顔を直視した。

整つてはいるのだろう。だが、なんとも言い難い姿形をしていた。整つてはいるということだけはわかる。しかし、それを言葉にしようとしたり、頭に浮かべようとすると途端にその姿は酷く曖昧なものになるのだ。不思議な現象に大和は首を捻った。

もう少しの辛抱。最後にそう言い残すと、男の姿は白い光の中に消え去った。

暫く呆然としていた大和だったが、光を蝕むように迫り来る闇に諦めたように瞼を下ろし、闇を受け入れたのだった。

「大和くんっ、一緒にお昼、食べよう」
「、うん」

小百合と接していくほどに、大和の小百合への嫌悪は薄れ、逆に情のよくなものが沸いてきていた。迷子の子供にすがられたような、なんとも言えない感じ。

自分がけしかいないのでと言われて、今の大和が突き放せるわけがなかつた。

所詮、ヒロインと脇役。勝つのは主要人物だ。

「大和くんと一緒にだから、いつもよりすっごく美味しい！」

小百合はにつこりと可愛らしい笑顔を見せて卵焼きを口に入れた。今、周りの人間たちの目には、大和は優しく微笑みながら小百合を見つめているように映つてことだらう。心の内では全く違うことを考へてゐるのに、そんな外面に一喜一憂する小百合が哀れでならなかつた。

「うん、俺も小百合と一緒にだから、凄く美味しく感じる」

嘘だ。本当は、味もわからない。

どうして、自分のだろう。

前とは違う感情から、大和はそんなことを考えた。

自分よりも良い男はたくさんいるだろうに、どうして自分ののか。

「ねえ、大和くん。好き。好きよ、大好き。わたしから離れないでね」

何も答えず、笑つて抱き締めた。すると、小百合は心底幸せそう

に顔を蕩けさせるのだ。

大和は眉を下げる笑つた。その笑顔だけが、今の大和の本当だつた。

45 調理部男子（後書き）

小百合救済ルートを作るか、それとも完膚なきまでに叩きのめすか
……。

「おーい、美穂ー」

「……お父さん、どうしたの。私、今忙しいんだけど」

「いやー、合氣道の練習相手になつてくれないかなー…、と」

「…………」

テスト勉強中にも関わらず、無神経にもノック無しで部屋に入つて来た私のお父さん。理由など解りきつている。

私のお父さんは多趣味だ。そのくせ、すこしく飽きっぽい。そしていつも、何故か私が巻き込まれる。要するに私にとつて、はた迷惑な存在なのだ。

最近は合氣道にはまつてゐるらしく。これは何口持つのだろうか。

「私、忙しいんだけど…」

「一回だけ！一回だけでも良いからねー…」

「…………」

また始まった。お母さんはどうしてこの人と結婚したのだろう。所謂物好きなのだろうか。

そして気付いたら、いつの間にか引っ張られている私。無駄に力が

あるから、抵抗すると余計疲れる。私は引きずられながらお父さんとリビングに移動。
どうでもいいけど、この人はなんでこんなにも子供っぽいのだろうか。

お父さんはリビングを占領している長机を移動させて、私のほうに向き直つた。ちなみに怪我防止のために、床にはふかふかするマットが敷いてある。動きづらい。

「今日は勝つぞー。」

「はいはー。」

何故か興味があるお父さんは全く合気道が出来ていない。そもそも『勝ちたい』と思こやすくて集中していない。……合気道って勝ち負け関係あるつけ。

「じゅあおおりやああーー。」

「…よひと

「ふぐつ?ー。」

思い切り突進してきたお父さんをギリギリまで引き寄せ、避ける。避け際に右の腕を捻つた。なんで私のほうが上手くなってるの。力抜くの難しいのに。

「へー……。もう一回ー。」

「またあー?」

「お願い、お願い！」

「…………はあ」

溜息を了承と見たのか、再び突撃して来た。美穂はそれを軽く避け、死角である背後に回り込み、肝臓の辺りを叩いた。

お父さんは痛がり、床をゴロゴロとのたうち回った。しばらくして落ち着いたのか、お父さんは床に手を置いて上半身だけ起こした。

「美穂」

「何？今日はもう勉強したいから終わりにしたいんだけど」

「…………大丈夫なのか？」

「何が」

この人はよく主語を忘れて話す。だから無駄な会話が多くなる。正直急い。

「学校。最近塞ぎがちだから」

「…………大丈夫だけど？」

「なら、良いんだけど」

騙しやすい。基本、人が良いお父さんは心配してくれるのだが、嘘を言つても騙されやすい。いつか詐欺に遭いそうだが、今はそれが幸いしたかもしれない。

「なあ、もう少し付き合ってくれないか

「え…、ヤダ」

「母さん！美穂が酷い！」

「残念、出張中です」

「…………うわああああん！」

この人は本当に私の父親なのだろうか。

……

昨日結局付き合わされ、勉強もうくに出来ず、おまけに眠い。本当に迷惑な人だ。

睡魔に打ち勝とうと必死になつていたら、昼休みになつていて。これで眠れる、と肩の力を抜いた。すると睡魔は急に消えていった。
……なんで眠れるときに限つて……。

最凶になる、と言つたものの、方針は特に決めていなかつた。とりあえず弱点でも探るか、と誰も聞き取れないような小声で呟く。
……待て、そもそも椿に弱点なんてあるのだろうか。“最強”的椿に。
……変更。大和を見に行こう。椿が離れている時も、大和に影響はあるのだろうか。

しかし今行つても椿はいるだろう。椿が大和についていけない場所。授業中、それは私も行けないし、行つて変に怪しまれてもな……。
トイレ、いや、入らないだろ。入らないんじやなくて、入れない。

入りたくない。

……部活？

もしかしたら居ないかもしない。でも、居るかもしない。確率は五分五分。後者の方が高いかもしないが、行ってみる価値はあるだろう。

美穂はそこまで纏めると、考え方も無くなり暇になつたので、とりあえず昼ご飯の焼きそばパンを買いに、売店に向かった。

ひび割れた世界。それを修復するかのように、細かい粉が降り始めた。

「あの……、」

気まずげな声色と、控えめに開かれたドア。

その方に目をやり、二階堂は瞠目した。これはまた、随分と珍しい人間が調理室（此処）にやつてきたものだ、と。我が部の部長から度々菓子を惠んでもらっているという話は聞いたことがあるが、此處に来たことは数えるほどしか無かつたはずだ。実際、二階堂が部活中の調理室で彼女を見掛けたのは文化祭前のクッキー作りのときだけだ。

二階堂の視線を追い、青山と松島もその人物を見た。

「……あ、坂田先輩じゃないですかー。どうしたんですー？　また岩クッキー製造しにきたんですかー？」

「それとも今度は俺らを食中毒にする気ッスか？」

「ああ、あんたら本当通常運転」

呆れたように、しかし、安堵したように彼女　美穂は言った。
美穂は二階堂に頭を下げ、調理室に足を踏み入れるなり、辺りを見回す。

その様子を見て、青山と松島は顔を見合させてからそれぞれの作業に戻った。どうやらまた何かを調理していたようだ。

一階堂はふい、と息を吐き出した。

「広崎なら、椿のところだ。……多分な
「……椿、」

出てきた予想通りの言葉に思わず美穂は呟いた。

「広崎、一回ひつひつ来て、もう来ないって言ったんだよ。椿の傍に
いてやるんだってな」

いつもは明るく賑やかな調理室が、嫌に静かだった。美穂は薄々
大和がないということに感付いていたが、やはりそうして事実を
突き付けられると気分は沈むものだ。美穂は顔を僅かに曇らせた。
俯いてしまった美穂に、一階堂は面倒臭そうにまた息を吐いた。

「いつも通り、なんですね」

美穂の言葉に、一階堂は目だけを美穂にやつた。睨み付けている
かのような鋭い目で、美穂は一階堂を見つめている。青山は目を細
めた。松島はちらりと美穂を一瞥し、また作業に戻った。一階堂は、
何も言わない。

「大和がないのに、大和が苦しんでいるのに、いつも通り

一階堂は不愉快そうに顔をしかめ、凄んでみせた。思わずビクリとする美穂。構わず一階堂は口を開いた。

「じゃあ、先生はびづくつや良かつたんだい、坂田サン」

取つて付けたような敬称が一階堂の機嫌の悪さを表している。居心地の悪い沈黙の中、青山たちの作業の音だけが響いていた。

「怒りやあ良かつたんですか。喚きやあ良かつたんですか。悲しんでみせりやあ良かつたんですか」

「、…………」

「“いつも通りじやない”行動を、とれば良かつたんですか？」

出来の悪い生徒に何事かを教える教師のよつた優しい声色だった。しかし、その言葉に含まれた意味はとてもなく冷たく、美穂を貫いた。

「お前だつて、見てただけだろ」

見ていただけ。傍観者の立場にいたのだ。宮城も本多も夏輝も菖蒲も、美穂でさえも、安全な場所でただただ大和たちを見ていただけなのだ。

そして、それは自分も。一階堂は拳を握り締めた。ようやく焦つて動いたときには既に手遅れだつた。大和自身が必死に隠していたということもあるのかもしれないが、それでも気付き、動く機会などいくらでもあった。

遠慮など見せずに、半端な優しさなど見せずに行動していれば、こんなことにはならなかつた。一階堂の美穂への言葉は、自分自身に向けた言葉でもあつた。

「先生、みたらしのたれ、出来ましたよー」

「そうか。じゃあ、団子焼いとけ」「はーい」

松島はここにこと笑いながら一人の間に割り込み、一階堂の指示をあおいだ。青山は両者の会話を聞き、団子を焼く準備を始めた。松島はやはりここにこと笑いながら言った。

「今から後悔したつて、遅いですよー。だって、もう過ぎたことだもん」

正論過ぎるその言葉は美穂に重たくのし掛かつた。松島はそれを意に介さず青山のもとへ行く。青山は美穂を見て口を開いた。

「行動するとかしないとか、どうでも良いじゃないッスか。俺たちは動かなかつた。だから、これからも動かないんス」

青山は頭を伏せ、続けた。

「部長は、俺たちの介入を望んでない。俺たちは何も出来ない」

美穂は黙り込んでしまった。付き合いの長くない青山らでさえ此処までわかるのだ。何年も大和と共に過ごしてきた美穂は、言づまでもないだろう。

大和は、望んでいない。だから気付かないふりをして、冷たく突き放して、小百合の呪縛に一人どっぷりと浸かってしまったのだ。

「……だから、俺たちはいつも通りなんだよ」

一階堂は美穂に背を向け、青山の背後から手元を覗き込んだ。真っ白だつた団子は狐色の焼き色がついていて、美味しそうだ。松島が皿を持ってきた。

「あいつは気にしてほしいことは気にしないくせに、気にしなくて良いことは気にする。もし、俺たちが勝手にばたばたやってたら、広崎は嫌がるだろ」

すぐにでも皿に団子を乗せようとする松島を片手で制し、一階堂は団子をフライパンの上で引っくり返した。両面に焦げをつけるのが、美味しい。濃い琥珀色のたれが輝いている。

「だから、何もしない。いつも通り馬鹿やって、いつも通り菓子でもなんでも作っててやる」

松島はちらりと一階堂を見て、んー、と考え込むよつこ顛に手を当てた。青山がそれを不思議そうに見つめている。

「なんか部長つていつの間にか勝手に問題を解決させてそーー」「あー、わかる。で、ちょっと氣まずそうな顔しながらひょっこり其処から顔出すんだ」

其処、と青山は調理室の出入口を指差した。その様を頭に思い浮かべてしまつたのか、松島は吹き出した。一階堂も肩を揺らしている。

「……そしたら、なんでもないふりして、迎えてやるつな」

一階堂の優しい声に、青山と松島はにっこりと笑顔で答えた。美穂は、大和の断ち切れぬ絆を此処に見た気がした。

47 調理部男子（後書き）

調理部男子つてか調理部顧問。

途中から地の文、団子のことしか語つてない。どうこいつことなの。
いつのまに60話つてどうこいつことなの。馬鹿でしょ。

……そしたら、なんでもないふりして、迎えてやるつむ

昼休み、一階堂の言葉を美穂はすっと考へる。私は、結局何をすれば良いのだろう。やつきから溜息しかついていない。美穂は天井をぼんやりと見つめた。

静かな教室。いつもさやあぎやあと五月蠅かたのが夢のようだ。そんな空間の中、ドンッと何かぶつかる音。そしてプリント類のものが落ちる音がした。

「何するのよー。プリント、散らばりやけだじやないー。」

「うひさいな。ぶつかってきたのはそいつだじやない？」

「何よー。あんたがぶつかってきたんだじよー。」

「変な濡れ衣着せんなー。」

ああ、五月蠅い。だけど少し落ち着く。結局、此処も変わらない。

……ある一点を除けば。

「大体、あんた元々のまよねー椿が来てからもっただけどーー。」

「つなー。彼女を馬鹿にするなら許せないぞー。」

大和がおかしくなりはじめると同時に、この学校も不安定になりはじめた。まるで、骨組みの木が腐りはじめていくようだ。ぐらり、ぐらりと揺れているような感覚。男女の喧嘩なんて一日に十回以上は見られるのではないだろうか。

今のところ、美穂は中立。どちらにも味方しない。見てるだけ。何かしたほうが良いと思つても動けない。美穂が動いても、悪化させてしまうのがオチだ。

……だから、俺たちはいつも通りなんだよ

いつも通りの人達といつも通りではない人達。何だかその差が大きく見えた。

私のいつも通りって、何だう。お父さんが迷惑になつたり、授業を受けたり、部活で後輩に教えたり。…大和たちと喋つたり。いつも通りって、変わつてしまつてこんなに寂しいものなのか。

「私も、“いつも通り”にならないと

不安はあつたが、止まる気にはなれなかつた。

……

「……大和、居る？」

近くにいた女子生徒に話しかける。聞かなくても分かることなのに、私はいつもこうしてた。

「居るけど……、あれだよ？」

それでも行くの、と言いたげな目で見てくる。構わないよ、と軽く返して教室に入った。

行く先には大和。そして、椿。大和にとつての新しいいつも通り。でも私のいつも通りは違う。

大和を見て、後ろの席に宮城が居ないことに気付いた。筆箱はあるから来てはいるようだ。きっと居心地が悪いのだろう。

「大和、今日は何作るの？」

いつも、大和が作ったお菓子を分けてもらつてた。調理室自体にはあまり行かなかつたけど。

「……ごめん、もう行かないんだ」

「ん、そうなの？ 残念」

「用件はそれだけ？」

椿が割り込むような形で話に入つてくる。一人きりの時間を邪魔されるのが嫌なのだろうか。

……椿がこんな子じやなくて、会長みたいな子だったら、私はどうしてただろう。

「あれ、椿もおねだりに來たの」

「つ、違うわよ。私は大和くんと一緒に居たいから來たの！」

もう、さん付けなんて要らない。普通に話す。椿は大和を放すまい

と、ぎゅっと大和を抱きしめた。

「へえ、じゃあ私も此処に居よつかなー」

綺麗な顔を引き攣らせる椿。迷惑なのだらう。……私もお父さんをこんな顔で見てたのかな。

「良いでしょ、最近喋れてなかつたし。一人だと暇だしさ」

椿が何か反論していたが笑つて聞き流した。椿と大和中心になつて話していたが、それでも美穂は楽しく思えた。
大和、迷惑つて思つてないかな。内心、それが今一番美穂にとつて不安だつた。

クラスメートはそんな異色な三人をただ眺めていた。

48 パソコン部女子（後書き）

こいつの間にか挿絵が！…ありがとうございます！

49 調理部男子（前書き）

調理部男子、……の友人

宮城は、猛烈に悩んでいた。眉間に深い皺を刻み、思案げに歪められた顔。瞼は固く閉じられている。

能天気なこの男を此処まで悩ませることが出来る事柄は、たった一つしかない。大和のことだ。

小百合を悪く言い、大和に殴り付けられた宮城。

大和のあんなに冷たい目を見たのは初めてだつた。そして、優しい環境で育つてきた宮城が誰かから心底不必要だというような目で見られたのも初めてであつたし、いつも陽気に笑っていた大和にあんな目が出来るというのも初めて知つた。

最近は、要らない初めてばかりを体験している。

今、思い出しても氣分が悪いと宮城は舌打ちをしてから目を開けた。其処で、宮城はクラスメイトたちが心配そうな目で自分を見ていることに気が付いた。

「宮城くん、大丈夫？」

山岡が苦々しい笑みを浮かべながら訊ねた。宮城も思わず苦笑し、答える。

「ん、大丈夫。それよりもさ、俺よりも山岡さんが大丈夫かよ」

「……大丈夫だよ」

あれほどわかりやすい山岡の視線に、このクラスで気が付いていないのは大和くらいだ。

富城は眉を寄せた。山岡は何も言わず笑い続けている。どうやら答えるつもりはないようだ。

「大和さあ……、変わったよな」

「…………」

山岡の沈黙に肯定の意が含まれていたことなど、誰もが気が付いていた。

ただの大和の気紛れだとしたら、どれほど良かつただろうか。ただの喧嘩なのだったら、どれほど良かつただろうか。

しかし、そんな淡い期待などいっそ清々しいほどに打ち砕かれた。富城を殴ったその後、大和は富城に謝罪をしていた。申し訳無さそうな顔をして、必死に謝つてくれた。

富城は素直に嬉しかった。確かに殴られたことはとても悔しかったし、これほど手酷い裏切りも無からうと憤りを感じていたが、そんなものは大切な友の謝罪一つの前では容易く消し去つてしまえるようなものだつた。

それが、大切な友の“本心”であつた場合なら、という注釈がつく。

「『めんな、友達を殴るなんて、俺、どうかしてた

それだけで良かつたのに、それだけであれば宮城は大和を許せたのに。宮城が笑つて言葉を吐き出すよりも、大和が先に口を開いた。

「小百合に言われたんだ。友達にあんな酷いことをしてしまったんだから、謝りに行かなきゃ駄目だつて」

（ああ……）

悲しみよりも、それよりも先に諦めが心を覆つた。飽くまでも大和は宮城に罪悪感の一つも感じてはおらず、それらの感情は全て小百合に向けられているのだ。

小百合が言うから、小百合が悲しんだから、小百合が駄目って言うから、だから、じめんな。

ふざけんな。

こんなに心の籠つていらない謝罪をされたのは初めてだ。ああ、また“初めて”が増えた。こんなのが要らないのに。

それから後は覚えていない。適当に言葉を告げて、教室を出ていった。あの大和がいる教室から、一刻も早く立ち去りたかった。

自分は、いつたいどうすれば良いのか。頭を抱えた。山岡の気遣わしげな視線が突き刺さる。

宮城は一階堂のように強く優しいわけでも、青山たちのよつに無

償の信頼を寄せられるほど無邪気でも無かつた。あんな目で見られて、それでも信頼を持続させることなど出来やしなかった。

「山岡さん」

「……なこつ？」

「俺、わあ……、びしそうが良こんだらうな」

山岡は宮城の弱々しい声に驚いた。いつもの元気な姿など見る影もない。

「、信じれば良こんだと思つよ」

やつとの想いで山岡はそれだけを吐き出した。宮城は、笑った。何を、と嘲笑した。

「信じれば？　信じて、俺は裏切られたんだよ

怒りか、悲しみか、宮城の声が震えた。椅子を蹴飛ばすよつに立ち上がり、宮城は山岡の肩を掴んだ。その様は行き場のない怒りをぶつけているよつにも、すがつてこるよつにも見えた。

「ツ」これ以上、大和の何を信じてやれば良いんだよー。」

「じゃあ、信じなくて良い

先程とは丸つきり正反対の言葉に、富城は目を見開いた。何を言つているのだろうか。やはり、秀才の言つことは馬鹿な自分にはよく理解出来ない。

「だけど、少しでも広崎くんを信じていた富城くんを、信じてあげて」「は……、なに、それ」

真剣な表情で、山岡はそう言った。

なんだ、それ。思わず乾いた笑いが漏れる。
どちらにせよ、同じことだ。大和をそのまま信じることも、大和を信じた自分を信じることも、大和を信じることに繋がる。つまり、見捨ててやるなど、そう山岡は言いたいのだろう。

馬鹿馬鹿しい。

「わかつたよ」

「富城くん、」

「そうだな、信じてみます。俺、実は人を見る目だけはあるんだよね」

しかし、その言葉をにべもなく撥ね付けてしまえるほど、富城はまだ大和を嫌いになどなれていなかつた。

だけど、もう信じられないから、だから自分を信じていよいよ、人を見る目だけはある自分が、友達になりたいと思つた男。裏切

られたけれど、だけ少しだけ期待を寄せていよう。

自分を、信じているから。

「ねえ、大和くん」
「なんだ？」

人気のない空き教室。其処で、一人の男女が互いの存在を確かめ合つたのようにきつく抱き締めあつていた。

最近、一人でいることが少ない。いつもいつも、気付けば小百合が隣にいる。

そのせいだろうか。だんだんと意識は薄れ、ぼんやりとしたまま誰かに身体を動かされているような、そんな気持ち悪さを感じている。

寝起きの朦朧とする意識。あの状態がずっと続いているのだ。

「わたし……、坂田さんに嫌われているみたいなの。……悲しいなあ……」

大和の思考は再び殺意に埋め尽くされた。

離したくない。絶対に離さない。彼だけが本当にわたしを愛している。彼だけがわたしの全て。

いつの間にか、小百合はそんなふうに思い込んでいた。

今まで愛想笑いくらいは返してやっていた男共には見向きもせず、ただ一心に大和だけを見つめる毎日。悲しみも怒りも苦しみも憎しみもなく、愛だけが小百合の心を優しく包み込む毎日。

それは小百合にとって、他の何を擲つても手放したくないほどに幸せなものだった。

男子たちは自分たちに笑いかけてくれなくなつた小百合に嘆きはすれど、それでも振り向いてもらおうと躍起になり、さらに小百合に執着した。

女子たちはそれを見て、耐えきれぬ負の感情に小百合への嫌悪と憎悪を募らせる。

まさに悪循環だった。

しかし、そんな中でも諦めない人間がいた。それが小百合にとってはとんでもなく邪魔だった。断ち切ろうとも断ち切れない自分以外の大和へと繋がる絆。

大和には自分以外要らない。そう思っているから、大和だけが自身の存在意義に繋がつてしまつているような、そんな小百合だったから。

「……悲しいなあ……」

彼女がそのほの暗い感情のままに大和を操ったのも、半ば必然だつたのである。

「わたし、坂田さん大嫌い」

死んでしまえば、良いのにね。小百合の美しくも残酷なその言葉は、甘く甘く空氣に融けていった。

小百合は“此処”での自分の立ち位置をよくわかつっていた。自分がどうすれば、手駒たちや愛しい人が動いてくれるのかがわかつていた。

「ねえ、大和くん。わたし、大和くんのこと好き。好き。だあいすきよ。愛してるから」

「うん、うん……、俺も小百合のこと好きだよ」

虚ろな瞳で偽りにすがり、求め、囁く。愛しているのだと。ただそれだけを交わしあつて、また相手を引き寄せる。奪わせはしないとでも言つかのように、強く強く。

「あの人、要らないよね」

大和はゆっくりと頷いた。

いつも通りでいたかった。大和に迷惑かもしれないとも考えた。でも、それでも傍に居てあげたかった。

そんなものは、簡単に壊された。

「大和ー……」

大和の教室に行つた。いつも通りをするために。
突然、視界が変わった。

教室の何処かで悲鳴が聞こえた。殴られたと理解するのに、そう時間は要らなかつた。

誰が殴つたのか分からなくて、思考が停止して、美穂は田の前に立つている人を見上げる。

「なん、で…？」

目の前にいるのは大和だった。

大和が、私を殴つた。その事実を認めたくなくて、ただ大和を見つめた。

もう一度殴られる。

普段なら軽く避けられそうな拳。それでも、美穂には避けることが出来なかつた。

「なんで……、なんで……」

何も考えられなくなり、ふと動かした目が椿を捕らえた。
うつすらではあるが、笑っているように見えた。

小百合の影響はこんなにも大きいものなのか。悲しみが一気に込み上がってきた。

大和が腕を振り上げる。

ああ、止まらない。ならいつそのこと、このまままでいいや。美穂は諦めを感じ、目を閉じた。

腕は振るわれなかつた。

「何をやつておるー大和！！」

目を開けると、本多が大和の腕を掴んでいた。
本多を振り払い、もう一度腕を振り上げる大和。目前まで迫った拳を今度こそ美穂は避けた。
大和からの視線が冷たく感じられた。

「小百合を、虐めるなよ。最低だな」

そう言つて、大和は椿を抱き寄せた。今、自分の顔はきっと酷いだろうな、と美穂は思った。泣きたい。声を出して、思いつ切り。でも泣けない。そんな、中途半端とも思える表情だろうかと、勝手に考へる。

すく悲しいのに、頭は不思議と冷静だった。

「……そつか。私は、最低か」

大和もこんな言葉を出せるんだ。でも、私に言つてほしくなかつた。居た堪れなくなり、今すぐ教室から飛び出したくなる。だけどこの

前と違つて、体が動かない。さつきは動かせたのに、まるで凍つた
ように動かせない。その代わり、手が震えていた。力が思うように
入らない。

「大和は、そう思つたんだ」

やつと、手に力が入つた。ゆっくりと、壁に支えられながら立ち上
がる。美穂が思つていたよりもダメージは大きかつた。

「悲しいよ……、大和」

大和はそんな言葉を友達には言わない。分かつてゐるはずなのに、
本氣で言われたと思つてゐる自分がいる。自分がどうしてそう思つ
のか、分からなかつた。冷静なはずなのに。

「好き、だつたのに……」

ボソリと呟いたそれは誰にも聞こえなかつた。
大和を見れば椿と抱き合つてゐる。帰れないの。それとも帰らない
の。

美穂はその様子をぼんやりと眺めていた。

50 パソコン部女子（後書き）

最近日々に馬鹿になつてこく気がする……。

「……、だつたのに……」

小百合を離してしまわぬように、離されてしまわぬようにぎゅうぎゅうに抱き締める。本多の耳障りな怒声が聞こえる。宮城の耳障りな泣きそうな顔が見えた。誰かを殴った拳がじんじんと痛む。でも、小百合は幸せそう。

小百合が幸せならば、それで良い。それで、良いはずだった。だと言つのに、大和の耳は誰かの小さな声を拾い上げた。

「誰、だ……？」

掠れた声で、そう呟く。大和の胸元に顔を埋めていた小百合が訝しげに大和を見上げた。

「広崎……！ 貴様ツ……！」

本多が熱^{いき}り立つて大和の肩を痛いほどに力強く掴んだ。そのまま無理矢理振り向かせたところで、本多は固まった。熱が一気に冷めたようすに嘆息している。小百合に至つてはその顔色は蒼白だった。

「広崎、お前……、泣いているのか？」

大和は、泣いていた。顔から表情を根^{ねじ}剥ぎ落とし、双眼から涙をはらはらと落としていたのだ。

小百合は叫んだ。

「駄目！ 大和くん駄目！ わたしだけ見ていて！ それで良いのよ！ それが正しいのよー！」

大和にすがりつき必死に大和を“此方側”に戻そうとする小百合。その言葉は本多の怒りを再び振り起こすには十分過ぎた。

「全ての元凶は……、」

今まで俯いていた美穂が顔を上げ、それ以外何も見えないというふうに大和を見つめた。大和は、何も見ていない。

「全ての元凶は貴様か椿 小百合いいいいッ！ーーー！」

獣の咆哮のような叫び。その声色は怒り一色だった。

クラスメイトを傷つけられ、大切な友人を意のままに操っている

様を見せつけられ、それに怒りを感じぬ者などいるものか。

「五月蠅い！！」

悲鳴染みた怒鳴り声。しかし、本多は全く怯まずに小百合を睨み続けている。小百合も、本多に構わない。

小百合は自棄に明るい声色で大和に呼び掛けた。なんの感情でか、びくりと大和の身体が震えた。

「ねえ、大和くん？」

大和はゆらりとした動きで顔を上げ、小百合を見た。亡靈のようだ、と本多は思った。快活であつたはずのあの姿は今は無く、変わり果てた姿。山岡は泣いていた。宮城は目を逸らすまいと必死に歯を食い縛り、大和を見つめている。大和を信じた、自分の為に。

「わたしのこと、好きだよねえ？」

「…………」

大和は何故か何も言わず、沈黙を守り続けていた。小百合の表情に焦りと不安が走る。

「わたしの為だつたらなんだつとしてくれるよね？　わたしだけ愛

してくれているんじゃない?」

これは、問い合わせではなく確認。小百合の中では既に決定事項としてあることを確認しているだけなのだ。そして、大和はそれに淀みなく小百合の望んだ答えを返さなければならないのに。

「ツネえ! なんとか言つたらどうなのよ……」

ついに苛立ちが爆発し、小百合が怒鳴った。

その言葉に、大和はようやっと口を開いた。幼児のような覚束ない口調で、大和は予め用意されていたかのような不自然な言葉を紡ぎ出した。抑揚のない、不気味な口調。

「世界で一番愛してる」

それでも小百合は満足なのか、にっこりと笑む。

しかし、今度は誰にでもわかった。これは、大和の意思じゃない。

現に、大和は今も泣いているのだ。

「ねえ、じゃあ、わたしの為にあの人たち、殺して?」

小百合は甘えるように大和の腕に自身の腕を絡ませた。甘い香り。良い香り。いつまでもこの香りに包まれていたいと思つ夢見心地な

自分と、何処か冷静な自分がいる。

「 だ」

「 え？」

「いや、だ……」

小百合の表情は凍りついた。

5.1 調理部男子（後書き）

「」のまま駆け足で完結まで行きたい。

「いや、だ……」

大和が今、いつたい何を言ったのか、小百合には一瞬理解出来なかつた。一切の音というものが無くなつたように感じられて、そうしてまた戻ってきたときに、よつやく小百合はその言葉を理解した。今、嫌だと言つたのか。

「い、いや……？ ねえ、大和くん。なに、言つてるの？」
「やだ、やだ……、やだあ……」

嫌だ嫌だと首を振り、頭を抱え込んでへたりこんでしまつた大和。小百合は言い知れぬ激情が込み上げるのを感じた。

「なんで……！」「いい加減に、しろよ」

怒りに打ち震える小百合に誰かがそう言つ。凜とした真つ直ぐなその声に異様なほどに苛立ちを覚え、バツと勢いよく振り返る。

「あたし、勘違いしてた」

鋭く睨み付ける小百合の眼光を物ともせずそう続けたのは、夏輝だ。その隣には菖蒲もあり、小百合を見つめている。

「お前は悪くない？　とんでもない」

艶やかに、嘲笑。瞳に此処までの侮蔑を色濃く浮かべられ、怒りよりも先に羞恥を感じた。小百合はぎり、と歯を噛み締めた。

「害悪そのものだよ、お前」

虚しくはないのかと、夏輝は問うた。早く解放してやったじりじりかと、声なき声で菖蒲が訴えかける。親の仇を見るような目で、本多が睨み付ける。

失望、嫌悪、憎悪、悔穢。どろどろに入り雑じった負の感情を、一身に集める。

小百合は疲れたように笑った。

「会長をひたすら、綺麗よねえ」

いきなり何を、と皆が訝しげに小百合を見る。夏輝だけが当たり前だと胸を誇らしげに張つて、本多にどつかれていた。

「あなたも、あなたも、そうね、あなたも綺麗」

教室にいる女子を一人一人指差し、綺麗綺麗と小百合は子供のようく笑つた。素直に顔を赤らめる者もいれば、嫌味にしか受け取れず顔を歪めた者もいた。

「持つてるじゃない、誇れるモノ。わたしには、なんにも無かつたのに」

「するい」と小百合は呟いた。大和に歩み寄り、小百合は体温をわけあうようにべつたりと大和に身体を密着させた。とくとくと微かに伝わる振動と、自分よりも少しだけ高い温もりが心地好い。

「だから、良いでしょ。ひとつくらい。このひとつしか要らないから。そのひとつだけ、ぜんぶわたしにちょうだいよ」

大和の目は未だ虚ろだ。小百合は意に介せず大和に口付けた。誰かが息を呑んだ。

その瞬間、大和の瞳に光が戻り、口を開いた。

「可哀想に」

小百合の目に、怯えが宿る。

「可哀想に」

奇つ怪なものを見るように、皆の注目が、大和に集まつた。にやり、歪んだ口許。

「私の子供たちが、泣いているじゃあないか」

大和は口を開いたが、その声を借りて喋り出したのは、大和ではない“誰か”だった。

「あなた……！」

恐怖に戦くように、小百合は呻いた。

椿 小百合視点 14（後書き）

最近、誰かの視点のお話を書けなくなつてきている。ような気がする。

「可哀想に」

どれくらいほんやりとしていただろうか。誰かの声が聞こえ、美穂は辺りを目だけで確認した。

「可哀想に」

また、先程の声が聞こえる。喋っているのは大和。でも、何が可哀相なのか。何故、大和はそんなことを言うのか。

「私の子供たちが、泣いているじゃあないか」

此処でようやく、美穂は喋っているのは大和であるが、伝えようとしているのは大和ではないことに気付いた。

「あなた……！」

椿は“それ”が誰か知っているのか、急に大和から離れ、後退りして行つた。

「どうやって、此処に……」

「元々、入ること自体は簡単さ」

入る、とは何だらうか。私たちには分からぬ、また別の、重要な事を「人は知つてゐるのは確かだ。

椿はまだ落ち着きを取り戻せないようだ。顔は真っ青で、今にも倒れてしまいそう。それを大和 男は楽しげに見つめている。

「残念だなあ」

少しも残念そうに思つていい顔で、尚も男は椿を見続ける。

「君には少し、期待していたのに」

「つ、どにじがよ……」

顔色は優れないが強気な態度になる椿。男は全く動じていないうだ。クスクスと笑つてゐる。

「君はあまりにもこの世界を壊しそぎてしまった。あまりにもやりすぎてしまつた。あまりにも、」

「黙つて！」

椿は何を知つていて、また、この男は何を知つてゐるのだろうか。話についていけず、美穂たちは黙つて見守ることしか出来なかつた。

「……あまりにも不安定に、ボロボロにし過ぎた。君が、此処に居続けることが出来ないほどに」

「なんですか……？」

もう男と椿しかこの教室に居ないように喋りつづける二人。人は沢

山居るはずなのに、あまりにも静かな教室。響いているのは一人の声のみ。

「…………」

「…………」

「答へなさいよっ！」

あれ程までに強気なのに、椿は決して近付こうとはしない。その肩は僅かに震えている。恐れからか、怒りからか、それとも別の何かからか。それは椿にしか分からない。

「それは、君が一番知ってるんじゃないかい？」

「つな、」

「“君が”この世界を壊した。理由なんてそれだけで十分だらう？」

反論出来なくなつた椿は押し黙り、俯いてしまつた。男はそれに構わず、目線を美穂に向けた。美穂にとつてそれは、まったくの不意打ちだつた。

「君にも悲しい想いをさせたね」

「えつ……あ……はい……」

どう答えて良いか分からずに、口からは曖昧なものしか出でこなかつた。

「此処に居る全員に、迷惑をかけてしまったね」

少し悲しそうな顔をする。

結局、この人は誰なんだろうか。

「あの、あなたは誰なんですか」

「ああ、言つてなかつたかな。私のこと」

意地悪そうな、何か良からぬ事を企んで、いそがしい笑み。何をされる訳でもないのに、見ているだけで怖い。

「私はここの世界だとそうだな、『管理人』かな」

美穂はイマイチその言葉を飲み込めず、しばらく突つ立つていた。

椿 小百合視点 15(前書き)

今回は片岡が書きました。

「“君が”この世界を壊した。理由なんてそれだけで十分だらう?」

何を嘯ぐのか、と小百合は苦々しく毒づいた。馬鹿を言つのも、大概にしる。

何が“君がこの世界を壊した”だ。この世界に小百合を放り込んだのは、小百合の為すことを看過し続けたのは、他でもないこの男自身だと言つのに。

「私はこの世界だとそうだな、『管理人』かな
「何が……、」

何が管理人か。思わず小百合はそう呟いていた。聞こえたのか、聞こえなかつたのか、男は笑みを深めただけだった。

例えば、数多の書物を管理する人間がいたとして、その数多の書物の中にはとてもとても重要なものが混ざっていたとして、その“重要な書物”にこれまでの自分の全てを揺るがすような事が記されていたとして、それを感情のままに破り捨ててしまったとする。

果たして、この行為は許されるのであるつか?

答えは否。許されるわけがない。許されて良いわけがない。

何かを管理する人間というものは、その管理するモノに関する事柄に対しては全て^{すべから}公平に接するべきなのだ。何処かに情を傾けては、その時点でその者は管理人としての資格を剥奪されている。

皆は意味がわからないと困惑していたようだが、坂田だけは何か命点のいったような顔をしていたが、自分だけは騙されない。

(だいたい、)

あの男は言っていた。

私の子供たちが、泣いているじゃあないか

“私の子供たち”と、確かにそう言っていた。

管理人なんかじゃない。あの男は言わばモンスター・ペアレントだ。小百合に謂われのない言いがかりをつけ、中傷を投げ付ける。意味のわからない持論を振りかざし、如何にも口こそが正義なのだと干渉しようとする。

ほうひ、 “正に” 、じゃないか。

要は“管理人”とやらを気取っているだけなのだ、あの男は。そして、小百合を陥れようとしている。

善悪のものだよ

馬鹿を、言つなど。

(善悪は、あの男。そりでしょ'つ?)

そして、お前たちも自分と大和にとつては、善悪なのだ。
夏輝たちにとつて小百合が“そり”見えるのは、それが夏輝たち
からの視点だからだ。

視点によつて、話と善悪の対象は変わつてくれる。

夏輝たちのよつな者側から見れば、小百合はとんでもない悪人に
なつてゐるのだろう。しかし、小百合からしてみればやつと見つけ
た愛すべき人を奪われようとしている悲劇のヒロインのよつな心境
だ。

「わたしには、大和くんしか、いないの!」

みんなはたくさんもつてゐる。これはわたしの。たくさんもつてな
い、わたしだけのもの。
いらないの? ちよつだいよ。あげる。あげない。かえして。わ
たしの。

「大和くん……」

きっとあなただけは、わたしを愛してくれるでしょうか？

温かかった。

自分を守ろうとするその見えない手が。

情けなかった。

隠され守られ、包まれるだけの自分が。

真っ白な空間。視界は覆い隠され、真っ黒だった。少しでも大和を安心させるためだろうか。大和の目を覆う者のその姿は大和の母、和だつた。

しかし、大和は気付いていた。今、大和を守っている者が和ではなく、あの男だということに。

だが、そのことに感付かれるのはあの男の本意ではないだろう。敢えて大和はその疑惑に乗つた。

「母さん、俺、苦しい」

柔らかな重みを持つたそれが、大和を慰めるようにより一層包み込んだ。温かくて、温かくて、泣いてしまったかった。

「大丈夫よ、守つてあげる」

だから、此処から出でていってはいけない。それはある種の束縛だった。大和を縛り付け、全てを自分の思い通りに運んでしまおうとしている。

大和は純粋だった。

しかし、優しいわけではなかつた。無邪氣ではあれど、全てを無視して何かを突き通せるほどの強さを持っていたわけではなかつた。だから、自分一人だけを信じていた。

宮城と大和は根本的な部分がよく似ていた。ただ一つ違うのは、大和のそれは酷く重苦しい。

宮城とは違い、産まれてきたときから、大和はそうだったのだ。その違いは当たり前と言えば当たり前だらう。

「母さん、俺、たくさん友達が出来たんだ」「そうなの、良かつたわねえ」

和が微笑む気配がした。大和は自分の視界を覆うそれに、手を重ねた。

「俺が友達になりたいって思つた奴らだから、きっと良い奴らなんだ」

「そうなの、きっとそうね」

宥めるように、背を一定のリズムで叩かれる。心地好いそれは眠

りを誘うつよつだつた。

「母さん、俺、今助けてやりたい友達がいるんだ
「、そうなの」

反応が少しだけ鈍くなつた。

大和は強引に和の手を外し、和 男の顔を見た。男は寂しそうな、切なそうな顔で大和を見つめている。行つてくれるな、言つてくれるな、と声なき声が叫んでいる。

大和はそれを思いやつてやれるほど、甘えたがりでは無かつた。

「だから、もう良いよ。父さん」

世界が、崩れた。

「……あまりにも不安定に、ボロボロにし過ぎた。君が、此処に居続けることが出来ないほどに」

声が、聞こえる。

「私はこの世界だとそうだな、『管理人』かな」

父さんは、うそつきだ。大和は呟いた。その瞬間、大和の姿をした男は切なげに顔を歪めた。

「いけない、やめなさい。戻るんだ、出てきてはいけない」

男は焦りを見せながらそう囁いた。怪訝そうな他の子供たちの眼差し。

ああ、うん、そう。もう少しだね。大丈夫、もう子供じゃない。子供だけれど、全て守つてもらわなきゃいけない歳ではない。

父親ならば、子供たちの成長は諸手を挙げて喜んでくださいな。

「……ごめんな、俺、反抗期なんだ」

そう呟いたのは、大和だつた。しかし、男はいた。大和の横に、佇んでいた。寂しそうに、寂しそうに皆を見つめている。相変わらずその容顔ははっきりとせず、朧氣だつた。

「、じゃあ、連れていくさ。守ることがいけないことなら、連れていくてあげよ！」

男はさも名案だとでも言いたげに声を明るくして言った。大和は

静かに首を横に振る。

本多たちは、混乱していた。突如、人が変わってしまったような大和が元に戻り、気が付いたら大和の横には怪しげな見知らぬ男がいたのだ。混乱するに決まっている。

それぞれの思いは異なっていた。しかし、もうすぐで終わりが来る。それだけは、そんな思いだけは一致していた。

「駄目だ」

椿は、俺の友達なんだ。そう言つて微笑む大和。その言葉に諦めたのは男。絶望したのは小百合だった。

「や、大和くん……、友達？ ねえ、違うでしょ？」「何が違うんだ、椿。お前は俺の大切な友達だよ」

どうして、と小百合は呆然と呟いた。宮城らはそれを見て、心なしかほつとした顔をしていた。漸く、本当に大和が自分たちのもとへと戻つてくれたのだと。

その様を見ていた男はじやあ、とやはり寂しげに呟いた。

「何も出来ないから、だからせめて、魔法だけは解いていてあげよ」「うわ

この後、どうするかはお前たち次第だ。そうして、男は消えていった。

男の言葉を聞き、小百合は責やめた。淡い光が、小百合を包んでいく。

この先、いつたい何が待つていいとも、この心は変わらない。

大和はそう確信していた。

「何も出来ないから、だからせめて、魔法だけは解いていてあげよう」

「」の後、どうするかはお前たち次第だ。そうして、男は消えていった。

“魔法”などと揶揄されたそれがいつたい何を指すのか、わからない小百合では無かつた。

男が言葉を告げ終わると同時に、小百合の全身が淡く光を帯びた。大和は目を逸らさない。小百合は悲鳴を上げた。

「いやああああっ！ 嫌！ お願いやめてえっ！…」

そんな小百合に構うことなく、光はその強さを増していく。皆がいつたい何が起ころのかと固唾を飲んで見守っていた。

やがて、小百合を包む光が目を開けていられないほど目の眩さになつたとき、変化は起こつた。

「あつ、ああ……！ いや、嫌あ……！」

鈴を転がしたような愛らしい声は、確かに小百合のものだ。しかし、其処にいるのは見知らぬ少女だった。

「みな……で……！ 見ないでええええッ！……！」

小百合と思しき少女は泣き叫び、頭を抱えて座り込んでしまった。

魔法とは、このことだったのかと、大和もさすがに啞然としていた。坂田は目を見開いていた。宮城は口をポカンと開けている。本多は何故か水に濡れている。

「可笑しい、夢が覚めんぞ！」

何処まで行つても本多は本多だつた。

菖蒲は頭の容量を越える余りの事態に逆に冷静になつたのか、生徒たちを落ち着けていた。夏輝は呟いた。

「整形？」

そう思うのも仕方のことなのかもしれない。それほど今泣いている少女は、小百合とは似ても似つかぬ少女だったのだ。

小百合は栗色の艶やかな髪に、琥珀色の大きな瞳。思わず息を呑むほどに美しい容姿。

少女はありふれた黒髪に黒い垂れ目がちの瞳。可愛らしくはある

ものの、探せば何処にでもいるようなレベルの容姿だ。

動搖が漂う空氣の中、小百合はただただ震えていた。見られた。見られてしまつたのだ。小百合の秘密をいつも小百合を奮い立たせるように香っていたあの甘い香りはもうしないし、あの美貌ももうきっと戻つて来やしないのだろう。これで、自分が大和に愛されるような要素は全て消え去つてしまつた。加えて大和はもう“夢”から覚めている。
愛される？ 愚かしい。

（嫌われ、る……）

愛が失せるだけならば、どれほど良かつたろう。大和を好き勝手してきた小百合が大和に愛される道理も、大和に嫌われない道理もありはしなかつた。

「菖蒲、」
「……うん」

本多の呼ぶ声に頷きを返した菖蒲は未だ驚いている夏輝の手を引き、大和たちに言った。

「……騒がしくなってきたから、生徒会室に移動しましょう。先生たちが来ても、少しは時間を稼げるはずだから」

坂田は夏輝たちの後ろに並んだ。自分を立たせようと伸ばした大和の手を、小百合は拒んだ。悪あがきだとはわかつても、愛しい人にこんな醜い姿を見せたくはなかつた。

「……騒がしくなってきたから、生徒会室に移動しましょう。先生たちが来ても、少しば時間稼げるはずだから」

会長はそう言つと、一足先に部長を連れて教室から出て行つた。美穂もそれに続こうと歩きだす。

教室は今は椿の泣き声と、生徒の動搖の声が聞こえる。しかし、誰も椿には寄らない。女子はともかく、男子すら近付こうとしないのだ。

結局、判断基準は顔なのだろうか。

椿を見れば、大和が連れていこうと手を出しているが拒んでいる。

「行こう、椿」

「い、や……嫌……！」

頭を抱えてずっと座り込んでいる椿。動いてもらわないとまずいが、だからといって力ずくで連れていく訳にもいかない。

美穂は人とのコミュニケーションが下手なので、こんなとき、どうすれば良いのか分からなかつた。

「椿」

もう一度、大和が名前を呼ぶ。椿は尚も拒否し続いている。

「行」」「う、椿」

「放つておいてっ……」

全くと言つて良いほど埒が明かない。でもあの一人のところへは行けない。困ったものだ。

「わたしを……放つておいてよ……」

「放つておけない」

大和の声で、椿が少し顔を上げた。大和を見てはいながら、先程よりは大分良い。

「椿は俺の大切な友達だって言つただろ。友達が困っているのに、放つておけない」

今度こそ、椿はしっかりと大和を見た。まだ顔はあまり見えないものの、視線は大和に向けられていた。

「……嫌いになつてないの？」

「嫌いになる？……なんでだ？」

「なんでつて……。わたしは大和くんに、悪い」としづやつたし……」

「例えば」

「た、例えばって……」

返答につまる椿。大和が懲りてているのか、天然が炸裂しているのかよく分からぬ。

「怪我、とか……」

直接的に椿が手を出した訳ではない。だが、元を辿れば行き着く先にいるのは椿。責任か何かを感じているのだろうか。

「怪我? 何のだ?」

「手とか…足とか……」

「あれは俺の不注意だぞ」

「……そつ、それにこの姿だつて

全く違うし……。ボソリと呟く間に言葉を出し、また俯く椿。

「姿が変わらうと、椿は椿だ。なんで嫌いにならなきやいけないんだ?」

驚き、目を泳がせる椿。そんな椿に、大和は手を差し出した。

「行こう、椿」

笑顔。皆を包み込んでくれそうな、あの笑顔で、大和は手を差し出していた。

「…………うん」

椿は大和の手を握り、立ち上がった。

やつぱり、大和は大和だと、改めて思った美穂だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9530x/>

逆ハーツ子 が あらわれた！（仮）

2011年12月27日22時47分発行